女鑑

第十六年第十三號





歳末の御贈答品

として最適當せる商品切手の外

香油、香水、白粉、石鹸、手巾、肩掛、ボーア、襟巻、半襟、帽子、帛紗、風呂敷、銀貨入、など種々取揃置申候間澤山御注文被下度奉願上候。敬具。

尚地方より御注文の案内として『冬衣裳』と題する美麗なる冊子、印刷致候に付御一報次第早速送呈可申上候

東京市日本橋區駿河町

三越呉服店

振替貯金口座番號三百番

女鑑

第十六年 第十三號

目次

口繪

▽千駄ヶ谷八幡の雪 ▽伊藤侯の家庭 ▽江木博士の家庭 ▽田中博士の家庭 ▽閨秀畫家と美術教場 ▽犬と猫 ▽名所の冬 ▽雪げしき

千駄ヶ谷八幡の雪



男爵 德川厚君撮影

伊藤侯の家庭



江木博士の家庭



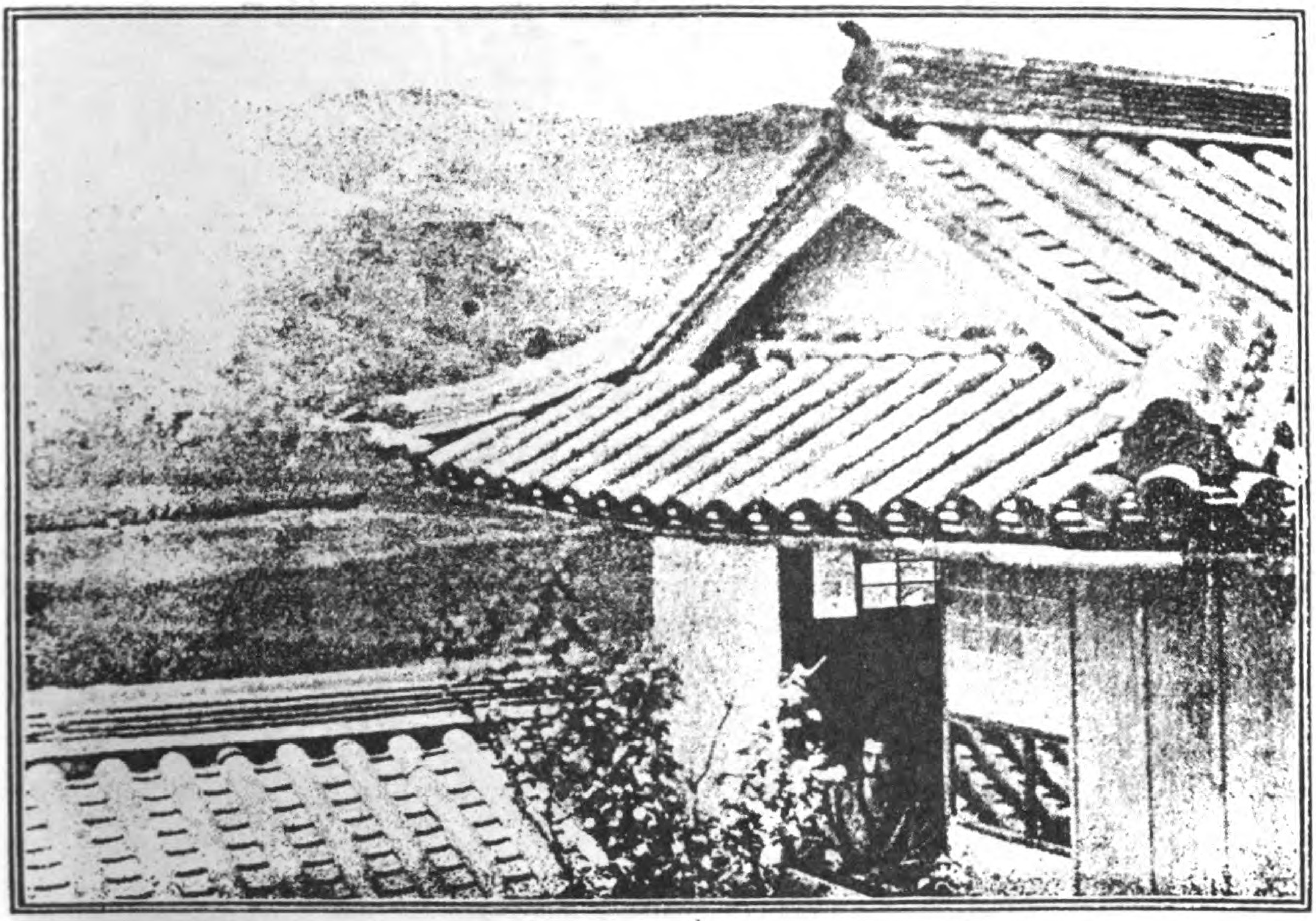
法學博士　江木衷君

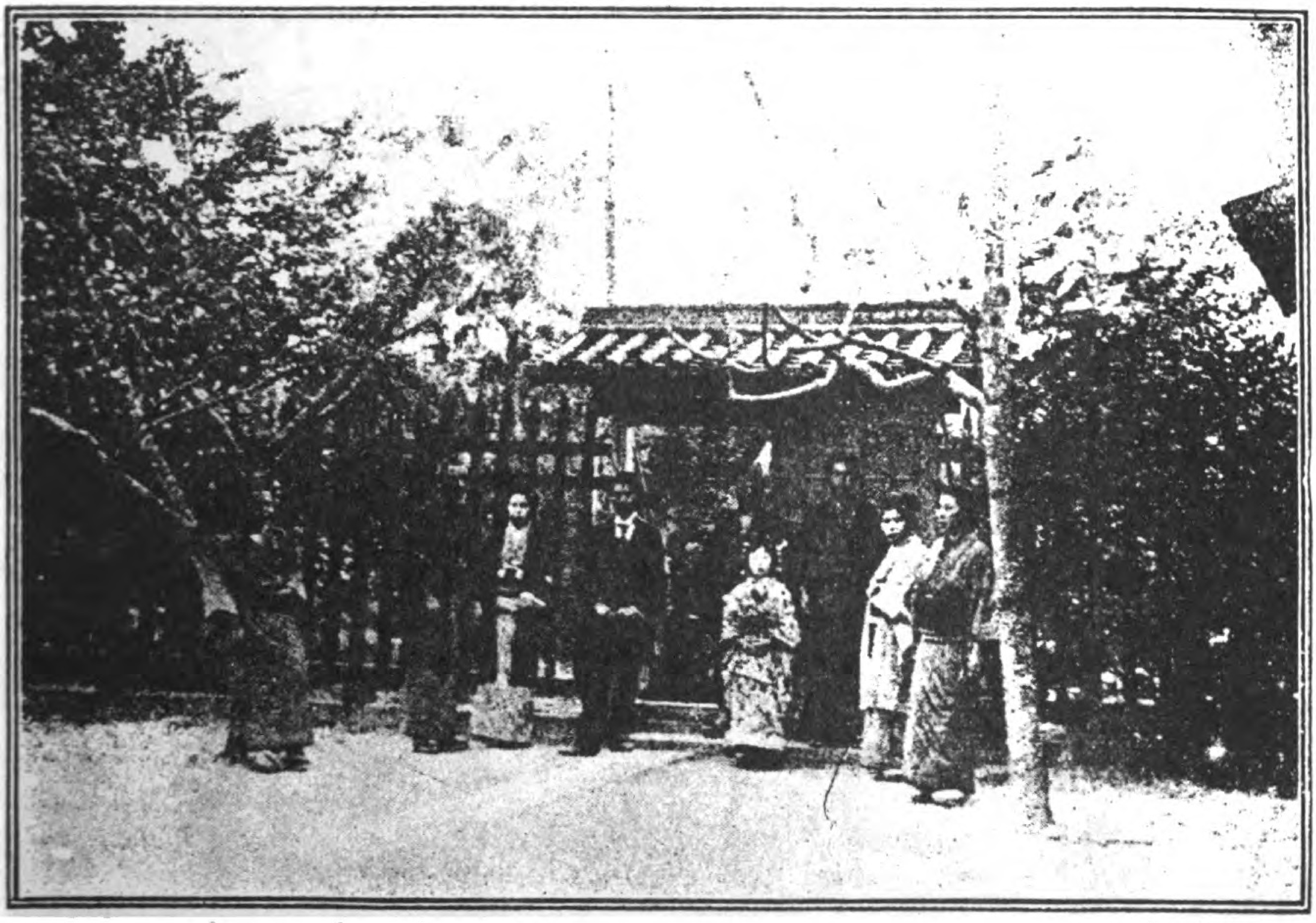


令夫人　榮子君

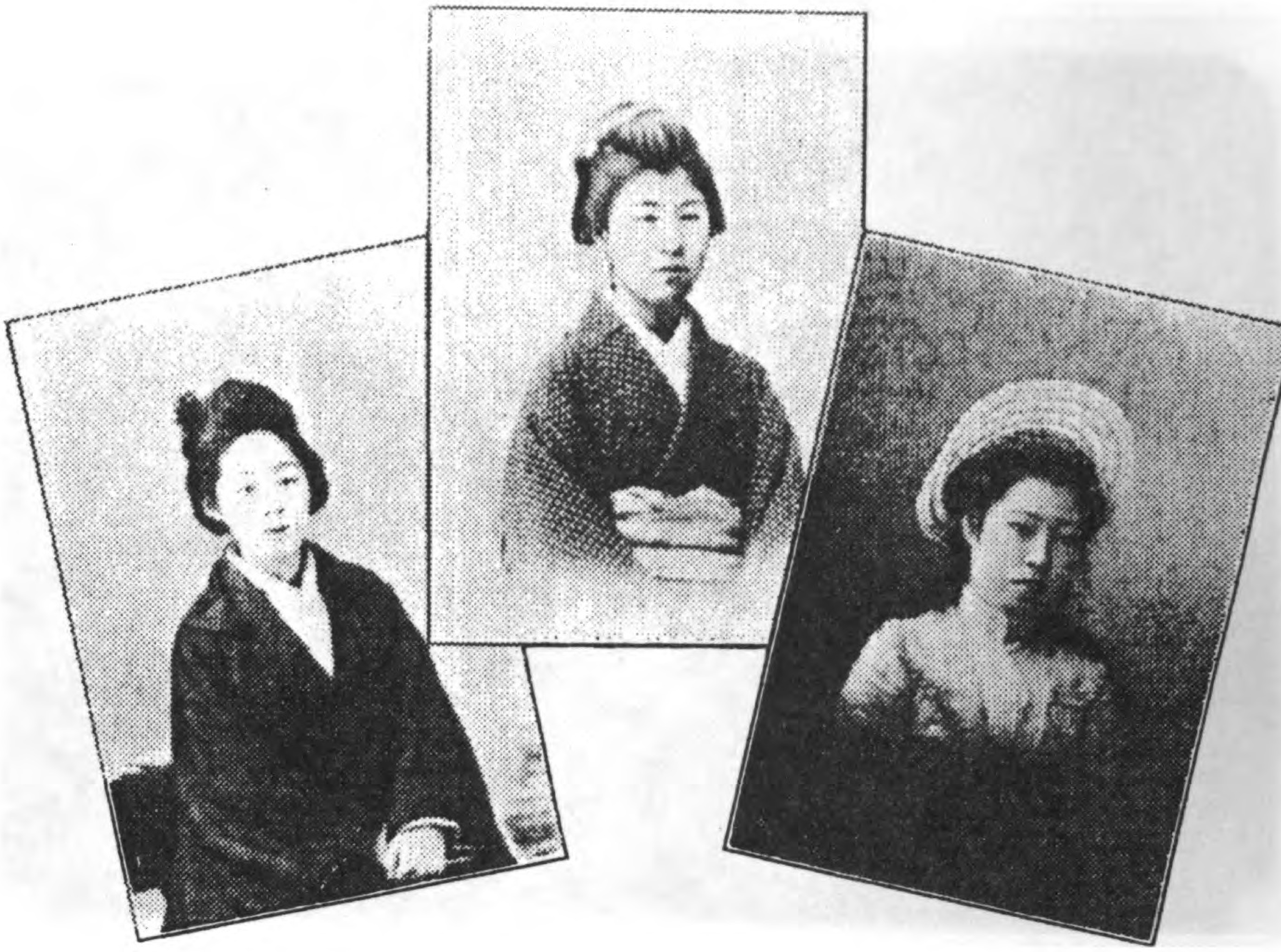
田中博士の家庭

理學博士　田中正平君

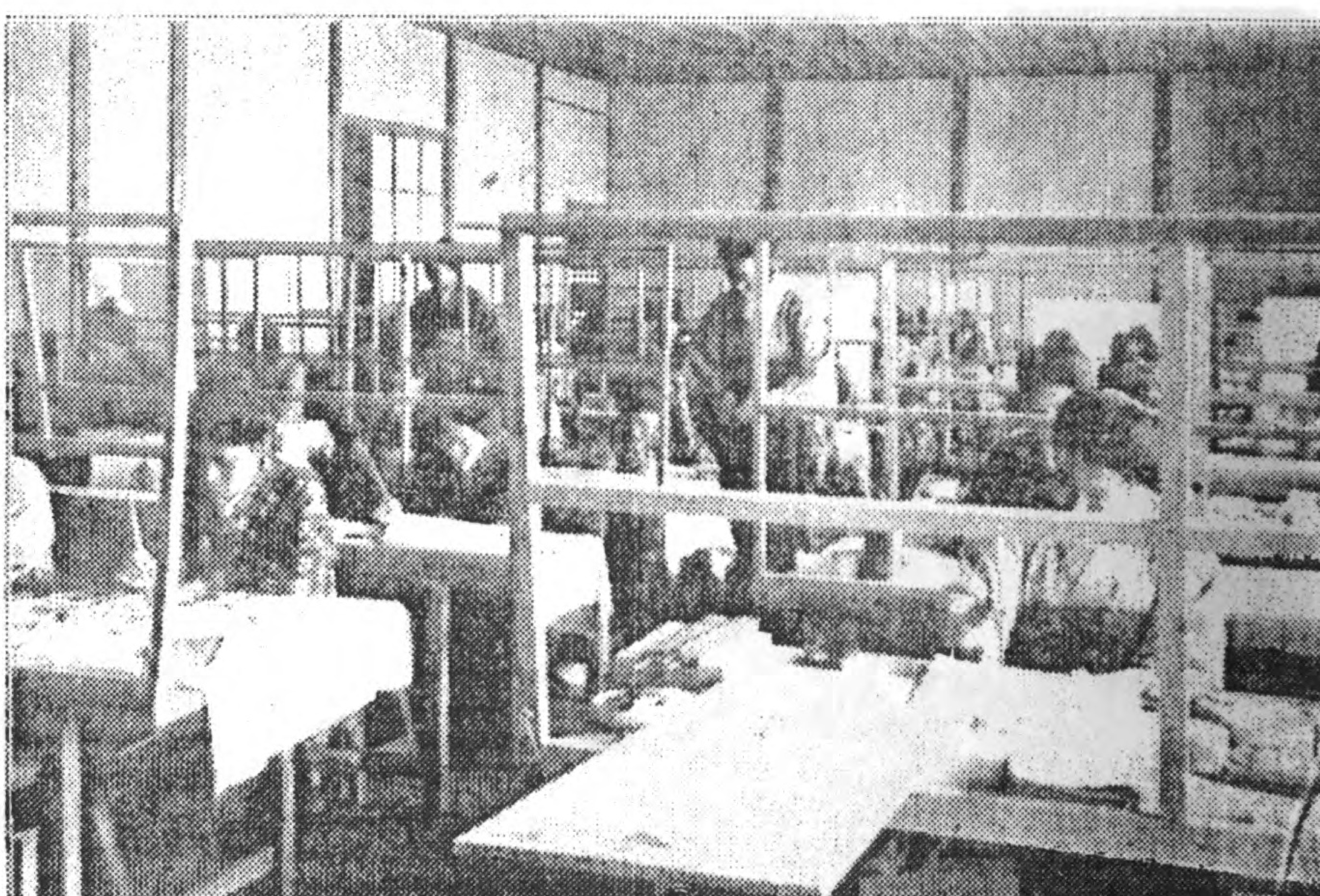




閨秀畫家と美術教場



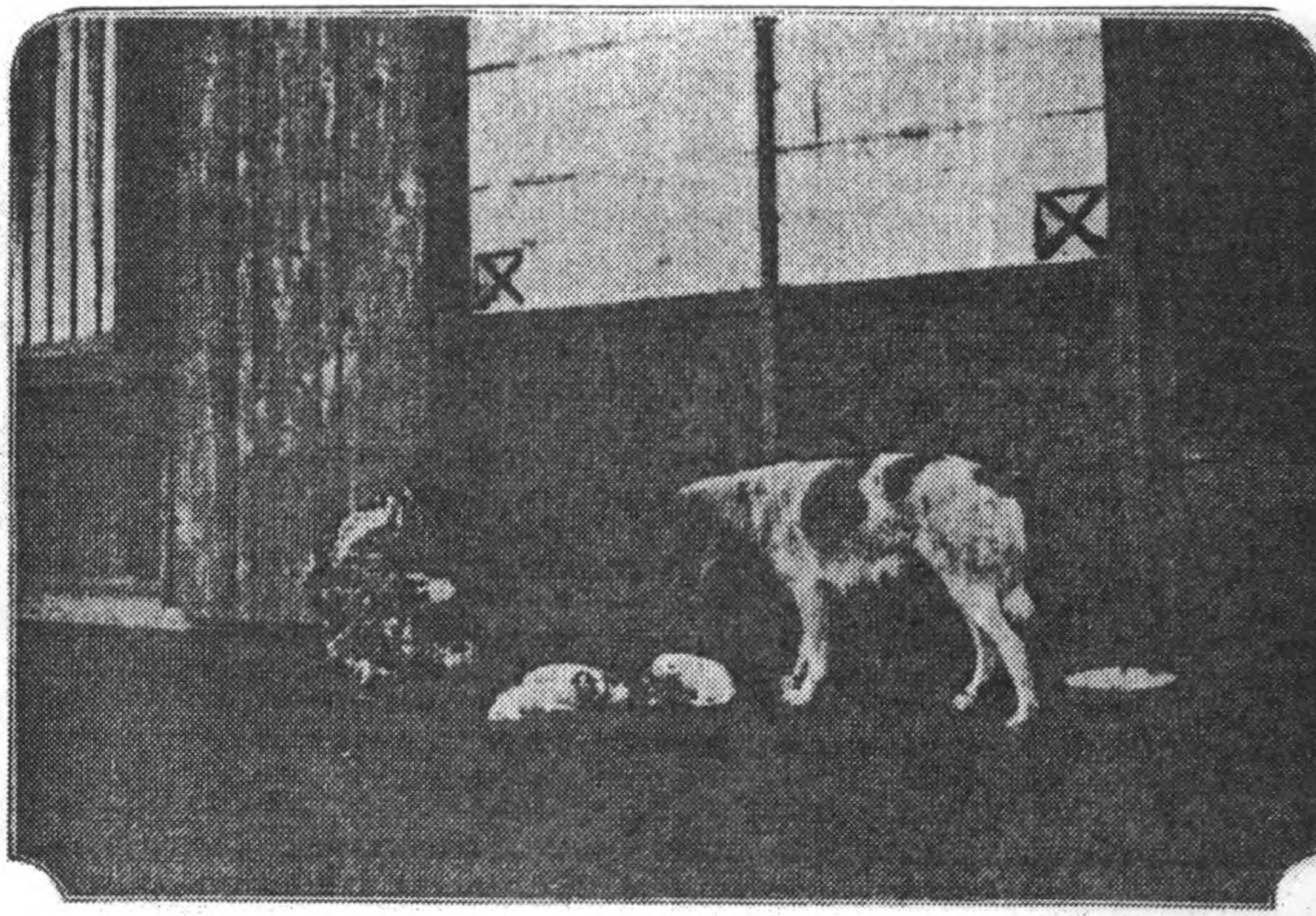
右より　久松子爵令孃文子　永野靜畝　馬杉青琴

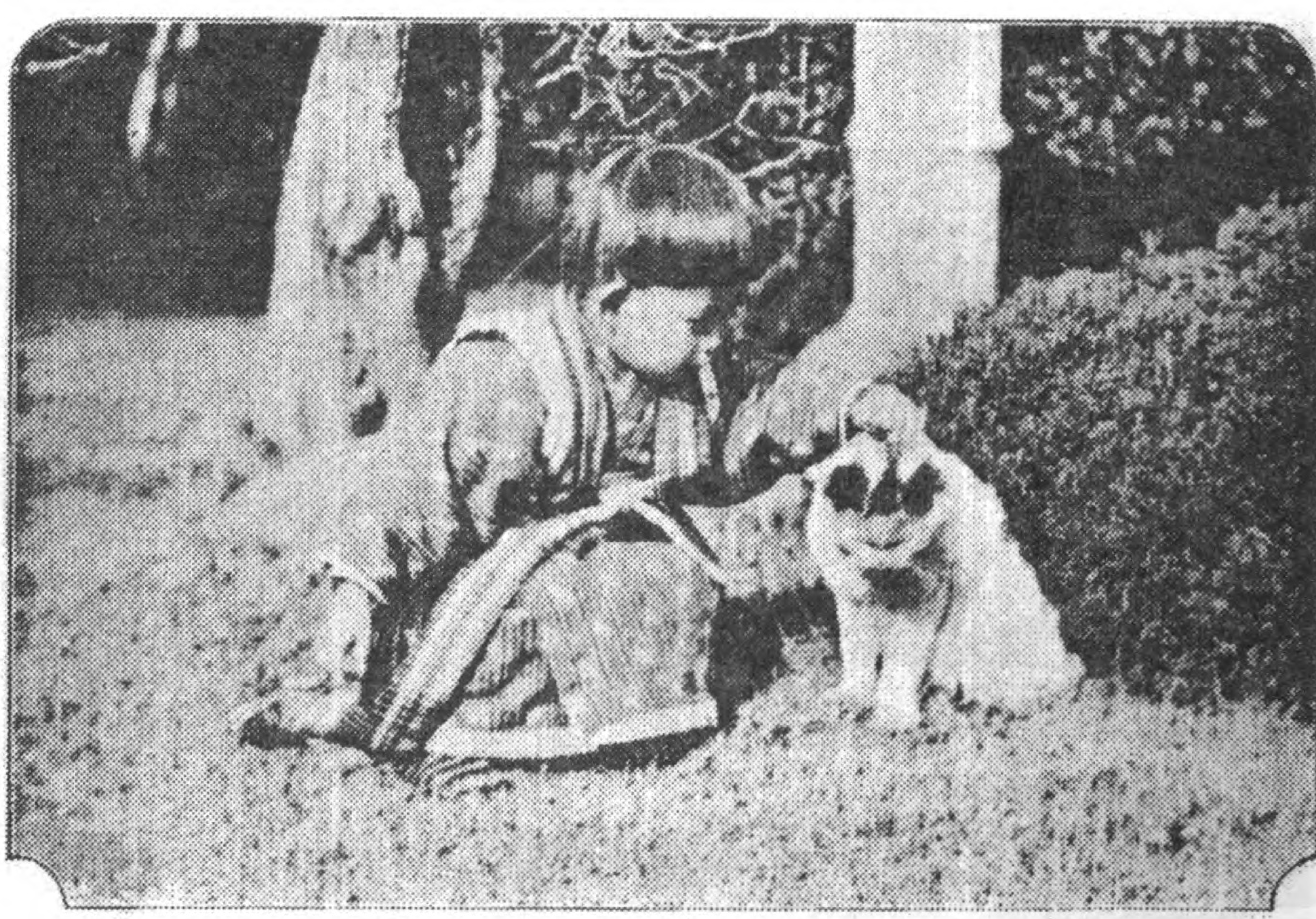


女子美術學校日本畫教室

犬と猫

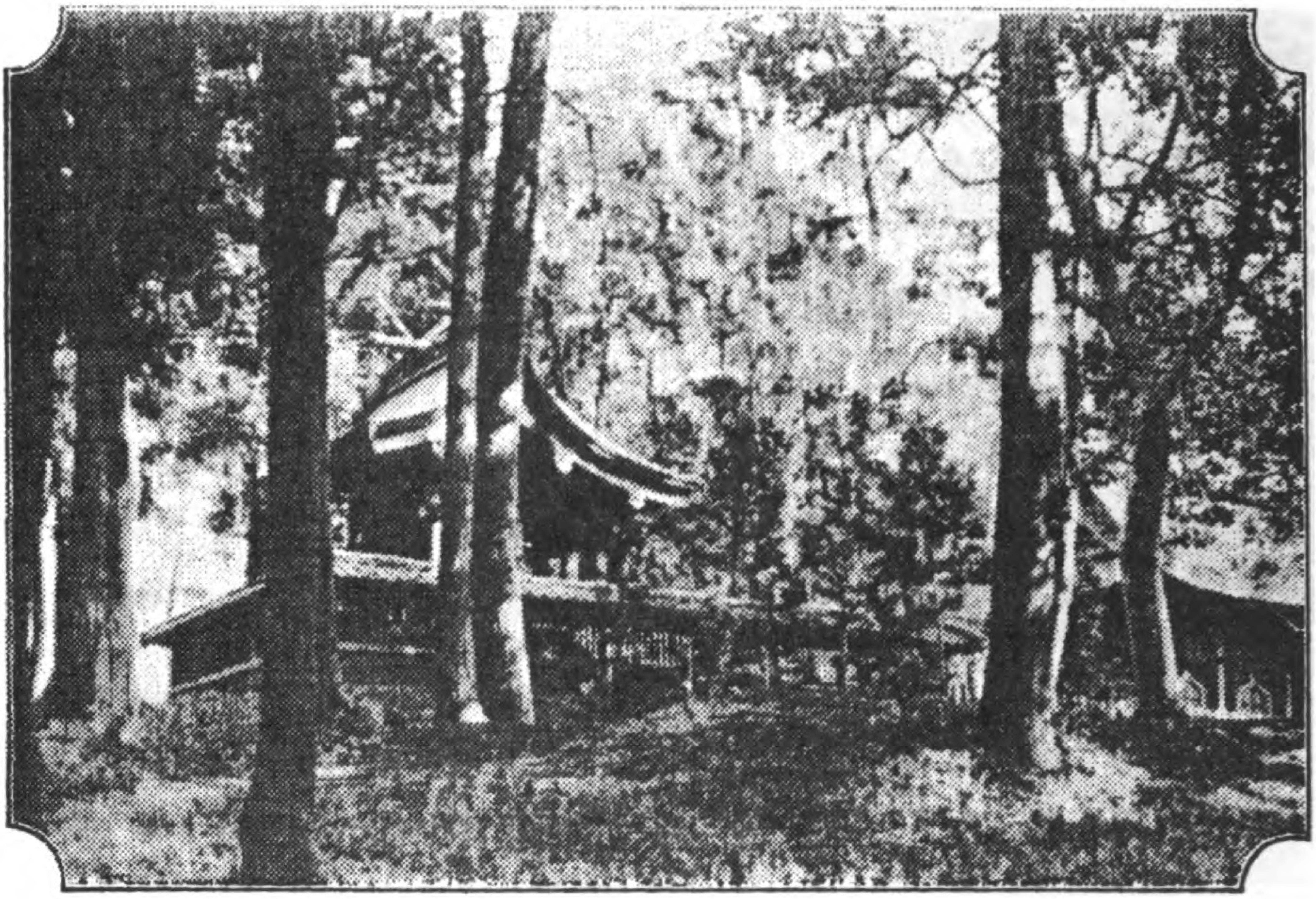
幼兒百態（七）



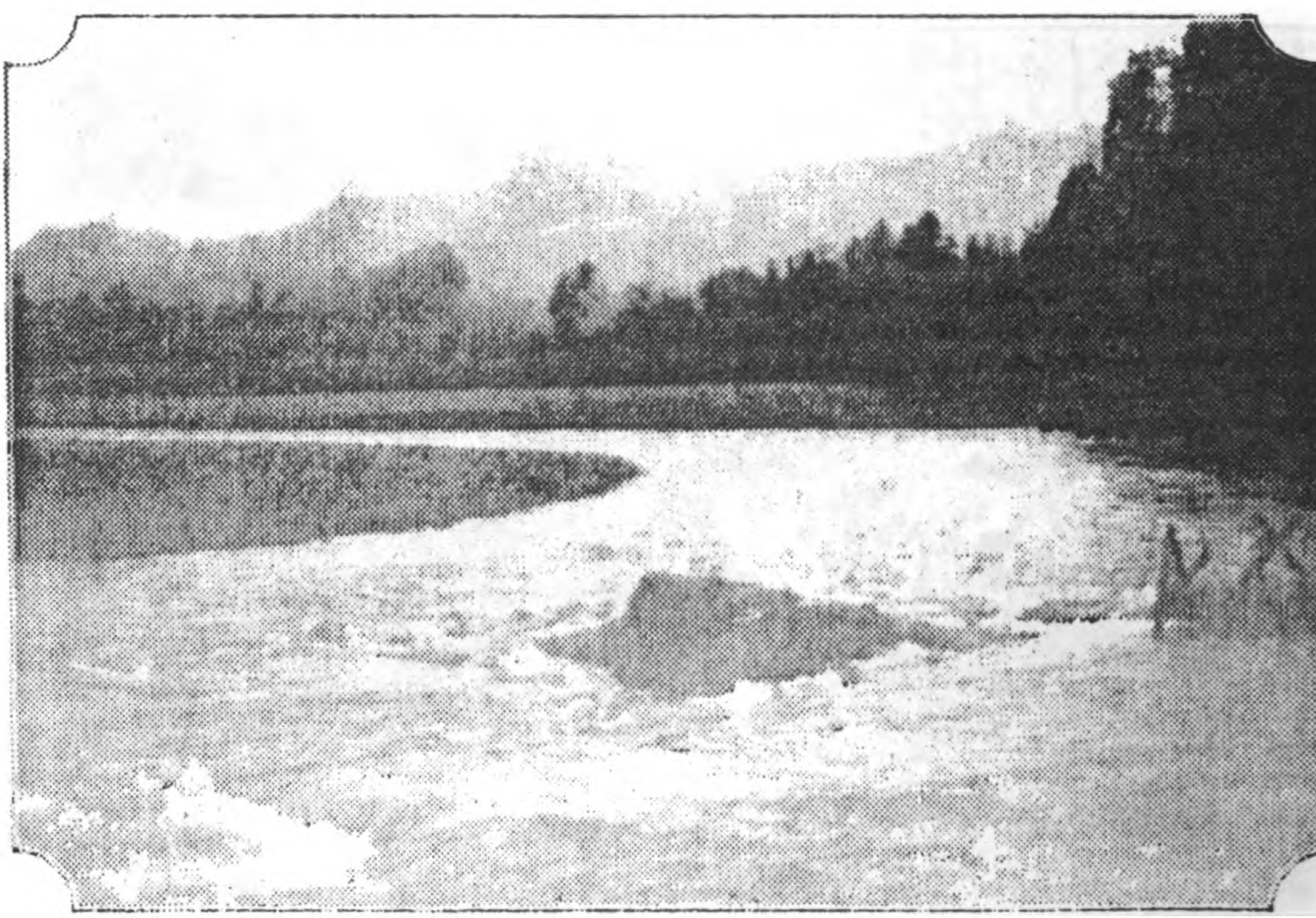


井伊直方君撮影

名所の冬

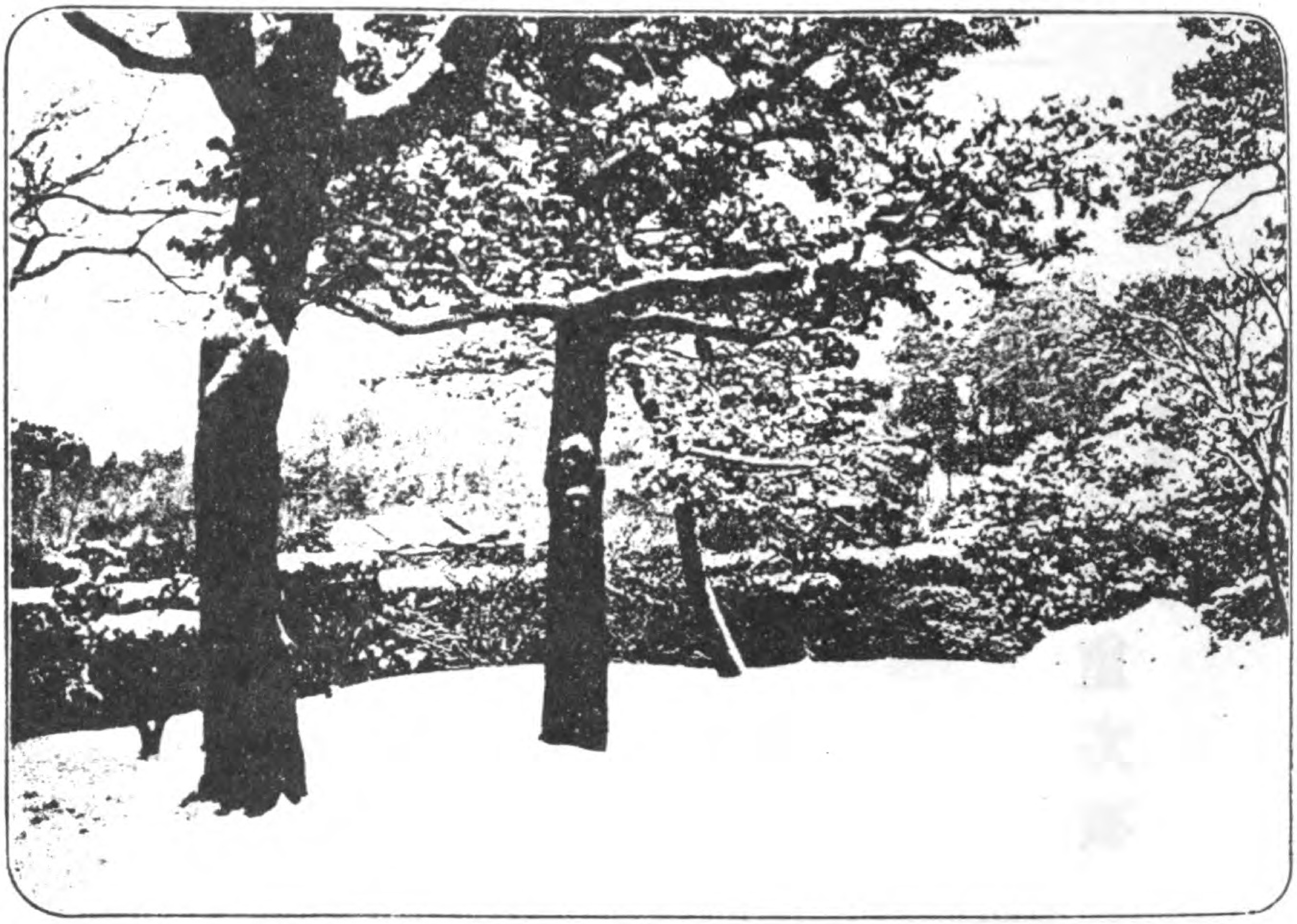


新宿十二社



青梅多摩川

雪げしき





徳川男爵撮影


御用
諸學校
體操器械
TRADE S.A MARK
ANDO-SHOTEN
No.5
Urajimbo-cho
KANDA,
TOKYO.
S.A.
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、九六〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
御用
體操器械
体育用品
電本 484
東京神田裏神保町五
S.A. 安藤商店
確實
製造販賣
ピンポン改良室内テニス（旅行用）
一號一箱 二、〇三〇
二號同 二、二三〇
三號同 二、三五〇
四號同 二、五一〇
間用テーブル上等一臺 拾參圓四拾錢
並等一臺 十二圓
テニス用ラケット一組四本
一號大人用 一二、五〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同 四、七〇〇
婦人用（小學用） 七圓
同二號（一號） 六圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號 拾參圓參拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
七號 五圓貳拾五錢
テニス組一張一、八八〇ヨリ三、一一五
〇迄各種あり升
東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四



としのくれ

苦と叫び。樂といふ間に。早くも年は暮れたり。この月のみはいかなる人も騒ぎたちて。春を待つ營みに忙がはしく。人の心の見えすくも。この月の騒ぎなりけり。さればかの麗はしき家居を見よ。たとひ祝儀の器は十分ならず。春着の衣は揃はずとも。一家のつぢつまよく治まり。心の方圓まるく整ふ時は。季節、節句のふし〴〵は、團欒を貫くの樂しき結び目となり。その都度悦びを新たにせずといふことなし。一歳を加ふるは。老父の額の筋一つ増し。鬢の毛の一筋白くなることなれど。孫の成人と子の成業とは歩々に幸ひを重ねて。家の祉福を増さゞるはなし。父母いよ〳〵老いて。其子いよ〳〵幼な氣になり。終生親和の氣を軟かにして。一家に絶えて硬氣なければ。家庭は飽までも圓滿に治まるべし。その圓滿なる家庭には。一年の間も樂長し。さても年の暮に。その年の無事を喜びあふ家庭はいくばくかある



女子の精神教育

文學博士　村上專精

世俗の所謂上流下流は、形而下に於て分ける傾があるが、之を形而上より分けて見れば、形の上等人種にして、其實は下流女子といふやうな仕樣のない人もある、又其位地其狀形は下流人種でも、其精神たるや、全く上等人種といはれて居る人間が世の中には、澤山あるが、教育を受ける女生は、形式は已にそれ〳〵定つて居るが、教育を受けて、益々發達を望む處は何う云ふ處に在るか、即ち精神の一つにある、無形の精神を發達せしめて、有形の地位が上流社會に生れたら、地位とともに精神まで高尙にならなければならぬ、品性並に技藝共、何の爲す處もないものは、形上流にあつても、其精神と云ひ、行ひといひ實に天下に耻ぢなければならぬ、それ故に教育の手段は、教育者も其精神で居ることは勿論なれど、被教育者も其精神を以て、精神の發育といふことによく注意せられんことを望むのである、總ての事が有形と無形と、精神と肉體と、兩方から調和して行かねば完全なる、人間にはなれぬ、

併し精神の教育といふことも、大抵肉體上から萬事比較を取つて考へて見ねばならぬ、教育の必要は生理上體格上から考へて宜しい、何故なれば我々の壽命は生理上大抵どの位保たるゝものかと云ふに、人間

は生後適當の衛生をなし、萬事都合よく行けば、約百年位生きらるゝものである、然るに實地を調べて見ると、我々日本人民の壽命は、今日は平均三十二歳であつて、人生七十古來稀なりと云ふが、如何にも學理上の研究と實地の取調とには、約七十年の差を生じて居る、是れ全く適宜の衛生といふものが行はれて居らぬからである、それで今日では衛生法といふのが喧しくなつて居る、然らば昔は衛生法に注意しなかつたかと云ふに、今より三十餘年前に、衛生が嚴密に行はれて居つた、若しも人間の壽命が、學理の上からも、實地の上からも、三十年と云ふならば、衛生法の必要はないが、學理上百年生きらるゝものが、實際三十年と云ふのであるから、そこで始めて衛生の必要が起つて來るのである、又我々の精神も、倫理上から云へば、天性は極めて善良なものである、我々の靈魂は神から授かつたものとすれば、天性は決して惡い筈はないので、人の心を色に譬ふれば、恰も純白玲瓏、水晶の珠のやうなものであるが、其實際は如何、我々の心は少しも汚れて居らぬのであらうか、結構なものであらうか換言すれば良いことが好きで、惡い事が嫌ひであらうかと云ふに、簡單に之を言ふと、我々は惡好きの善嫌ひで、決して淨いものとばかり云へないのが、今日の社會の現象である、それは今更くどく云ふまでもなく、日々の新聞が證明して居る、

丁度我々の身體が、學理上では百年の壽を保ち得らるゝが、實際は三十年といふ短日月であると同じく我々の精神も倫理上では天性善なるべきものが、實際は親に、兄弟、夫婦の間にさへ、直に包み藏さねばならぬといふやうな汚い心を持つて居る、即ち心の食物が惡いからである、身體に於て、理論と實地との差は、衛生の如何にある、衛生の不注意と云ふことも、千差萬別であるが、其多くは食物にあるので、我々の生命を保つのも食物で、生命を縮めるのも食物で、丁度藥品が毒にも藥にもなると同じである、古人

も病は口より入り、禍は口より出づといはれた通りで、多數の人間は食物の爲に生命を奪はれて居る、事の原因は意外なる處にあるもので、倫理上立派な天性であるが、實地は惡好の善嫌ひといふ結果を來して居るのは、どう云ふ譯か、即ち精神上の食物が惡いからである、精神上の食物はどう云ふものかと云ふに、無形の心の食物は、又無形であるので、即ち耳目に觸るゝ見聞である、

人は生れた時は淸い心であつても社會が兎角腐敗して居る爲め、善い事を見聞することが少く、自然に惡習慣が付いて居る、それで立派な、完全な聖人とか云はれる、所謂天性に復歸せしむる方法は何かと云ふに敎育である、此敎育は無形の天性をも慥かに變へる事が出來る、我々人間の身體は、如何に技藝に達した人間でも、生れながら異つた點がある譯ではない、生理上一つの變りもない、多くの技藝、例へば能書であらうが、之を書いた人とても、決して指が十本も二十本もあつた譯ではなく、矢張り五本の指をもつた普通の人間である、又骨格も特別に大きかつた譯でもない、然るに探幽や應

家庭の圓滿策

◎法と敎へ　家庭の意義をお咄し致すと、家族の住居する場所と云ふ事と夫に家族の守るべき法則の附隨してある事を意味して居ると信じます、故に家庭には家族に示すべき法のある事で、主人主婦を始めとし、兄弟子供婢僕まで此の一貫せる法に從はねばならない、夫から又家庭には法の立つて居る上に、尚敎へると云ふ事が必要で、之がなければ家庭の圓滿は見られないのです、

◎家庭に法の立たぬ爲め　私は醫師の立場から、家庭に於ける肉體的と精神的の二つに分けて觀察をするのに、現今都會に住んで家庭を作つて居るものや、及び物に不自由なく生活して居る家庭の人は、實に哀れむべきで不完全なる體格で、又必ず夫れが短命に終るのです、人間僅か五十年と云ふが、人間は衞生法の宜きを得れば、先づ百歳の壽を保つべきものです、然るに日本人は統計上平均年齡三十八歳で、ナカ〳〵五十年の齡を保つ事は出來ない、之を我が同盟國なる英吉利人と比べたら、十四ヶ年丈早死するのです、同じ人間と生れ乍ら、日本人は既に英國人に劣ること十四ヶ年、夫故彼我の小兒の體格を比較して見たら、何より早

擧が書いた書は、數百年の後に至るまで、一幅の書、一幅の書が、幾千圓といふ高價を以て賣買され、床に懸け、花を挿し、香を焚いて愛翫される、それを我々が書くと何うですか、同じ五本の指を以て、筆に墨を含ませて書くのに違ひはないが、其書の價は白紙にも劣るのである、

是は何う云ふものであるか、即ち妙と云ふもの、修練の結果である、修練の結果とは何う云ふことか昨日となく、今日となく、朝となく、夕となく、時々刻々、精神一到何事か成就せざらんといふ格言の如く撓ます折れず遣り通した結果が所謂修練である、

凡そ世の中の何の事業を問はず、速成は充分のことは出來ない、併しながら如何にむつかしいことでも精神一到何事か成就せざらんやと云ふほどの勇氣を皷舞して勉めたならば、同じく五本の指でやることでも我々が書くと白紙の價を損し、汚れた反古と云はれた所の一枚の紙が、百圓千圓の價になる、皆修練の結果で、修練といふものは非常に大切なるものである、教育の必要も實はそれから起つて來る、我々人間といふ名を冠つた以上は、人以外の

く解ります、近年は日本の小兒も大分體格が大きく、手足も伸々して、骨格も太くなつて來ましたが、まだ〳〵英國の小兒から見たら劣つて居ます、一生を通じて統計上十四ヶ年の短命であるのは、既に小兒の時から之を明に示して居るではありませんか

◎道德の標準が一致せぬ　斯樣に日本人の肉體は虛弱であるが、家庭に於て一貫せる法を立て、其法に從つて、肉體を鍛へたなら、斯くの如く短壽に終る事もあるまい、之も即ち家庭の不完全なるが爲と斷言しなければならぬ、又精神的から見ても、誠に日本人は意志が薄弱で、爲に品性の上に迄及ぼして來ます、之と云ふのも前に述べし通り、歸する處家庭に教へと云ふものがない、換言すれば日本の家庭には道德の標準が一致して居ない、何れの家庭にても道德の標準は箇々別々の考へです、主人も主婦も奴僕も道德の標準に就いて見解を異にし、一致して居ないから、詰まり家庭の教へが立たぬ、兩親の性行を見習ふ子供が、之で何うして意志の强い品性の高い人物が出來ませう、故に家庭に法のある事、家庭に教へのある事は必ず圓滿なる家庭を作る上に缺くべからざるものと信じて疑はぬのであります(高木男爵談)

ものに對して、それ丈の節義品性が保てんでは、宇宙の萬物に對して面目がないではないか、所謂有名無實の人間となつてはいけない、名は實の賓と云つて、名實相應の人間になるのが、敎育の最も必要な所以である(文責在記者)

女子と歷史

文學士 小川銀次郎

人と生れて、我生れた國の歷史をも知らぬと云ふことは、甚迂遠な話である、然るに全體女子は歷史思想に乏しいやうに思ふ、歷史はたゞ事蹟のみを暗記するばかりが目的でない、譬へば我國の歷史を繙いて、我國は如何なる有樣に發達したかと、其次第を硏究すれば、それが直に家風を起す參考となる、また今日の如き隆盛の御代に遭遇した幸福は、如何なる理由によれるかと云へば、それは祖先が臣民たるの本分を盡した結果である、さすれば我等は祖先の遺風を顯彰せねばならぬといふことになる、また治亂興廢の事蹟を見れば、直に我家庭の上にそれを參照し、また我國と外國の關係に就ては、それを社交上の手本とし、女子とは云へ帝國臣民たる以上は、一旦緩急あるに當つては、國家に對する義務を盡さねばならぬ、

そこで自分が女學校の敎場に立つて、如何に歷史を敎授するかと云へば、前述の如く、既に敎へたることを開發し、新しい事實をあてはめて應用するのである、これは自分の一流儀であるが、我國の歷史を敎へるに、先づ以つて御歷代の暗誦をさせる、一時間に五代位、それで百二十二代を千字本を讀む如く、すら〳〵口を衝いて出るやうにする、若い人に少しの間奬勵してやらせると、忽ち暗記するやうになる、

それから年號、これは覺え難い、又紀元も暗記させたいが、女子にはいよ〳〵むつかしい、しかし御歷代の暗記が出來ると、略事件の時代が解る、さうでないと後陽成帝は何時頃の天皇であつたか、後伏見帝は何時頃の天皇であつたか、高等女學校卒業の人にても答にまでつく方が珍らしくない、いつか高等學校の生徒が、持統天皇と書く事が出來なんだので、大いに叱飛ばした事がある、御歷代を知らぬやうでは、何の爲に敎育を受けたのか解らぬ話である。

次に事實を敎へる上に於て、あまり枝葉に渡ることは、たゞ頭腦を煩雜にするのみであるから、其大綱をさへ失はぬやうにすればよい、殊に女子に歷史を授くるには、處世上必要の事件に注意せねばならぬ、即ち歷史のうちに經濟、法政、社會學等に關係した事件があれば、よくその趣味を處世の上に感じさせるやうにしたいものである。

そこで東洋史を繙けば、孔子の所で仁といふことがあり、孟子の仁義、それから老子の無爲恬憺などいふ文字が出て來る、それは歷史といふより哲學上に關係するむつかしい事であるが、女子の品性を養ふ上に大切な事である、その他佛敎の事があれば、因果應報などいふ文字も出て來て、普通の知識では解り難いことがあるが、品性修養上必要なることは、おもしろく、やさしく、わかるやうに說明すれば、歷史を學ぶ第一の目的が達せられるやうになる、

また西洋史を見れば、コルベールの保護貿易論、米國獨立の自由平等、最近に至つては、社會黨、共產黨などいふ記事がある、さういふ場合には、之を平易に說明して、日本の法政に照合し、社會黨共產黨の如きは、少くも危險であるといふことを知らしむるは、社會なり一家なりを維持する上に於て大切な事である、

人名地名等に至つては、なか〳〵送迎に忙がしく一々記憶する事は難い事であるから、成るべく國家變遷の大綱であるとか、修養上に裨益する事件に向つて、大に注意すべきである、さうでないと歴史を學ぶ本領がなくなつて終ふ、たゞ單に事實を廣く知ればよいと云ふならば、女子に歴史を授くる必要はないと思ふ、

・たゞ事實を有のまゝにたゞ注入するのみであると、近世史など甚だ危險である、社會黨の如きは、兎角愚昧の人に迎へられ易く、自由平等など云はゞ、言葉の上からもよく聞えるのであるが、國家には憲法、法律の束縛が必要で、勝手氣儘の自由は、それは遂に大なる不自由の根元になるのであるから一家にあつても、家長の命令に他の家族が服從して、自然に自由平等が得られる譯である、

その他武士道などいふこと、或は禪學等宗教に關する事も、よく會得するやうに平易に説明し、殊に婦人の偉蹟の如きは、今日之を應用してあやまらぬやう、注意して授けねばならぬ、

要するに女子に歴史を授くる目的は、一國の大勢を知らしむること、事件の模範となるべきこと、品性修養の上に必要なる事實を授けて、常識を養ひ、女子の本分をあやまらぬやうに力むるが主眼である、

女子の任務

麹町女學校學監　小川直子

凡人たる者はおの〳〵、我任務を全うせん事を日夜忘るべからず、たとへば一家の主婦たる者は、主婦たる勤を全うし、其家臣たる者は家臣たる勤を全うし、あるは教員ならば教員の勤を全うし、其任務に缺點はなきかと常に我身を省みて警戒すべし、されば先づ女といふ者は嫁して一家を治むるが第一の勤にて

婦人三從の道の中にても主たる事なりかし、親の膝下にある程は、ひとへに父母の敎へ導くまゝに導かれて成ちやうに從ひつゝ萬の藝能を磨くのみなれば易きわざならん、また老ては子に從ふといふ時も、我子のしむけてくるまに〳〵喜びつゝ、不平の心だに起さずば、それにて先づ勤を全うしたりといふとも事たりぬべし、されど一家の主婦たる時、其勤を全うするは、第一に難きわざならん、其勤につきての道は第一良人をして、内顧の憂ひなからしめむと心がくるにあり、其内顧の患ひなからしめむには、舅姑をいとほしみ、夫人の兄弟姉妹を愛々しう親切を盡して睦まじみ、甥姪其他遠きうからに至るまで、親密に交はり、一家の平和團欒をなすにあり、此平和團欒を保つには、彼唐土の張公藝が高宗の問に答へて、忍の字百餘を書きしるして奉れる古言など心の中にとめ置きつゝ、我身に實行するにあり、はた子を養育する事かろきにあらず、されば我身妊娠せりと知らば、先づ胎敎の大切なる事を思ひ、日夜愼しみて、身體淸潔に心中ほがらかに、ゆめ〳〵邪氣邪念を生ずる事なく、彼の周の太任が文王を妊み給ひし時、目に惡色を見ず、耳に淫聲を聽かず、口に敖言をいださずして、愼しみ給ひける古事に習ひて、胎兒のため心なだらかに、身體をすこやかにと、其保護に心を盡すべし、斯くて生れては、まして體育德育知育を全うし、やうやう成長するに從ひては、萬の藝能何くれとよき方に導き、子女をして君に忠に、夫に貞なる者におほしたつる事いかでゆるかせにすべけんや、これ皆主婦たる者の任務にあらずや、猶また一家の生計を整理せざるべからず、これはた其家の收入に應じ、生產の增加によりて財政をとゝのへ、奢侈と浪費とをはぶきて、主婦たる者みづから勤儉をつとめ、經濟に心をとめて、經費の豫算をたて貯蓄をもして、不慮の災害疾病の用に備ふべし、斯くせずては夫人たる者日夜に、心を勞し、身を苦しめ、巨萬の寶を得たりとも、內を治むる主婦が家政の行はれたらぬ所より、財政の困難を來たし、家產を破り、貧窮に陷る事あり、

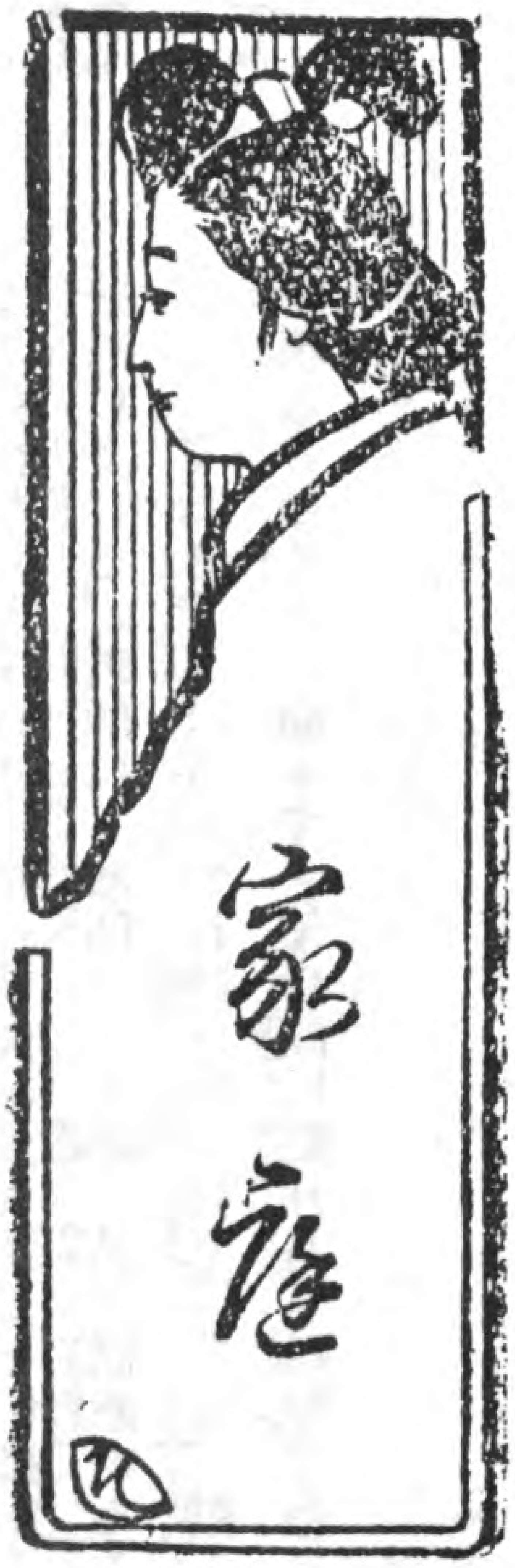
さればとて吝嗇に陥る事なきやう心がくべし、主婦たる者の心だにこまやかに經濟に行はれたらば奢侈に渡らず、吝嗇ならず、程よく家計のたつものなり、さるからに經濟に心しむでなき妻をもちたるものを、世の諺に六十年の饑饉とも云ふにあらずや、おそるべし、あるひはまた家によりて、書生などをもあまたおほしたてむとする方もあらん、さるからにこれ等の待遇をも、其人の後來につきての目的などをも尋ね問ひ、其志を遂げしむるやうに深く注意して、よき方に導くべし、僕婢をつかふにも心して其者どもの追々善良に赴くやうに慈愛をかけて使ふべし、むかし陶淵明が古郷へ一僕を遣はして、これ亦人の子なりといひやりけるとかや、またある人が雪のあさこれも人の子樽ひろひ、又其角の妻が我子なら供にはつれじ夜の雪、などいひし事ありて、人を遣ふにも心せよといふ誡はあまたあり、一家の中は家政繁昌せばいよ〳〵多勢の召使をも遣ふ事にしあれば、一人にても多ければ多きほど、種々細やかに心づかひをせずでは、一家の平和團欒を保つ事難かるべし、さて此召使の良否によりて、一家の齊ふと齊はざるとあるものなり、昔より忠僕義婢によりて、一家を齊へ、奸僕悪婢によりて、親密なる夫婦の中を其さかしらによりて、離間せられたるためし少からず、されば召使の者をえらぶ事肝要なり、其選び方正直にして誠あらはに柔順なる者をえらぶべし、正直ならでは金錢其他のものに疚心おかるゝなり、誠ある者にあらでは、其家の老人達または小兒などに對して、情なきふる舞をもし、客人のとり扱ひにも深切ならざる事あり、柔順ならでは、主婦の命令に從ふ事をいとひ、我意をたてむとし、其の意をたてさする時は、おのれの才智にほこらんとする振まひ見えてなつかしからず、されば主婦たる者の任務かるきにあらず、さるを能く家政をとゝのへ、夫人をして内顧の憂なからしむるこそ、女のつとめ父母への孝行ならめ、まして今の世の中いにしへとはことにて、其夫人たる人陸海の軍増荒雄は云ふもさらにて、其他の人々も物學びよ、商業よ

とて、外國などの遠き所にものしつゝ、古里なる家などをかへり見る暇なき人々多ければ、其主婦たる者留守なる家を能く守り舅姑の心やすらかに滿足をあたへ、我子をして缺點なきものにおほしたてたらんには、其任務を全うつとめたりといふとも可ならんか、

品性の修養に就て

フツト博士の談片

品性といふことは、或は廣く或は狹くいろ〳〵意味せらるゝが、此には廣き意味に於ていふのである、人間の能力の正當なる發達、又は活動を意味して居る、此廣き意味の品性をいふに就ては、古き學者達の用ゐし定義を考ふるの必要がある其定義には人間は道理的動物なりとの意味を含で居る、人間には動物と同じ所もあるが、加ふるに別に理性といふものがある、故に此に一種の義務を生じて來る、品性を修養するには第一理性の開發が必要である、智能の啓發が必要である、自ら好で無識に安んじ怠て智能を活動せしめなければ、迚も高尙なる健全なる品性を造ることは出來ぬ、智能に依て目的を知り、目的を撰擇するに依て自ら品性の高下がわかるゝ、且つ其目的を達する方法手段を撰擇することも亦知力に依らなければならぬ、これに就てカントは斯ふいうて居る、天地間に於て絶對的に價値あるものは、唯だ善意志あるのみであると、絶對的價値とは、其物自身に價値あることをいふ、幸福それ自身に價値あり、苦樂もそれ自身に價値あり、美の感覺もそれ自身に價値あり終極的に價値あるものである、乍併これよりも尙ほ秀でゝ絶對に價値あるものは、高尙なる健全なる品性である、善意志である、即ち人格である、人格の價値は絶對である、之れなくば敎師の職責を盡すことは出來ぬ、善良なる品性は、種々さま〳〵の場合に消極的積極的に活用せらるゝものであるが、此には消極的の例をあげよう、善良なる品性を具備すれば一種の過失を免るゝことが出來る、一體、凡ての藝術にはそれに伴ふ所の誘惑があつて、多くは此誘惑にまける、敎師にも敎師として陷り易き誘惑がある、即ち一種の僞善とも言はうか知らぬことまでも知るが如くにすることである、これは免かれ難き所の誘惑である、動もすれば敎師の成功を叩き毀はす、其他生徒に對する不公平、又は冷淡などの如きも知らず〳〵の間に陷り易き通弊である、是等はたゞ善良なる品性を具備するに依て豫防することを得るのである。



家庭と文學

三輪田高等女學校々長　三輪田眞佐子

『世の中を何なげかまし山ざくら、花見るほどの心ありせば』とは、紫式部の詠あり、以て後世女子の摸範と仰がるゝ人の理想を推度するに足らんかし誠に世の人、花見るほどの心を懐きて浮世を渡らんには、あはれ唐土の虎臥す野邊にたとふべく、阿波の鳴門の波風に比ぶべき世だに物の數かは、蓋しかゝる心を養ふものは、生涯春の日に逢ふ心地して、幸福こよなかるべし、然るに未だ之を悟らざるものは五十年の人生を、始終木がらしの冬とのみ見て、心を安んせしむる暇なき境涯に過すならん、まことや、かゝる乾燥無味の世を、藹然たる和氣もて潤澤せしむる餘地なきか、幸にしてあり、そは他にあらず、文學になん、おのれは世の風俗人情など、一切敎化の源はをさ〳〵善良なる文學にありと信ずるなり、わきて文學もて世を益せんとならば、こを家庭に導びてこそ、

見よ家庭に於て文學思想に富むものあらば、一家團欒して春秋の花紅葉を眺むるにつけても、如何ばかり高尙なる樂みを盡し得ん、さりとて一家の調度裝飾なども、文學思想なき主婦に委ねんか、一片の趣味なきは更なり、おのづから日常の生活も卑俗に流れて、遂には家族の品格をも墮落せしむるに至らんかな、

もし、天運まゝならずして、肉體上の需用の供給缺乏する家庭だも、文學思想に豐なる家庭は、不義の富貴は宛から浮雲の如き思ひして、よし草は門戸をとざし、唯蓄ふるものは一簞の食、一瓢の飲に過ぎざらんも、その精神ばかりは常に綽々として餘裕あ

るべし、死して朝は東雲告げる雞の聲に誘はれながら、難波江のよしあし繁き世に出で丶、西に東に南北と奔走し、夕は足も疲れ、氣も衰へて、森の木蔭に日の沈むをあはれと見つ丶歸る良人をいざと迎へて懇に慰め、明日の勇を摧かざらしむるものは、文學思想ある內君ならでは能ふまじ、あるは長き年月の間病の床にありて、思ふやう、われは老木の身にあれば、ながらへて若木のものに厭はる丶も本意なければ、無常の嵐とく吹きて枯はつるよりもかなと歎ち

師走十題



其の一　針の運び

勝なる、父母舅姑をなだめて、その心を安んずるものは、今日の紅顏も明日の白骨なりと、同情を表する文學思想ある婦人ならずば能ふまじ、その他兒童を教へ、僕婢を御せんも、文學思想なきものは往々義理に背き、人情と違ひて恩威度を失ひ、寬嚴宜しきに適はざるを以て到底幸福なる家庭をつくり能はざるべし、然れども世俗の所謂文學なるものは、果してか丶る効德あるか否や、思ふに流俗の文學なるものは、反つて家庭の活氣を失

ひ、家族をして遊惰に化するの恐あり、されば眞正の文學を選ばでやあるべき、

女子教育の盛んなるにつれて、女子に如何なる天命を享け、如何なる人分をつくすべきかといふことや、明らかとなりぬ、わきて文學は女子にも適するものなりとは、殆んど社會の輿論あるなり、思ふに我國は寛和以後、鎌倉時代の頃に至る間、才媛輩出して、あるは紀事をものし、あるは烟霞を賦し、今なほ文學の骨髓として數へらるゝもの多ければ、女子はその天性文學に堪能なりと云ふも、疑ふものなきこそ幸なれ、

元來まじら鳴く深山に入りて、丁々と木を伐り、或は朧月夜に鉾をとりて、敵陣をつくなど、總て筋骨を碎くことは、女子の長所にはあらじ、さりとて一切辛苦の勞を男子にのみ讓り、その膏血を吸うて無爲に生ずるは本意なきを以て、感情に富む天性を利用して、男子に報ひざる可らず、思ふに此感情にて、文學として少からざる關係あれば、女子の文學を事とするは、自からなる必要に應ずるものあらんかし、さればにや近來女にも、あるは文に、あるは歌につきて、稍つとむるあり、されどこは歡ぶべきことか、將た悲むべきか、若し文學を以て單に快樂とせんか、あはれこれなん亡國の萠なるめり、勿論人類には快樂の缺ぐべからざるものなれど、ひたすら快樂のみを主とせんか、忽ち風俗遊惰に馳せ、人情放蕩に流るゝは勢ひならん、昔郁々として盛んなりし周の衰へしも、全く文のみを尊びて、遊逸に傾きし結果なりけん、亦印度の如きもの、その宗教及び文學の上に於ては、著しき國なれど、あはれむべきはその建國以來國家としての體面は殆んどなかりけりとかや、猶西洋諸國、上史にも、優美を極め文弱の弊に陷りて滅亡せし國の例少なからざりき、

蓋し前車の覆るは、後車の戒とかや、今や文學を以て文明の花なりとの靈聲に醉ひて、異日の利害得失を考へざる時は、あはれ我二千有餘年動きなき瑞穗の國も危きかな、

さりとて文學を以て、徒らに忘想を描き、私怨私情を逞しうせんためのものと限らんか、いみじう卑しきわざなるのみかは、害さへ起るらん、さなくとも文學を以て、單に筆硯を弄する娯樂と考へ、主義もなく見識もなく、唯浮世の濁流に誘はれて、小説とか日記とか、あるは三十あまり一字のみを綴るを以て、その能事終れりとするものあらば、遂に人を誤り世を欺き、以て民心を狂亂せしむる有害の器と成果てん、されば文學なるものあらずもがな、殊に恐るべく、忌むべきは、厭世的の觀念を吐露するばかりを以て、文學の本領と限ることあれ、思ふに宇宙を觀察し、人生を顧慮して、樂天的の思想を起し、將た厭世的の觀念を起は人の自由ならんもたとひ人生を厭生的に觀念せんも、如何せん身既に浮世に宿る以上は、唯宜しきに處するこそ人の道なれ、おのれは人生に涙の必要なること、さながら水火なる元素の缺くべからざる如きを信せり、わきて慈善の涙などは、人生恩愛の 源 なりとこそ云ふべけれ、之に反して失望の涙、怨恨の涙などは、人生を墜落せしむるものならんかし、されど厭世的觀念の人生より脫却することは難し、唯厭ふべき世を救ひて、樂しき世に化する覺悟を懷くこそよけれ、苟も此覺悟なからんか、個人の幸福、家族の團欒を作る能はざるのみかは、邦家の弱點となるべし、

まことや女子は生れながらにして、涙に富み情に長けたるものなるに、剩さへ失望及び怨恨の思想を養はしめんには、勢ひ良人に對する務、兒童を育つる勞を以て、悉く果敢なき人生の煩累を思ふに至らん、故におのれは女子の文學界に、樂天的の思想を樹立すると同時に、厭世的の思想をも救世の功徳あらしむるやう、見識を定むるこそ肝要なれと思ふ

これを以ておのれは女子の爲、將た國家の爲を慮るに、今後女子の採るべき文學の主義は、第一天然の至妙を會得し、二を文章あるは詩歌となして、人生に紹介するを以て目的となすべし、そは天然の美なり、善なり、且つ眞にして永遠なり、故に苟も

天然を悟らんものは、忽ち浩然の氣沛乎とし起り、おのづから心廣く身胖なれば、樂しみて業を勵み、歡びて人を益し、その感化の及ぶところ、風俗及び人情を善良に導くなるべし、第二勸善懲惡を以て目的となすべし、若し社會を亂し、人情を害ふべきものならんには、その文如何ばかり流暢ならんも、その句如何ばかり美麗ならんも、單に文學とは言ふべく、決して眞の文學とは名づく可らず、されば以上二つのものは文學の眞髓にこそ、

果して文學を以てかゝる目的のものとせんか、こを事とする女子だち、決して文學の末枝を知るを以て安んずべきかは、將に天然の秘義を探り、造化と氣脈を通じ、以て天地の秘理を未だ知らざるものに敎ふる尊きものなることを知らざるべからず、莊子曰く、造化を以て大冶を爲す、惡に乎往いて可ならん哉と、されば文學を修むる女子には、身はよく神聖の境界に逍遙するものなれば、父母に對して、良人に向ひて、兒童を敎へ、婢僕を御して、將た世人と交りて、言ふところ、行ふところ、必ず自然の法に違はざるべし、あはれ文學の女子に及ぼす德は、至大至宏とこそいふべけれ、獨り選ぶべきは主義になん、

要するに文學を以て社會を益し、家庭を利せんとならば、眞正なる文學を味ひて後にこそ、

日本式良婦人

越後高田の舊城主たりし正三位子爵榊原正敬氏の世嗣政和氏の夫人彜子は(三十)十一月二日午前十時病氣を以て、本郷弓町の邸に逝去せられたるが、今同夫人の逸事を聞くに今日の婦女子が模範とすべき點多し、夫人の實母禮子は、前田侯先代の姉君にあたりて、婦德高き賢婦人なりしかば、彜子も其膝下に在りて、朝夕の訓を受け、七歳の頃より舊臣中根半嶺翁に就き、漢籍と書法とを學び、和歌は故中島歌子の敎授にて、頗る堪能の聞えあり、十八歳の頃華族女學校を卒業し、其の後は芳谷南芳に氏よりて繪畫を學び、茶道香道挿花は勿論、絲竹の道をも名ある師に就きて學びしが、其得意とせしは漢詩及び和歌にて、中には後世に傳ふべきもの多しと聞けど、更に人に示さず、二十一歳にして政和氏に嫁し伉儷睦まじかりしも、夫人は家政を主として、交際場裡に出るを避け、一意夫に仕へて渝らざりしなど、寧ろ日本風の良妻たりしといふ、然るに齡未だ三十路を出でしのみにて、終の途に赴きしは痛はしの限りにこそあれ、

今日の家庭に於て直に改良せねばならぬ點

福田太一

女の日本服に就ては、大分議論もあり、實際改良の餘地もあるやうであるから、漸進的自然的に、その惡しき點は削除され、改良すべき處は改良されて行くであらうと思ふが、男の日本服を改めて、一般に洋服を著るやうにしたいなどゝいふ人の氣が知れぬ

成る程、事務などを執るには、或は洋服の方が善いかも知れぬ、併し若し、肌を露すこと夥しく、甚だ下品で、甚だ不恰好だから、日本服は可かぬといふのであるならば、それは全く意味の無い事であらう、肌の大部分が常に外氣に曝露して居るが爲に、知らず識らずの裡に、われ〳〵の皮膚を强壯に養成する事、非常なのに氣付かぬのは、抑も何等の迂濶であらう、これは實に、日本服の類ひ無く大きな利益ではないか、故に、家庭に於ける服裝は、決して洋服を用ひてはならぬ、日本服を廢してはならぬ否な、日本服は日常の服裝としては、此上ない完全なものなどいふ事をゆめ忘れてはならぬ

即ち、現今の日本の家庭に於て、服裝に就ては、聊か特に改良呼ばゝりをする必要がないのである、其他、いろ〳〵改良せねばならぬ點はいくらもあらうが、余は今日のわれ〳〵の家庭に於て、直ちに改良せねばならぬ處は、臺所であると思ふ、併し臺所そのものを改良改造したとて、それは決して眞の臺所改良ではない、同時に又、臺所に對する家族の感念をも改良して仕舞はねば不充分であらうと思ふ、然るに、百姓が汚穢物の臭氣を感ずる事、夥しからぬが如く、亦下女は臺所の不潔を顧みる事甚だ足らぬのである、絶えず身に觸れ、絶えず心に當つてゐることは、身心共に、左程の刺戟を感じない田舍者が、初めて汽車を見れば、其の喫驚の感、蓋し想像以外であらうが、絶えず汽車を見てゐる者には、別に珍らしくも何んともないのである、

であるから、一家の主婦たるものは、臺所を賤しいところと思ふ事なく、度々臺所に出て來て、いろ〱下女に注意刺戟を與ふるのが、何より肝要である、横目八目といひ、又、善良なる主婦は、百人の下女に優るといふ意味の格言もある、奧様は奧様だといふやうな、狹い量見を起さずに、常に一家全般に對して、精緻なる留意と、敏捷なる注意を拂つて居らねばならぬのは、主婦當然の任務責務であらう

臺所は實に戰爭でいへば、兵站部であらう、兵站部が、亂脈蕪雜、支離分裂、不潔不注意で、何うして勝利の見込が立たう、何うして立派な衛生が保たれやう、のみならず下女達は大低、無敎育の者が多いし、常識の如きに至つては、全く空であるから、或は食物の注意とか、器具の取扱ひとか、種々雜多重要大切な事柄に向つて、奧様たるものは大いに力を盡さねばならぬ事と思ふ、夫れ臺所とは、臺盤所の略稱であつて、即ち、昔は食物の煮燒を調ふる處を、臺盤所又は厨といつたものである、然るに、此の臺盤所といふのは、又いにしへ、大臣、大將の奧方の尊稱にも用ひられたものであつて、また御臺所といふ尊稱も有るではないか、主婦が充分に已の力を活かせて、臺所を改良せねばならぬのは、古今一貫、實に婦女子の天職といはねばならぬ、かるがゆゑに、今更にこれを廣く云つたならば、婦女子の天職々分は、全く臺所に於ける勞働に在りと斷言することが出來る、從つて、臺所以外に於ける勞働に從事せる婦女子は、これ眞の婦女子の面目を示したのでないと云ひ得る、

近頃、何かで妻に妻らしき勞働を勸めよといふので、或は裁縫、或は造花、或は寫眞、乃至マッチ箱製造、養雞などの手内職をやつて欲しいものだといふ事が書いてあつたと覺えてゐる、成る程、手内職も善からう、善からうが併し、忠實に一家を内助してゐる妻には、特に夫れ丈けの餘裕があるまいと思はれる、又、餘裕はあつても、特別の境遇に立つてゐない限りは、左程、その必要もあるまいと思はれ

つまり、余は今日の家庭に於て、直ちに改良せねばならぬ點は、臺所の不潔、及び臺所に對する不注意不眞面目であらうと思ふのである、

家庭の規律

石川殘月

家庭は一小王國であるから、家庭の間には目に見えない、精神上や德義上の規則が必要なばかりではない、外形上の規律も必要である、世間の學者は家庭問題といふと動もすれば、究屈な規則を云々するけれども、我儕の規則といふのは其樣な規則ではない、又世間の學者は、家庭問題と云ふと、動もすれば經濟の事を云々するけれども、我儕の規律といふのは、經濟のための規律ではない、元來此規律といふものは、生活を究屈にするためや、經濟の利益のためにのみ設く可きものではない、畢竟一家の者が互に、其本分を全うするに便利のため、互の德義を成すに便利の爲に設く可きものである、今日の社會一般の風習で、一家生活の時間に規則を定めて置く家は多くない、稀には主人が時間を切つて居る職人の家で、止むなく時間に規則を設けてあつても、其は深い考へから設けてある規則でないから、休日には其規則もお廢しになつて、一家は直に不規則な順序になるのである、

一家に時間上の規律のないのは、萬事に不規則の生ずる原因である、實際に就いて考へて見ても、朝起に一定の時間を定めて置かないと、朝飯の時刻にも毎々變更を來すから、主人の外出、事務、來客の接見等に萬事不都合が生ずる、それが爲に迷惑するものは主人や學校通學の小兒ばかりではない妻自身も女中自らもまごついて、從つて家中の清掃も不充分になれば、食物の仕度、衞生の心掛なども皆不充分になる、それで、どんな家でも先づ第一に朝起の時間を必ず一定する事が必要である、この朝起の時間さへ確と一定するなれば、朝の食事の時間も一

定する、それには第一に、主人の心掛が大切で、主人自ら其規則を破つて、起たい時に起ると云ふ様では到底だめである、又、主人が朝飯前から不規律な事をやつて、朝飯前に一定の仕事を有する女中や下男などに、常の規則外なる用事（例へば盆栽の手入れとか、庭などの突然の用事）こんな仕事を無暗に命ずるやうでは、忽ち順序が亂れる、一家の者に、規則として毎朝なす可き一定の用事を與へたる、外の用事は決して命じてはならぬ、

一家には必ず先づ諸事時間を定めるといふ事が必要である、然し自分の家でばかり時間を定めて、自分の家に來客などに時間の規律を守る人がないと、忽ちこの一家の貴い時間の規律を破らるゝ、そこで來客のために此時間の規則を破られぬやうにするのは極めて必要である、

先づ其には、仕事の時間と休息の時間とを定めて置く必要がある、朝飯前は無論農家でも商家でも多忙な家では矢張り仕事をする必要があるに相違ない

然し中等以上の生活の人で、さまで多忙でもない家なれば朝飯前の時間を一家の清掃のために用ゐるのは至極適當で、多くは此樣な習慣になつて居る、但この清掃と云ふ事に一ッ注意せんければならぬ事がある、それは日本人の習慣として掃除といふと屋敷の内や家の内などを綺麗にするといふばかりであるが、綺麗にするのに特に衛生の爲であると云ふ事に注意せんければならぬ、即ち清掃は綺麗に見せるためにするのでなく、一家に生活する人々の衛生といふ實用を目的とするのである、然し人間には實用といふ事の外に、綺麗なものを愛するといふ心もあるから、勿論一家の中の諸道具の配置とか、又は裝飾といふ事にも注意して、子女の爲に美術心を養ふといふ事にも注意せんければならぬ、此事は特に一家の主婦が注意すべき事で、戸棚の中に茶碗小皿を並べるにも第一に清潔の事に注意して、それから諸道具の配置に多少美術上の心を用ゐて、道具の大小廣狹の配置が整然と順序を立てなければならぬ、況し

て座敷の諸道具には特に注意が欲しい、一家の中にどんな立派な諸道具や珍器があつても其配置が亂雜で不規則であるなれば、先づ第一に主婦の不注意が見える、此樣な事に注意するのは決して風流三昧の道樂のためではない、一家の諸道具諸物品の置所や配置に、整然とした一定の規則が立つて居ると、其家の兒女は、諸道具の在處を確と心得て居るから、何々の品を持つて來いと命ずれば直ぐ持つて來る事が出來、此道具を片附けろと命ずれば、定つた場所に直ぐ持て往く事が出來る、そして兒女の心に自然と事物に規律ある事の教訓を與ふる事が出來る、

先づ座敷内の裝飾に就き、一言すれば、座敷に配置せらるゝ諸道具中には勿論、更に裝飾上の趣味を持たぬ道具もあるに相違ない、否寧ろ、中以下の家庭には、必要な道具の外に、裝飾上の道具のないのは當然である

然るに吾人が座敷内の諸道具に裝飾的の配置を施せと云ふのは、即ちこの實用向の諸道具を配置するにも、能く注意して、道具の大小廣狹を見計つて凡て秩序を與へ順序を正しく配置する事を勸むる者である、座敷に諸道具を置くには、第一に目ざはりと云ふ事を避けなければならぬ、一掉の簞笥と一個の鏡臺を置くにも、第一に此目ざはりを避けて、實用便利と座敷總體に對する釣合を見計つて、最も適當な位置に置く可きである、若し一家の主婦が何道具にても、確かに其に適したる位置を見計つて、道具を配置し、其が實用便利と裝飾上から見て最も適當な位置なる時は、之を稱して不動の位置といふのである、

若し富める生活の家で、裝飾上の諸道具を多く有する家なれば、裝飾といふ事には特に注意せんければならぬ、如何ほど、立派な道具が澤山あつても其配置に意匠がないならば、唯り道具が引立つて見えないのみならず、諸道具の亂雜な置樣が、まるで燒出されの後の樣で、何の爲に道具を並べて置くのか更にわからぬ樣な事になる、

道具の配置には、特に配置の調子といふ事に注意せんければならぬ、物の置並べが能くないと、道具と道具との間に調子がないから、少しも面白みがない、又座敷の廣狹と道具の均齊が必要である、以上の外に室の装飾の事につき今少しく詳しく述るのであるが、其樣なことは餘り枝葉の事であるから、談話を轉じて別の事を述べませう、

朝起の時間に規則が定つて、毎日一概の時間を定めて朝飯を喫するなれば、其日の仕事が順序よく出來て萬事に便利である事は前に述べた通りである、然し朝飯ばかり一定の時に終つても、朝飯後ゆるゆる時間の定限もなく家人が新聞でも讀んで居るやうでは、忽ち不規律になる、役人とか學校教員でもなければ、大方の人は新聞閲讀に朝の大部分の時間を費して居る、こんな事は甚だ小事のやうであるけれども、自分のする事業や、一家の順序の上に、尠からざる不規律を生ずるのである、我輩の經驗を以てすれば、午前の時間は非常に大切な時間で、この午前の時間を利用するとせざるとは何人の運命にも最も大なる影響を有するだらうと思ふ、

商業によりては、時間を定むる事の出來ないものも澤山ある、然し、どんな商業でも、或る一定の時間を利用して、物品を整頓し、會計を整理する事は甚だ、肝要である、そして午前の時間を其樣な事に利用するのは最も便利である、

主人の職務と家庭とは全く別であるから、家庭の事は少しも主人の職務に關係がないかといふに決してさうでない、一家の主人が家族と共に一家に生活して居てる以上は主人の職務は直に家族全體の生活と直接の關係を有せざるを得ない、主人の職務は、一家成立の眼目であるから、一家の秩序は主人の職務を主眼として定む可きは素より當然である、然し一家はそれが爲に全く犧牲に供せられて、主人の職務のために一家の秩序も規則も悉く破壞せれる、樣では、家庭は全く無意味のものになり終るを免れない、

ぬ故に若し、家庭成立の目的を遂げさせんとなれば主人の職務と家庭の生活とは、成る可く衝突せぬやうに、成る可く調和するやうにせんければならぬ、それで、主人の仕事が大切である職務が肝要であるからといつて、仕事や職務を不規律に時を定めず、所を選ばずに行はれては忽ち一家の規律が亂脈になつて、家人自ら手の出し樣がないやうになる、其結果は主人自らの職務の上にも影響して、仕事も職務も遂に十分の成功を期する事が出來なくなる、それで仕事や職務に規律あらしめやうとするには、家庭の生活上に規律を定めなければならないのは勿論又仕事や職務にも確かな規律がないと家庭の規律が破るゝのである、

天地の運行は、年々歳々春夏秋冬の順序が少しも亂れないやうに一家の生活も、朝より夕に至るまでの仕事の順序は毎日整然として同樣でなければならぬ、毎日定つた時間に定つた仕事をして居るならば仕事も樂に十分出來て、又他より妨げらるゝ、事も尠くなく、若しさうでないと、一家の規律は遊びに來る人や、用達に來る人や、我儘な主人、また僕婢の輩に忽ち亂さるゝのである

獨逸家庭敎育の一法

獨逸の家庭では、子供の惡い行ひを矯正する事に就いては、種々苦心して、敎訓すべき方法が研究されますが、其の中の一ツに「ニコライ」と云ふのがあります、之れは每年十一月二十一日に孰れの家庭でも行ふ事ですが、夫れが子供の惡癖矯正には有力なる効を奏すのです、此日の夕景になると、一人の中學生か、左もなくば其の年配の靑年が、突然家へ這入つて來ます、其の服裝は長い獅子の毛のやうな毛皮の外套を着て、恐い顏に扮して、手には太い洋杖を握り、何處までも怖ろしげな扮裝で、ツカ〳〵と子供の側へ來るのです、尤も此の靑年は、兩親の知つて居る筈ですが、此の時は飽迄父や母も知らぬ人のやうな風をして居ますから、子供は吃驚して戰へ上らん計です、此の異樣の靑年は、戰き怖れる子供を容赦もなく腕を捉へ暗い一室へ連れて往き、一年間の惡い行ひを訊れるのです、例へば「親達に何んな不孝をして言付けに背いたとか」或は、何々を毀したが嘘を吐いて眞實の事を白狀しなかつたとか」總て自分のした惡い事を此處で白狀させるので、若し白狀しなければ、洋杖を振つ

て打据えん計りの帷幕を示すから、子供は驚いて悉皆白狀して仕舞ひます、過ちを悔いて白狀すれば、異樣の青年は袋に入つた菓子などを與へ、將來此樣惡い事をしてはなりませんよ」と懇ろに訓戒をなし、次ぎの子供があれば、又た其の兒童を此の通りの方法で訊ねます、爾うして漸次に大人まで調べますので、矢張り大人にも袋の菓子を與へます、此ニコライと云ふのは、子供の時代には非常に怖がるので「噓を吐くまい」と云ふ事や「惡い行ひはしまい」と子供心にも考へますから、之が兒童のために善い教訓になるのです、獨逸の子供は八歲位でも、隨分剛情を張りますが、此日異樣の青年の前に立つては、泣き出さん計りになつて、直ちに改悔し白狀いたします、〔ドクトル宇良田女史談片〕

床しき家庭

篠突く雨の激しき夕、膚を劈く風寒き夜も厭はゞこそ、更闌けて人の往來の絕え果てたる頃までも、本鄕は駒込邊の大路小路を十歲ばかりの少女に杖を引かれながら笛の音哀れに流し行く風體も見すぼらしき按摩あり、小沼陵三郞(四十八)と云ひて、生れは茨城縣猿島郡香取村の者とか昨年六月初めて出京し、目下、本鄕區駒込富士前町四二の長屋住居に、其の日〳〵の細き煙を立て居れり、妻のお清(四十五)も左眼は用をなさぬ眇にて揃ひも揃ひし、不具の夫婦なれば、鄕里に在る頃より按摩療治を生業となし居たりしが、其の間に擧けたるお鹿(十一)お福(七ツ)と云ふ二人の娘が、滿足な容姿をもちて追ひ〳〵生長するにつけ、盲目の親とは違ひ、讀書の術も知らずとありては、行末人中に立ち交じりて、世智辛き世の中を立派に渡らんことも覺束なかるべし、是非とも學校の教育だけはして置きたいものと心に願へど、其の日暮らし、餘裕とてなき身なれば寧そ東京に出でたる上骨の粉に碎けるまで働らいて、多少の資財を蓄はへ、我が子の教育をなせんものと、健氣にも思ひ立ち、遂ひに一家を取り纏めて上京するに至りしにて、陵三郞のみならず、妻のお清も出來る丈は夫の勞苦を助けんものと、夜な〳〵按摩の共稼ぎ骨身を惜まずいそしめど、馴れぬ土地とて未だ華客も多からず、夫は一ヶ月、八圓前後、妻は漸う二三圓の收入にて、親子四人が糊口の資にさへ充分ならず、中々子供を學校へ通はすなど云ふ餘裕はなしさりとて折角夫が目的にて上京したるものを空く日を過さんは口惜き限なりと、苦心の末、幸ひにも小石川區原町に素山學校と云ふ慈善學校のあることを聞き込み、早速入學を願ひ出で、許可せられ現に姉は尋常二年級に、妹は一年級に在學中にて、二人もよく父母の教訓を守り、熱心に勉强することゝて、其成績も他の生徒に優り午前の學校より歸れば、午後は母の仕事を助け夜となれば、姉のお鹿が父の手を引いて其杖となり、効々しく立振舞ふにぞ、兩親も太く喜び、見えぬ眼に嬉し涙を湛えつゝ、二人の娘が卒業するまでは三度の食を、二度に減じても、學資を蓄積し、進んで高等の教育を授んものと意氣込み居れりとは、奇特なる心掛と云ふべし



渡米所感の一節

女子職業學校幹事　淀三樹太郎

私が目的を立つて渡米いたさうとしたのは、セントルイス大博覽會のあらうとする時で、日露戰端も今や開けんとする極忙しい頃でした、恰度三十六年十二月十二日に横濱を出發致しまして、サンフランシスコに二十七日に着きました、此處で二三日逗留してから、直ぐセントルイスに出立致すことにしました、夫れでセントルイスに着きましたのは翌年の一月三日でありましたが、此間自分の頭に起つたところの空想と云ふものは、實に種々樣々で、只今考へると可笑しい位です、先づ横濱を出でゝ行けども〳〵盡ることのない樣な、渺茫たる大洋に逍遙ふた時の其感じは、只偉大とか、廣大とかの感に打たれて、我目的も斯の如く、我成功も斯の如く、なれるであらうかの樣に思はれて、實に一種云はれぬ喜悦の情が、勃々として胸中に溢れ出でました、夫から、サンフランシスコによりましても、二十何階と云ふ大厦高樓が、到る處に空も凌がんばかりに聳えて居る樣や、人馬の往來の繁きことや、何れの役所、何れの商館、何れの工場を觀覽致しましても、其規模の廣大なることは、何れとして目と心を驚かさぬものはありませんでした、

夫からセントルイスに參りますにも、五晝夜と云ふ長時間を滊車で急行致しますので、其の途中に彼の有名なるロッキー山と云ふのがあるのですが、遂に此高山を氣附かず了いました、何んで斯んな高山を越えるのに、氣が附かなかつたと云ふと、此山の餘りに大き過ぎて、其斜面がなだらか過ぐるからであらうと思ひます、其ロッキー山の中腹には、大き

な湖水もありますし、又繁華な市街もありまして一寸山とは思へませんのです、其他樹木と云ふものがなく、凡て岩ばかりの山ですから、ロッキー山の名もあるのですが殆ど平地を通る樣な心持が致して居りました、後で聞いてから始めてあれが有名なロッキー山であつたことを知つた位です、實に其裾の勾配の廣いことヽ云つたら想像するに足るのであります、いくら日本の富士山が高いと云つても、とても斯んな具合には參りません、

夫から此偉大なる高山を越えると直ぐ、幾百里に渡るであらうと思ふ、平々坦々たる大平野に出でまして、此平野こそ眞の平野であらうと思いました、只一面に平坦であつて、小高き岳もなく、樹木もなく、只ちよろ〳〵と小溝の流るゝの見ると、草のちよぼ〳〵と生へて居るのを見るばかりで、他に一つとして目を遮るものがないのであります、是等の大平野、是等の大高山を見るにつけ、流石は亞米利加の大陸じや、實に斯の如き廣大なるもののあることは此國に來つて、始めて知つたのであつた、今迄は夢想だに思ひ及ぬところでありました、

さきには渺々たる大洋に勵まされ、今又爰に此大なる陸地を見ては、氣も心も只廣々として、此グレート・此偉大なる如く、我成功も斯の如くなれかしと、暗に一種の喜びと、一種の勇氣に驅られつゝ、猶幾百里となく進むで參りましたが、滊車の進むに從つて、氣候の變化も又著るしく、雪が降つて來る寒さは感じて來ると云ふ始末に、又一種の感にあやつられて參りました、此感が遂に我身上のことにまで思ひ及んで、自分も既に青年を過ぎた此年齡、此矮少なる此體で、此偉大なる、此廣大なる土地に來つて、何をか果して達し得らるゝであらうか、言語にも通せず、事情にも暗く、風俗習慣氣候總て異なつて居る此土地で、能く健全にして之を貫き能ふであらうか、斯の如く恐怖の念に魘はれて一方には前途を思ひやり、一方には故鄕のことゞもを思ひ出で、うたゝ無常の念に打ち沈むかと思ふと、又曉陽

のは〳〵と大陸を離るゝ樣を見ては、心氣揚々として愉快に堪えて來たり、實に喜悲交々と云ふ有樣で、五晝夜と云ふものを過して參りました、軈てセントルイスに着いて見ると、又サンフランシスコにも優つた繁華さに氣も心も浮き上り何か一事業を得 では歸らじと、勇氣勃々として起つて參りました、恰度本年の四月になると、世界大博覽會が開け樣と云ふ間際であるから、其混雜して居ることゝ云つたら、實に名狀すべき言葉がない位です

師走十題



其の二　餅つき

此セントルイス市は上町と下町とに分れて居りまして、世界第一の大河ミスシッピー河の流れに沿つて居ります、其大河には無數の船舶が輻輳して居り、其河岸からドシ〳〵と貨物を陸揚げして居ります、市中の商工業の盛なる有樣は非常なもので、其交通の烈しいことは目もくるめく程です、實に全國の貨物は此處に集中されて世界商工業の中心と、云つて宜しい位の土地であると思ひました、尤も此合衆國中第四番目の都會でも

ありますから其筈です、

市街の有樣は十七八階もあらうと云ふ高樓を建て並べられて、其建築の美麗なること、電車は蜘蛛の巣を編んだやうに、電燈は晝夜ともなく市街を照らし、電線、電話、水道などは此繁榮なる地下にも隱れ居るのであります、四十餘條の鐵道線路は、市街の中央にある、ユニオンステーションと云ふ大停車場に網の樣に集つて居ります、此停車場の盛なること、建築の大なることは米國第一ださうです、私は夫から工場とか會社とかを一巡して見ましたが、凡てがグレートであること卽ち其大仕掛なることに、驚くと云ふより外はありません、此大なる國、卽ち此繁盛なる市街、此榮華なる人間、此巨萬の貨物、到底只働いて溜めた位では、得られるものでないと思ひました、何んでも此亞米利加と云ふ國には、金の湧く池があるか、或は金のなる木でもあるか、何れかそんな財源處でもなければ、到底尋常のことで行くべき筈がない、實に一獲千金と云ふ土地はこゝである、こりや甘い處へ來たものである、此處でこそ、我旅中に抱ける偉大なる、廣大なる空想も、或は達し得らるゝであらうと、正眞に申せば斯う思ひましたのです、

私が此セントルイスに參りましたのも、此大博覽會の好機に乘じましたのでありました、然るに追々と何れの會社に參つて見ましても、言語が出來ないから誰れも雇つて呉れない、誰も相手にして呉れない、道に金も落ちて居ない、日本の土地なれば又何んとか工風も出來ますが、此樣子の分らない他國に逍遙ふては、如何んともすべきすべがありません、自分の今迄抱いて居つた空想も、何も彼も滅茶々々に成つて了ひました、そこでよく〱考へて見ると今迄抱いて居つたところのものは凡て空想であつて否間違つて居つたと云ふことに氣が附いて參りました、彼の偉大なるロッキーの高山も、僅か一粒の砂より、彼の渺茫なる大洋も一滴の水より、遂に集り集つて、斯の如く成り立つたのであると云ふことに思ひ至りましてからは、精神忽ち一變して、最早此

亞米利加に來つた以上は、自分の年齡、自分の修得したことなどは問ふところでない、凡て過去の一切を燒き棄て丶了つて、再び此亞米利加の小供に成つた氣で、是から汲々として勉めねば成らぬと云ふことに覺悟致しました、夫から私の今迄這入つて居りました、實業學校總長の家庭に居ることに成りましたから、能く家庭長の言を守り、學校にては一心に勉强することに致しました、

つく〲と此亞米利加の富の原因、此繁榮を致す基因と云ふのを探つて見ますと、別段金のなる木がある譯でもなく、金の卵を生む鳥が居る譯でもなかつたのです、然らは何樣なことが此原因になつたのであるかと云ふと、別段不思議の妙法もあつたわけでもなく、彼の大陸、彼の大洋の一粒一滴より成れるが如く、一秒、一毛を惜みて、勤勉貯蓄したる結果が、茲に至つたのであると云ふことに、歸着するより外はありませんでした、併しながら一毛を惜むと申しても、只吝嗇であると申すのではありません即ち有用なることには如何なる大金も惜まずして、如何なる大事業も計畫し、無用のことには假令一厘一毛たりとも決して費しません、時間と雖も斯の如くで、實に規律正しく、一分一秒なりとも無駄には費し終らず、之を程よく適應して參るのであります斯く其責任時間中は、ヒシヒシとして働くと云ふこと、即ち其基因であるので、是を約言すれば、時間と金錢の儉約よりして此富を致したと申すのでございます、一體此亞米利加と云ふ國は御承知の通り、彼のコロンブスが發見されましてから、未だ四百何年位しか經ちませんので、即ち新進の國、所謂新世帶でありますから、此國に遺產のある譯でもなければ、土地は荒れて居り、家屋もなければ畑もないと云ふ始末でありますから、一物として凡て働かねばならぬのでありました、斯の如き有樣であるから、自然よく働き、能く貯蓄すると云ふ此良習慣が、益々此國をして斯くあらしめ、益々此良習慣を今猶ほ獎勵しつゝあるのであります、只今其實例を一二擧げて申しますと、

一般に此國人の習慣として、一日の勞働、或は勤務時間を何時間と定め、休息時間を何時間と、睡眠時間までも、凡て一定の規律のもとに定めて置きます、又決して之を亂すことなく、能く働き、能く遊び、能く眠ると云ふ具合に、朝起ると直ぐ其業務を勵み、午後の四五時間までの間と云ふものは、實に其責任を無視する樣になることなく、晝飯の時とか、休み時間の外は、間斷なく働くのであります、そりやもう煙草一服吸ふ人もありません、或は椅子のない所も多い樣であります、即ち一日立ちづめで其業務を執ると云ふ始末で、小學校などでも其休憩時間と申したら僅に午前中十五分間が一回、食後に一時間と云ふ時間があるきりで、其後は歸るまで一切休むと云ふことがないのであります、又遊ぶ時にも隨分能く遊ぶのであります、凡て能く働らかうと思へば能く遊ばねばなりません、充分休養をした上、再び働かんとする時の精力を助けねばならぬのであります、日本の樣に遊ぶべき時にも遊ばず、睡るべき時間をそいでも働いても、決して完全なる勞働は執れぬものであります、第一身體を弱うして却つて不經濟であらうと思ひます、私が上町より學校に通ひますのに、電車で三十分程かゝりますが、我家庭長は僅か此三十分間を利用して、これ〳〵の學科を修めよと、電車日課として或課業を與へられますので、少しも油斷が出來ません、行きも歸りも此始末でありますが、偶々不勉強をして、電車中でぼんやり何もせずに了ふことでもありますと、忽ち歸つてから質問を受けて、其日課を實行せしや否やを試驗されます、隨分叱られましたこともありました、凡てが此筆法で行くのですから、小供の中から此嚴重なる規律正しき良習慣を附けることになります、

金錢を始末することに於ても、實に非常な注意をはらひまして、一厘一毛たりとも貯蓄するやうに心掛ける、私などが日本人の考へで局外から見ますと米國人は外面は彼の樣に立派に着飾り、立派に建設せられても、内面は非常に汚いものであると考へた

こともありまず、或時電燈を燈した儘便所へ參りまして、一寸外に用事がありましたから、恰も三十分間許り勉强室の電燈を其儘にしてありました、それから用便の後歸つて參りますと、家庭長は突然私の部屋に參りまして、なぜお前は電燈を付けた儘外出したのであるか、お前の外出中十分なり三十分なりの電燈は無益に費されたので、お前の爲にお前の勉强室に設けてある電燈が、お前の用途にならずして其三十分間の電燈料を無益に仕拂はねばならぬと云ふのは、一家庭の不利益のみならず、ひいては一國民が皆斯の如くして無益に或物品を費すならば、國家として大不經濟なことであるではないか、以後は宜しく謹んで假令十分間たりとも、五分間たりとも、無用の爲に消費せぬやう心掛ねばなるまいと、非常に戒められました、成程と思ひましたが、實は餘り奇麗なことゝも思ひませんでした、併し其後は成可く五分たりとも外出する時は、必ず消すことに致しました、夫から幾程もなき或日の暮近き時に、自分の部屋の窓下でタイプライターを頻りに勉强して居りました、實は餘程暗かつたのですが、まだ電燈を點けるにも早いし、若し又餘り早過ぎて不經濟であると云はれても困ると思ひましたから、まだ夕陽の左程にも暗からぬ光線を利用して、一生懸命にやつて居りましたのです、然るに又家庭長が參りましてお前は何をして居るのだ、お前は私の云ふ事も惡くとるからいかんのだ、私は決して有用なことに電燈を費すなとは云はぬ、假令白晝たりとも若し暗ければ其必要に應じて電燈を點けるが宜い、第一此黄昏に眼に適當せぬ、斯る弱い光線で仕事をすることは眼を惡くする、若し眼を惡くすれば、却つて電燈料に換へ難い不經濟ではないか、實にお前こそは衛生上に注意をはらはぬ、所謂アホウ始末である、と又叱られて了ひました、

又或時は斯樣なこともありました、恰度秋の頃で庭草の枯れたのや、木の葉の落ちたのを、かき集めて之を燒いて居りました●ところが又叱られました

そこで家庭長の云ふには、隣の庭には下草が一面に生えて居つて、禿げたところがないから、枯草を肥料にする必要がない、故に之を焼棄てるのだが、此家の庭を見なさい、所々に禿が出來て居るではないか、此隙間や禿の所に此枯草や落葉を置けば肥料になるではないか、斯る不必要の廢物の如きものでも其必要に應じて用ふる時は、非常な有益のものとなすことが出來る、是が即ち經濟である、萬事斯の如く注意せねばならぬと、懇々と説解せられましたが翻つて考へて見ると、實に詰らない所である、枯葉

社會及教育の發展

ラッド博士講演

一體社會の幸福安寧と進歩發達は、一に社會の單位たる、箇人の教育奈何に依らざるを得ない、そして此關係には、直接と間接と二つあるが、先づ其の間接の方から云はう(一)土地や物質的條件が、社會の進歩に影響する所は、頗る重大であるが、教育は幾分か此等の條件を左右することが出來る(二)風俗習慣また此等から源が發する法律、其他諸般の道德的基礎、祖先からの遺傳的社會狀態等は、亦教育の力で漸を以て改良する事が出來る、之は近く支那を見れば直ぐ分る事なので、支那が今日の衰弱に陷つたのは、一に固陋な教育制度に固着してる爲の外はないのだから、若し支那帝國の覺醒を計らうとならば、どうしても先づ新教育の勃興を計られねばならぬ▲次に箇人箇人が善良な品性と、聰明な智識を持たなければ、人と人との關係は圓滿にならず、其間の衝突を無くすることは出來ぬ、各階級互に協力して、職業を勵む樣にならねば、現時の社會に絶えぬ處の厭ふ可き資本主對被雇人の爭ひは、何時まで立つても消滅することがなからう、要するに各人が能く倫理上經濟上の原則を充分に理解して、始めて充分な社會の活動も出來るのである▲次に社會の幸福進歩を、何故教育に待たねばならぬかに就ては(一)社會に物質的條件を利用さするものは、即ち學術である、此理窟は世に無教育や、殊に不經濟なものが無いのにも分るであらう、彼のパレスタイン印度支那或は朝鮮などの山を見ると、木が悉く伐り取られて、赤裸々になつてる爲に、雨が降れば直ぐ洪水となり、國土は荒れて昔の面影を止めない(二)物質的幸福の要素を發見し、利用し、社會を改良するも亦學術の賜物である(三)箇人の健康を維持し、人の命を長くし得る處のものは醫學衛生學である、之に依つて見ても、文明人は學術の爲に何程の幸福を得て居るか、此點に於て野蠻人位悲慘な生活する者は無いのである、併し如何に、何人とても、精力を濫費消耗することは、國民元氣を衰亡する原因なので、一面不經濟であると共に、他面に於て不道德たるを免れぬ(四)は特に注意を煩

はしたいので、夫は外でもない、國民娛樂の種類である、教育は國民に哲學文學美術等の嗜好を與へた、併し近世の物質的文明は、次第に生存競爭を激烈ならしめる結果、國民が與られる娛樂の度も、強度の刺激でなければ滿足せぬ様になつて、之が爲國民は其性慾を折制することが出來ずに、遂に不品行になり、不健全な嗜味を樂むに至つた、縱令ば露國民のウオツカ酒、支那國民の鴉片杯の如きである、甚しいのは文明國に於てさへ、日夜俱樂部に出入する者がある、中には妙齢の婦人すら、見受る様になつたのは、悲む可き事である、此點に於て日本人が天然美の愛と云ふ簡易な方法に、慰藉と滿足を得て居るのは、甚だ喜ぶ可き事であつて、益々奬勵せねばならぬことゝ思ふ、唯だ個人の文學美術の趣味のある者が、必ずしも道徳家でない様なもので、文學美術の隆盛が、必ずしも國家の健全と一致するものでないと云ふ事は、返す返すも忘れぬ様にありたい▲最後に述ぶべきは、宗教と教育の關係である、之は日本の現在に究めても、随分と込入つた議論もあり、英國にしても教育法案の行き惱みなどがあつて、國により時により同一に論ずる譯には往かぬ、唯だ一つ此に否む事の出來ない一つの眞理は、凡そ時の古今國の東西と、文野とを問はず、全人類を通じて、宗教心の無い者は無いと云ふ事である、之は近世の人類學心理學の結論の規を同じくして居る論決でもあれば、又た獨逸の人類學大家ウエーツ氏も其通り明言して居る、人民に神聖な宗教心を修得させれば、宇宙萬有を總べて不可思議に感ずる所から、其處に一種不可能の或者存在を信ずることゝなつて、敬虔の念を起す、夫れと共に博愛の精神が生じて、人類は勿論憐憫の情を一般の生物に及ぼすことゝなるであらう、夫れが他方面に顯はれるものが自由の精神ともなれば、又た神に對する随喜渇仰の信念ともなると云ふ譯で、其歸着する所が忠實な服從心である、此の通り宗教的信仰は社會の幸福安寧の基礎となるものである、以上教育から宗教を分離することは大に害を得た事では無いと信ず、

まで始末せねばならぬのかと、亞米利加と云ふ國は外面は立派であるが、内部は斯の如く、枯葉迄を始末して外面を飾るのであるか、實に汚い、厭な國であると思つてからは、此國に止ることが厭になつたさりとて今更一業も得ずして歸ることもならず、實に途方に暮れましたこともありました、何れにしても、ものには極端がありますから、それは程よく其長所を取り、其短所を棄てると云ふ具合に、取捨して行かねばなりますまいか、凡てが斯の如き有様であるのです、

西伯利亞の天地

山田素表

今年二月二十二日友人戸田君と共に東京を發し廿四日宮島丸にて敦賀を出帆し、二十六日アスコリート島に假泊し二十七日浦港に入り二十八日上陸した、

日露戰爭の結果今迄思つて居たよりは、存外露西亞の弱いことが知れて來て、御同樣大に力める譯であり、又愈々西伯利亞内地に入つて露西亞人民の思想感情に接し、或は其政治狀態や社會の實狀等を見るに及んで、成程之では露西亞が負けねばならず、日本が勝たねばならぬといふ理由を見透かす事も出來て、愈々以て得意滿々の體であつたが、偖茲にたつた一の露西亞の甚だ恐るべき點を看出した事がある、其は敦賀附近始め沿海五個所に漂着した水雷が五個といふのであるから、之には全く露西亞の恐るべきを感ぜざるを得なかつたのである、

浦港から汽車でニコリスク驛に達すると、爰に三時間程停車して居る中食料の用意に戸田君と下車してプラットホームへ行くと、折柄滿洲線の一列車が到着したので非常の混雜であつた、余等が買物をして居ると、背後に立つて居た露人二人が余等を朝鮮人なるべし抔と頻りに囁いて居て、甚だ耳觸になつて我慢がならぬので、否日本人と一喝すると這々の體で姿を隱してしまつた、然し實際朝鮮のハイカラを見ると、日本人か朝鮮人か我々ですら判斷に苦む事がある、

流暢自在なる戸田君の露語に釣込まれて、同乘の露人が腹藏もなく政府に對する惡口を語れば、軍隊の惰弱をも罵り飛ばすといふ景氣で、中々賑かであつたが、段々夜が更けて話相手も少くなつた頃、一域隔てた室に小供を連れた婦人客が居て、折しも其小供が何かダヾを揑ね始めた、すると其母らしい人の聲として、音無しくしないと日本人を連れて來るぞと言つて賺して居るのが聞えた

萬事規律と便利とに富む日本の汽車に乘馴れた身には、露西亞の鐵道旅行は甚だ不快極まる事が多い然し面白い可笑しい便利も往々ある、ハバロフスクに到着したのは夜半であつて、市街へは半里計りあるのと夜中は物騒であるといふことで、同乘の露人が勸めるので其儘列車内に一泊する事となつたが、汽車の中に野宿と來ては、露西亞ならでは得られぬ調法であらう、

ハバロフスク市は黑龍江州總督府のある處で、浦港よりは狹いが烏度小ジンマリした町である、川字形の丘陵を直に市街の大道に執り、其れに秩序正しく横町を畵いてある、中央の大通の端に聖堂があり其先に公園がある、公園の下に直に有名なる黑龍江がある、松花江と烏蘇里江とが其れに落合つて茲に大黑龍江を爲して居るので、殆んど向岸が見分け難い程廣い、此公園に立つて此大河を望む夏季の風光は見ものであらうと想像されて、今でも懷かしい氣がする、

支那朝鮮人の浦港に夥しきには一驚せり、市上は此等の勞働者にて鼻を突くばかりである、多くは馬車挽て、其むさくるしい風體と來ては見られたものでない、而して一體に支那人朝鮮人が露西亞人の間に如何なる待遇を受けて居るかと言ふに、夫は亦甚だ悲慘なものである、彼等が拳骨を喰ふ位の事は未だ上々吉の方で、殆ど人類として見て居られない位なのである、又彼等の特性として其んな事には頓と平氣の平左で、唯營々として下等の勞働に服して居る所、我々日本人には頓と其心事が解し得られぬのである、

浦鹽の停車場で、ハバロフスク行の發車を待て居ると、五十恰好の露人が馴々しく余に話掛けて來た折柄戸田君は義勇艦隊會社へ一寸往つて居たので、余は大に閉口したのである、夫にしても此老人は何人であるのか、甚だ解せない次第である、傍に居た日本の商人に通譯を賴んだが、矢張譯らない、段々向ふが話す中に礑と思ひ付いた、かれは親友グニー

ロフ君の會社に居た老番頭にて、浦港到着匆々訪問した時、傍に居て色々親切に話して呉れた老人であつたのである、

愈々發車の時刻到來となると、此老人は切符やら荷物やら何呉となく斡旋して呉れる、真先に戸田君が二等室に乘込んで、余等同行日本人四名の爲に一脚を占領して待つて居ると、其處へ商人らしい支那人が來て其一端に腰掛けた、戸田君が此處は我々の既に占領した領分であるからと言つて退去を迫つたが中々承知しない、其處へ老人が我々を案內して來て、其様子を見るや否、無闇と支那人の腕を握んで席から引摺り下して、我々を坐らせた、

此には且驚き且氣の毒に思つたが、然し此んな事は殆ど普通のことであるさうで、支那人が何んなに先に席を占めて居ても、露人が乘込んで來て、席が無いと、顋で下知をする、すると唯々として席を辭つて、立往生と來るのである、若しまご〳〵して居ると、忽ち此の老人の仕打と同様の荒療治を喰うのである、露人の横暴も甚だしい事ではあるが、實際亦支那人の不潔には閉口せざるを得ぬ次第で、現に二等室に乘込んだ支那人で、殆んど乞食の様な風體なのがある、如何に同情を以つて見るも、之と席を列ぬるのは實際好い心持はせぬ、

一等室二等室には支那人の乘客を見受けるが朝鮮人に至つては、全く皆無である、此の一事は既に兩國民貧富の差を示して居る、嚮に記した乞食の様な風體の支那人といふのは、寧ろ是は富者に相違ないのである、卑賤の風體をして居るのは、用心の深いのであつて、身装から言へば三等室に紛れ込んで、何喰はぬ顏して居るべきであるが、然し三等室は却つて危險が多いので、身装にも構はず、二等室に身を入れて、何んな侮蔑も忍んで通すと云ふ實利主義の支那根性が明に讀める、現に車掌に横面を擲られたのを見た、

戰爭前露西亞人が日本人を見ることの如何なる有様であつたかは、余の實驗なる所なるが、支那人朝

鮮人ほどの侮蔑は受けて居らなかつたにせよ、決して尊敬せられては居らなかつたに相違ない、『東洋の猿』から『勇敢なる日本人』と露西亞人の對日本思想の變化したものを以て見るも明かである、實に今日に至りては、日本人に對する彼等の態度は非常に變つて居る、唯往々どうかすると朝鮮人と見違へられて、意外の不快に遭遇する場合がある、

汽車中で余等と同室した二人の士官があつた、一人は中老で、他は年少士官である、此の年少士官は、いやに濟まし切つて、見向きもせぬといふ調子である、必定余等を朝鮮人と見ての事であらうと思ふたので、曾て露國俘虜に贈つた寫眞帖を一冊進呈すると、余等の日本人たることが知れたので、俄然として態度が一變して來た、が頗る亦きまりの惡さうな調子で、何時か場を外づして終つた中老士官に至つては、滿腔の親愛を注いで語り、且互に名刺と握手を交換し、他日の再會を期して或停車場で別れた、

此の老士官の話にどうも日本人は先天的に戰鬪國民であるといふから、其は亦何故と問ふと自分は戰爭中ニコラエスク地方の守備軍に屬して居た、何れ日本の水雷艇が黒龍江を脅すに違ひないといふ所から、河口附近に水雷を布設した、果然遣つて來た

師走十題



其の二　取やり

ソラ今お客が引つ掛るから見て居ろといふ調子で待ち構へて居ると、驚いた、丁度水雷の在る邊まで來たと思ふと、つうつと歸りて往く、何度來ても其通りだ、間が拔けて馬鹿らしくもあり、腹立たしくもあり、果ては燒腹を起して、此は必定土人が日本人に水雷の在所を内通したのであらうなんて、難癖付けて、土人を捕へて大に虐げた事もあつたが、實は日本人の戰鬪上の智識と實驗とには驚かざるを得なかつたのである、……と答へた、

露西亞人民の其政府に對する不平は隨分深刻で亦餘程廣く渡つて居る、若し露西亞が尚半年も戰爭を繼續したならば、第一に西伯利亞地方の物貨が殆んど拂底の極に達すべく、之と共に所在に暴動が起つて、日本人と戰爭するどころの騷では無くならうと思はれるほどである、斯く云ふ人民を控へて外國と戰爭を敢てするが如き、實に露西亞政府の意が解せられぬ、如何に金力があらうが、兵力が强からうがそも〳〵戰志なき國民を提げて、何の勝利が期せらるゝものか、露國戰敗の原因は何ぞと問ふものがあるならば、余は直に答へ得る、壓制政治是のみと、

米國貴婦人と慈善事業

男女同權主義の現實に行れて、世界中第一の活潑人種、語を更ればお轉婆として知れたる米國の婦人も、其の半面には依然血あり、淚ある優しき女性にて、殊に貴婦人界に於る慈善事業には、頗る見るべきものあり、即ち左に掲ぐるは、府下角筈なる精華女學校の學監勝田けい子女史が、先頃學事視察として、渡米せし際、親しく見聞せし土産話なるが、他山の石以て衒氣に富む、本邦貴婦人界に益する所尠少ならざるべきか、紐育市中最も風致に富み、且つ衛生上好適地たる、ハドソン河に臨みし高燥の地に、清楚たる一病舍あり、此ぞ難療不治の疾患に罹りて、世に棄てられしたる有ゆる患者、及び不具者百餘名を收容せる所にして、院内に寄宿せる七名の醫學博士は、枯れ果てたる樹を、再び花咲く春に會

はさんと、殆んど献身的の治療を施せるのみならず患者の食事の如きは、其の病狀に依りて、百人百樣に善盡し美極はまれる品を調へて、懇待最も努めつゝあり、加之も是れ自費にあらず、公費にあらず、涙に富む多數貴婦人の温かき手に依り、患者の何人たるかを問はず直ちに收容して斯くは懇篤を極むるなり、而して貴婦人は此の病舍に於ける費用全部の負擔を爲す上に、恰も戰時中我が貴婦人が一堂に會して、繃帶製造に勉めし如く、一週に幾時間かの規定を置き、各々家庭の餘暇を此處に來り會して、患者の衣服調製又は慰問に努むる次第なりと、又同市イーストリヴアーといふ貧民窟に、一の女子職業學校あり、始めは貴婦人中特志の二三名が、自ら下層女子に技藝を授くべく創立せられしものなるが、漸次多數の熱心なる贊成者を得て、普通の學校に入る能はざる憐れの年少子女に、學術と技藝とを習得せしむる學校となりしが、昨年中或る一老人の資金として、十二萬弗を一時に寄附せられしより、此程宏壯美麗なる大校舍の新築成り、前途に炳然たる光明の永久に輝やくを見るに至れり、而して入學當時、己れの姓名をすら署する能はざりし者が、卒業後は何れも一週間五六弗の收入ある身分となる由なり、其他貧民の子女を收容して、日常の實務を懇篤に習得せしむるもの、不具の兒童のみを收容して、學藝を授るもの等、彼地貴婦人の温かき手に成る慈善事業は、枚擧に遑あらず、而して又此等の事業が殆んど貴婦人に依つて發起經營せられつゝあるも、一奇と謂ふべく、尙ほ發起者及び贊成者は、單に資財を贈くるに止まらで、各々能ふ限りの餘暇を割いて、教師となり、保母となり、看護人となり、朋友となりて、倦まず屈せず努めつゝあるは、寔に讃嘆に値するものありといふ、



文藝



折にふれて

文學博士　末松青萍

平塚にありけるころ

高麗山の松村越にうらゝ〳〵
　雲井にはるゝ富士のしら雪
空蟬の世をしら砂の磯馴松
　かげゆくほどの心しづけさ
相模潟浦わ〳〵に月さえて
　雁なきわたる伊豆のしま山
見る限りひらだつ松のあなたより
　一穗ふた穗とたつけふりかな

枕橋なる某樓にて

ことゝひし其面影はありやなしや
　おなしみぎはの鳥にとはばや
わたし守心してさせ水馴棹
　陸にも波のたちやすき世を

桔梗が原にて

矢さけびの響は絶えて秋高き
　ききやうが原に野菊花さく

甲斐なる惠林寺にて皷琴の二泉をきゝて

山水のならすつゞみと琴の音は
　いとゞしづけきものにざりける

機山の墓のほとりにて

ひるも小ぐらき杉木立
　岩根にむせぶこけ清水
こゝを常世の床にして
　臥しつる君が在し世を
思ひつゞけてたゞずめば
　惠林の鐘に空くれて
又も身にしむ富士おろし

御嶽に詣でける折水晶溪にて

水と岩と山と雲とのたゝずまひ
これぞまことの仙人のさと

欧澤より下る舟中にて

駿河路やふきくる風に雨そひて
霧にきえゆく富士のしげ舟

興津にて

富士の峰をうつす入江の眞中に
一すぢ寄し三保のまつばら

詩と婦人

戸川殘花

詩はむづかしく、歌はやさしく、または詩は男のつくる可きもの、歌は女のよむ可きものと思ふ者も多し、されど歌人も漢詩の思想に養はれしが少からず、萬葉集には旅人郷を初とし家持も、憶良のも一讀して、漢詩をよく讀まれし人と云ふことは知らるゝなり、古今より新古今に至り、若し一々に指摘せは歌人が詩人に負へる所は思ふよりも多きに驚かるゝなるべし、勿論我が歌集のみ讀み、あるは其師の教にのみ遊びて歌書をひもとく人は、先輩の糟粕を嘗むる方ゆゑ、別のことゝしていやしくも我れの歌よまむと思はゞ、必ず漢詩と洋詩は坐右に置きて、をり／＼に味ふべきことなり、もとより漢詩には佛老荘などの思想を唱へ、又はあまりに豪放にして例の白髮三千丈などは婦人の唱ふにはふさはしからずと雖も、香奩體ならざるも、やさしく麗はしく詠せしものはあまたあり、少しく抄出して婦人も漢詩を讀み味はんことを望む、

穿レ花蛺蝶深深見、點レ水蜻蜓款款飛、

蝶が花の間を穿りて深々見かくれつ、蜻蜓が水の上にとまりては立ち、款々ろさうに、飛ぶ景色を叙したる一句なり、たま、

桃花細逐二楊花一落、黄鳥時兼二白鳥一飛、

桃はちら／＼と柳の花と前後して散り鶯はなにか白鳥と飛んでゆく光景なり、桃花と楊花と黄鳥と

白鳥と相對する所など當句對と稱して玩味すべき所なり

江村

淸江一曲抱レ村長、長夏江村事々幽、
自去自來堂上燕、相親相近水中鷗、老妻畫レ紙爲二棋局一、稚子敲レ針作二釣鉤一、多病所レ須惟藥物、微軀此外復何求、

この律詩など前聯は田舍の景を叙し、水の流れが淸く村のまはりを繞り夏の日の長い頃も別に俗用もなく、燕子が出は入りをするのと鷗がなかよく遊ぶのみ、後聯には家庭の事を唱ひて、年老つた奥さんが子供の遊びに紙で碁盤をつくり、子供はまた針をたゝいて釣の道具をこしらへる、先生一人は何の慰みもなく藥瓶を友として鬱ら〳〵と日を送る寒貧の境遇を寫せしなり、これまでの詩は詩聖杜子美の詩なれども其詩想をうつして我が物と爲さば和歌にも俳句にもなるなり

馬上續二殘夢一、不レ知二朝日昇一、
落月澹二孤燈一、亂山橫二翠嶂一、

芭蕉が俳句にこの意をよんで、

馬に寢て殘夢月遠し茶の烟

となしゝは、實に靈腕なるべし、朝日をいはずして有明の月をいだし、殘月とはせずして、殘夢月遠とつかひ亂山翠嶂をうつさずして、藁屋をもるゝ茶の烟を見つけしは驚くべし〳〵、かく詩の意はとる可きなりこれは、蘇東坡の太白山下早行と題せし律詩なり、

小樓一夜聽二春雨一、深巷明朝賣二杏花一、

これもまた和歌にも俳句にもなし得べし、夕べは軒の玉水をきゝ、朝には花賣の聲を何新道とか言ひつ可き小路にて聞くと云ふ洒落た詩なり、辨髮の姿をかしき支那人にも此風流韻事あり、これは淸朝ならざる昔の宋の陸放翁の詩なり、

銀釵女兒相應歌、筐中摘得誰最多、
歸來淸香猶在レ手、高レ品先將レ呈二大守一、

茶摘女も銀の釵で今日を晴れと着飾り、面白く唱

ひつゝ摘みためし茶をたがひにほこりあふ光景は一幅の畫圖に似たりとは、明の高啓邸の採茶詩なり、

水仙秋菊並幽姿、挿向磁缾三兩枝
低亞小窓燈影畔、主人病起對寒時

これは清の錢牧齋が内人瓶北を挿むを看ると云ふ題なり、如何に夫妻の情の濃かなるかを見る可し、此他我が詩人の集をさぐらば歌ふべきもの詠ずべきもの幾百萬あるか數ふるに暇あらざるべし、詩と婦人は疎きものにあらず、餘暇を利用して和漢の詩を學びの師につきて聽くべきなり、余は婦人令孃に詩を作れとは云はず、其大意をばさぐれとこそ云ふなれ、またをりもあらば斯ることとものせん、

錦心繡膓とは京紅江戸紫の色のみにあらず純子繻子の漢もよし羅紗のしやう〳〵と降る亞米利加もよし、

川時雨

都鳥羽音もさむしすみ田川
つくばおろしに時雨ふる日は

歲のくれ

小山直子

いたづらに過にし月日を惜みつゝ、悔ゆる歎きは年の尾毎の習ひなれど、今年も亦同じ言くり返す頃とはなりぬいで〳〵、今年は甲斐なき事は露歎かじ笑ふ方には福のよるといふ世の諺もあめれば、笑みつゝぞ年は送らむと思ひかへせど、如何はせん、幸なき身のかなしさは、笑みを含まむ便りもなければ、すべもなし、さはいへつく〳〵想ひめぐらして、常に訪らひなれたる某大人がり尋ねむとて、やがて出行きつ、此大人は早うより孔子聖の道に奧深う分入り給ひて、德高く世の人にも思はれて、時めき給へり、刀自の君はた萬に情深うものし給ふさがにて、妹脊の中らひ睦まじく、子寶あまた持たまへれば、いとさかしうきすくなるわく子、らう〳〵しう愛嬌つきたるみむすめ、あるはめぐうていはけたる兒達あまた在まして、とり〴〵にいとめでたし、か

く賑はしう、過し給へば、刀自の君年を迎へむ設ともいそしみつゝ、いとはなやかなる装束とも又はかざしの花よ翫び物よ、何くれと心を盡して、いとなみ給へるを、とうてゝ見せらるゝに、彼の光源氏の君が、かた〳〵にうらみなくものすべかりけれとて、いみしう清らを盡したる、細長小うちき數々てうせさせ給ひて、分ち奉り給ひけむいにしへでとさへ思ひいでらるゝばかり、目もあやなり、見るに心の慰まれて、雪間の梅のかぢけたる心もさすがに年を待つ心つきて、自打ゑまれぬかし、さるは此いはけたるとちがまださきより、かるたよ、すご六よともてさわがるゝに、そゝのかされて、雪をいたゞく老が身も、打ましらひつゝ、まき取よ、てう はみよと、心をうつしてのゝしりあひて戯れたるは、よしかた腹いたしと見む人は見よ、かくてこそ年わすれともいふべけれと、いとうれしうて、いみしうゑみかたまけつゝ、日ひと日夜ひと夜遊びてこそは、悔ゆるなげきもわすれたりしか、

冬の歌

中山幸子

初冬風

秋すぎていくひもあらぬ冬の日に
かはる風こそ身にしみにけれ

時雨

しぐれたる空に渡れるかりがねの
こゝろに人もならはしものを

霜夜

冬の夜は寒さが故におく霜に
さえたる月を見る人もなし

年のくれ

なに事もなせしことなく暮にけり
また來む年をおもひやらるゝ

大晦日

數へてもすぎし月日のをしまれて
ことしもけふとなりにけるかな

ひたち日記（三）

橘　絲子

白雲の君、正しき御教を此の里につたへ給ふこと六とせ、怒れるを柔らげ、眠れるをさまし、迷へるを導きて、そのいさほしいちじるく、清子の君、また才學ありて、よくこれを内に助けたまへば、郷人敬ひしたひけるを、今しとゞめんすべなくて、別るゝこととなりぬれば、一夜その御すまひにて、送別のむしろはひらかれぬ、憂き心もてつどへばにや、初よりいとしめやかにて、あまたの人のありとも知られざりけり、おのれ此里の人ならねはとて、たかどのにさけたりしが、やゝありてよみ出でし送別の詞の、情切にして、辭迫れるこゝかしこの、微にもれきこゆるをよそながら聞くさへ、うたてしきを、わが身の上ときゝ給ふ君の心やいかなるらん、さてもまた、誠ふかきつどひなる哉と、われひとり心にたゝへたりき、

伊藤鳳ぬしは、靈緣あれば、其家をも訪ひてん、道はるけしときけば馬にや乘りて行かんと言ふに、人々いたく笑はせ給ひ、駒も馬も只言の葉の中にかき消えて、はては雨しげくふり、道あやうしときゝたれば、得行かざりき、鳳ぬしこたびわが方に音づれたまひて、くさ〳〵の楓葉、はた唐やまとの歌など、父暘谷の君のを合せて、あまたよみたまへり、山形空山の君、わが吹笙のさま、畫にうつしてたまはるとて、俄に筆染め給へり、鈴木ぬしがり、旅装すとて、大方ならずさはだち給ふかたへにて、かゝる常のわざすれども、心なしと見たまふ人もなかりき、此君の家風の美はしう暖かきこと、總て此のたぐひなり、あまたの日を此に送りて、深く其なさけを知りければ

　　ほど遠きなれぬ旅路のうきこととも
　　　　君がななけにうち忘れつゝ

とよみてまゐらせけるに、清子の君、返しとはなく

うき旅の名にはそむかぬかり枕

みやこの夢やこひしかるらん

しばしへて、わが肖像は成りぬ、よくこそ似かよひたれなど、人々ののたまふに、嬉しさも深かりき、空山の君これに、和歌俳句を添へたまひつ、

中井黄離の君に送る

山妍にして水麗なるも南なき常北の地は君をして數週を閲せしむる能はず嚠喨たる鳳聲あゝ我いづこに之を求めん、

常世哉月と花とを無分別

君東都三伏の苦熱に呻吟し給ふとき我はこの地にありて冷體を君が消息によりてわたゝめん、

物ほしと衣こふ冬の夜寒かな

我幼より風流を好みて而もその一片の面影だに止めず深く君に耻づる所なり羊頭を掲げて犬肉を賣る奸商の手段となとがめ給ひそ、

今は背北鳥もあり我心

以上句を合すれば三自らとりて誦するにその無味なるでと乾燥せる蔬菜の如し然りと雖も空山の心緒このうちに存するものあり、即寫して君に送る、

黄離の君にそがみすがたを寫しまゐらし、時

思ひきやこの山里にめぐりあひて
今日みすがたに筆とらんとは、

とあれば、そのかへしに、

われもまた旅路に君が筆かりて
あとゝめんとは思はざりけり

またいやのぶるとて

むくいせん品しなければ三十もじの
言葉にいやをのべてさゝげつ

白雲の君畫を善くしたまひ、芳子の君、手かき歌よむことをたくみにし給へば、その合作の扇面得まほしうて、強いてこひまゐらせけるに、松蔭の君其裏に詩さへ書きそへ給ひしは、わきて嬉しかりけり、此は何れもわが需にて、勿來の關をうつし給へるなりけり、

此里にたのしき日を迎ふるやうなりにしは、きのふけふとばかり思へる内に、はや別れを告げん時は

至りぬ、此のさとの君たち、多くは初めて面合せまゐらせしなるを、かにかくとはしたなき身に、まことをそゝぎ給ひて、更る〱鮮なる魚、あまき果物など、よせたまひ、鈴木ぬし去り給ふとも、御身ひとりはとゞまりてよなど、すゝめ給ふ、うれしきものは、人のまことなりけり、されば一夜だに旅ねの空の物うしてふことをも知らざりしに、それすら今宵かぎりとなりはてしかば、猗子の君と、二三の君がり、別れを告ぐ、その時西丸翁媼の君にまゐらせける

いのちあらばまたやあひみん君が身のよはひいよいよ高くなる日に

師走十題



其の四　煤はき

こよひ鈴木ぬしがり宿らせ給ふまれ人三人あり、名残りのをしまるゝまゝに、小夜ふくるまでまとゐして、むつましう打ちかたらひ、枕につくと思ふまもなく明けわたりぬ、朝餉もはてぬうちより、

人々あまたつどひたまへど、門出にはまだ時ありと思へば、ひとり露ふかき庭をめぐりて、情なき池水の上にもさびしき影をみとめ、また高どのにのぼりて、海山にもはるかに離情を告ぐるとて、

人々の別れのみかは海山も
今をかぎりのながめなりけり

さらでさへ、心ぼそきけふのわかれに、猶思ひやらるゝは、かなたの山深く葬らるゝいとしの子二人もあるを、打ちすてゝ去らせ給ふ、清子の君の御心にこそ、そが墓まうでせばやとは、都にありし時より定めてしを、さはりありて叶はずなりければ、いと心のこりせられて

わが友のつゆもまだひぬなでしこを
土にまかせをゆくぞかなしき

顧みれば、けふの別れを惜みて、郷のはしまで送らせ給ふ君たち、いとあまたありければ、清子の君に、

人あまた送れるみても知られけり
日頃つくしゝ君がまことは

一たびは見馴れし海山に別れ、二たびはちぎりを込めし君たちに別れ、こたびは、わきて物ぐるほしき清子の君との別れとはなりぬ、友部となんいふ所にて、君たち車を　って、淋しう殘されし　わが方を、はるかに打まもり給ひしみすがたも、やがて黒けぶりの中にみえずなりければ、

をしめども殘るは袖のしづくにて
はるかにきゆる君がおもかげ

とぞ思ひつゞけゝる、げにすぎ去りては、一時の前なる樂しさ、悲しさも、さながら夢のこゝちこそせらるれ、

わが都へつきし頃は、清子の君まだ旅路にいませば、西丸翁嫗の君に、先づ音づれまゐらするとて、

とにかくに先つさゝけてん今や早や
都の空につきし音づれ

言の葉をつたへてよ君諸人に
今しも家に安くつきぬと

家事

音聲の衛生

醫學博士　岡田和一郎

音聲と云ふものは、己れの意思を他へ傳へる道具である、心の中で思つて居ることを人に理解させやうと云ふ時に音聲を出して人に傳へるのである、音聲を善く發せない人は、自分の思ふことを十分に人に理解させることが出來ない、又音聲を巧く發することが出來るならば、人を自然に感動させる所の能力を有して居る人である、即ち好い聲で好く音聲を使つて言つた時には、人を感動さして自分の思ふことを成就させる、又之に反して惡い音聲であつたならば、人を感動せしめざるばかりでなく、自分の思ふことも成就しない、故に音聲の美にしてさうして巧く使ふ人は、自分の思ふ事を人に傳へ、其人を感動させてさうして思ふことを成就させると云ふやうな大層に有難い所の効能がある、さう云ふ次第であるから、此音聲の好いと惡いと云ふことは、人生に取つて直接に大變な關係がある、

そこで音聲の出來るのには種々の身體の部分が入用である、即ち第一には胸膈です其次は喉頭と咽頭それから口腔及び鼻腔是だけが入用である、鼻と口と咽頭、即ち口の方から見える所の此咽頭、(咽笛)にそれから胸膈、是だけの場所に若し一つでも缺損があつて作用が不十分であつたならば決して好い聲は出ませぬ、それで好い聲を作るには、必ず十分に空氣を吸ひ、さうして空氣を胸膈へ吸ひ取つてから、其空氣が即ち此狹い喉頭の中にある所の聲帶と云ふ極堅い肉が二つ並んで居る、其間を空氣が通つて往くのである、胸膈の力で吹き出す空氣が其間を通つて往くのです、丁度三味線の糸が觸れるやうな具合

に空氣が觸れて行く、それで『ア』とか『イ』とか云ふ斯う云ふやうに音が出る、其音が喉頭だけを通つて時には母音だけしか出來ない、其母音が咽頭、鼻咽腔、鼻腔若くは口の中へ遣て來て、而して是等の部分に於て或は色々に膨脹れて居る所へアイウエオの音の出來たのがやつて來て、それに衝き當つて、其衝き當つた內に色々の音を輔けて來て、さうして始めて好い音が出來る、試に口笛を吹く、指の二つの間を通るのが聲帶で、手を開けたり閉だりするので音が高くなつたり低くなつたりする、即ちこの洞穴が大きくなつたり小さくなつたりするのが、即ち口とか鼻とか云ふ部分になるのである、即ち喉頭を通るまではどの人も大差なけれども、咽頭や口の形狀等に依つ　とこへ音が觸れて、さうして輔音を得て或は美聲となり惡聲となつて出て來る、それが即ち生理である、それ故に若し此生理を理解してさうして聲を好くしやうと思つたならば、第一に鼻が健全でなければならぬ、口が健全でなければならぬ、

それから又鼻の奥の方即ち鼻咽腔が健全で、それから咽頭が健全であると云ふやうに、總ての部分が健全でなければなりませぬ、それで若し鼻が詰つた時には例へば歌を唱ふ人とか或は藝人とかゞ、鼻が詰つて居ると其人の音聲と云ふものは咽喉では或は母音だけは好い音が出來るかも知れぬが、補音即ち鼻で出來る所の音が、もう鼻が詰つて鼻へ出ないからして美音が出來ない、妙な音になつて仕舞つて、決して音樂的の音にならない、又鼻が詰らないでも、鼻の穴が狹ければ矢張り本當の音が出ない、それから咽喉の穴が狹くつても本當の音が出ませぬ、又歐羅巴の小供は十人寄れば半數まで鼻咽腔內の扁桃腺の肥大症を有して居る故に歐羅巴の小供は多くは口で呼吸をして鼻が塞つて居る、そんな小供は皆な變な鼻聲を放つのみにて其儘にては到底美い聲を出す事が出來ませぬ、さう云を者を音樂學校に遣つて十年二十年仕込んでも、本當の音を出すことは出來ぬ、さう云ふ小供を醫者の處へ連れて往つて診察

をして貰ふと、其鼻の中には腫物が出來て居つて、本當の音を發することが出來ないと云ふことが明ります、さう云ふ風な原因からして空氣が鼻に通じないのですから、どうしても鼻咽腔內の病氣を取つて仕舞はなければ完全な音を出すことが出來ない、さうして風が鼻の中に通じるやうになつて始めて本當の音が出るのである、是は皆さん方の御注意で防ぐことが出來ない者で、もう一旦病氣になつて仕舞たら仕方がないから、醫者に掛つて、さうして鼻が塞がつて居るならば鼻を直して貰ひ、咽喉が惡ければ咽喉を直して貰ふと云ふやうにするより他に仕方がないので、是は衞生をやつた所で既に病氣になつてからだから所詮仕方がありません、それで衞生上に取つて必要なものはどんなものであるかと云ふと、一番平生の生活上に注意をしなければならぬのは空氣であります、即ち多量に空氣を胸に吸取つて、さうして其空氣を力強く喉頭に押出して、口笛を吹く時のやうに『ホー』と吹き出す時に、二つの指の間を通つて行く所の空氣、即ち原動力となる所の空氣と云ふものを充分胸に取込む方法を圖らなけれ

師走十題



其の五　夜なが

ばならぬ、それには胸膈を健全に保ち胸筋を強く致し、それから又此音を出す聲帶の健全を圖らなければならぬ、其健全を圖るにはどうするかと云ふと、一番宜いのは矢張宜しい空氣を多量に胸の中に吸込むのである、

偖て好い空氣を多量に吸込むには何うするかと申すと、是はどうしても口で呼吸をしては往けませぬ、鼻で極く清潔なる空氣を澤山に吸込むことを稽古しなければならぬ、鼻で空氣を吸ふのは何う云ふ譯で好いのかと云ふと、即ち空氣と云ふものは、通常戸外の空氣はどんな好い空氣でも多少は不潔であります、幾分か其中に塵が這入つて居る、故に其空氣が咽喉へ這入つて肺臓まで達するまでに、若し口から空氣を直ぐに吸ふ時は、空氣を漉す場所がないから穢ない儘で肺臓へ這入る、其這入る途中に狭い聲帶と云ふ場所があつて其處を通つて行くのですから、一部は聲帶の中に塵が這入り、一部は肺臓の中に這入つて仕舞ひます、さう云ふ譯ですから空氣を直接に口から吸ふと聲帶に病氣が起つて來ます、聲帶に塵が這入つて仕舞ふと喉頭加答兒など丶云ふ病氣が起る、又肺の中にも塵が這入つて居れば、氣管支加答兒とか或は肺炎とか云ふになるから、必ず清潔に漉した空氣を吸ふやうにしなければならない、そこで人間の身體には天然の鼻と云ふものがある、其鼻の中には鼻の道と云ふものがあつて、其道は眞直な道ではなく色々に屈がつて居つて、狭い處もあり廣い處もあり、又御婦人でも誰でも多少の微毛がある、それで空氣が不潔であつても其鼻からして鼻咽腔を通るのですから、大變に長い道を通る、此屈曲して居る長い道を通る間に空氣を漉して仕舞ふのである、人間の鼻の中を見ればどんな清潔な人でも塵埃が澤山溜つて居る、天然に塵埃を漉す所の道具を鼻に於て備へてある、それで此鼻で呼吸をすることを力めて往きますれば、塵埃を胸の中に吸ひ込んだ爲に喉頭に病氣を來たすと云ふ如き事を免れることが出來るかも知れぬ、其からもう一つは人間の身體の中に

吸込む空氣は一定の温度を有つて居らなければならない冬の日に、戸外の風は零度以下の風が吹く、其冷たい空氣を口からして吸込んだ時には、忽ち風を引いて喉頭加答兒を起し、若くは肺を冷却してそれが爲に所謂感冒・氣管支加答兒・或は喉頭加答兒に罹る、即ち寒さの强い時に若し鼻で呼吸をする時は、其空氣は鼻から喉頭を經て肺へ行くまでの道が前述の通り迂曲回轉して居る長い道であるから、其道を通る中に冷へて居る空氣が大變に温められる、それで温められてから肺へ這入る時分には殆んど適度であつて、自分の身躰の温度と一致した、温度に空氣が温められて胸の中に這入るのである、それ故に鼻で空氣を呼吸致しますれば、風を引く點も餘程に防ぐことが出來ます、

それから身躰に吸込む空氣は、一定の濕潤、即ち濕ふて居なければなりませぬ、乾燥いた空氣を吸ふと體内の水分を取られて仕舞つて、咽が乾くから喉頭が乾いたりして、遂には矢張り喉頭加答兒や氣管支加答兒と云ふやうになる、それ故に空氣が身躰の水分を引去らないやうに、一定の濕潤の度を有つて居なければなりませぬ、此方法も矢張口から直接に呼吸をすると、外の乾いた空氣を直ぐに吸ふからして咽喉はカラ〳〵して來る、併しながら若し鼻で呼吸をすれば鼻の道は前述の如き大變長い、さうして鼻の中には本來粘液と云ふものがあつて非常に濕つて居る、其粘液で濕つて居る所の長い鼻の道を空氣が通つて往く間に、チヤンと好い具合に空氣が濕つぽくなつて、咽喉に這入ると云ふ樣な具合になつて居るから、此點も鼻で呼吸をすれば防ぐことが出來る、故に好い空氣を取らうと云ふにはどの點から見ても鼻から空氣を吸ふ、さうして口から直接に空氣を取らぬやうにすることを注意しなければならぬ、若し鼻が詰つて居れば——或は鼻茸が出來たとか、或は風を引いたとか云ふて、鼻が塞つて居ることが澤山あるけれども、其際には早く治療して、鼻を開けて好い空氣を取なければ、好い音聲を出すに大變妨げ

がある、以上は自分の身體に於ての注意でありますが、其他普通の生活上に於て求めて清潔な空氣を吸ふやうに氣を着けなければならぬ、例へば室內の掃除を致した後には、一時其室內に塵埃が立つて居るそれから、若し西洋間を有つて居る家では、室內を暖める爲に石炭などを入れて火を付けた後など丶云ふものは、其室內には石炭の塵が澤山飛んで居る、それから朝夕蒲團を出入れした其時ならば、暗い處では見えぬが、窓から這入つて來る太陽の光線に透して見ると、其光線の中にはどうも色々綿の切や木綿の切の飛んで居ることは一面である、それを目に餘り見えないからと云つて口で呼吸をして居れば其塵が皆肺臟の中に這入つて來るので、若し鼻で呼吸をして居れば其塵は鼻の中に纏つて居る、故に室內に於ても人が澤山に出入したり蒲團を敷いたり或は室內を燃める時に石炭を餘計運ぶと云ふ時分には、最も注意して口で呼吸をしないやうにしなければならぬ、用心深い人なれば鼻と口に布でも當て丶器械的に空氣を漉して、好い空氣を吸ふやうにしたら宜からうと思ひます、是等はもう尋常の生活に於て免れざることである、何か他の面倒な方法で防がうと云ふと、窮屈になつて所詮往けないから、せめて鼻で呼吸するやうにして、口で其惡い空氣を取らぬやうに注意をしたら宜いだらうと思ひます、

衛生と食物

醫學士　久保杏林

鶏卵は養ひになるものである事は今更申すまでもなく、何人でもよく知つて居ることであるが、今鶏卵の成分を分析して見ると、百分の五十は水である、猶細分すれば白身の方には黄身よりも餘計に水分を含んで居る、また黄身の方には脂肪分が澤山に混入つて居る、そこで營養になるのは、脂肪分の方であるから、無論病人には白身よりも黄身の方が滋養になるのである、

鷄卵は半熟で食べるのが一番善いと云ふ事で、主に半熟で食用に供する人が多いやうであるが、之は必らずしも半熟でなければならぬと云ふことは無い、隨分煮過したものでも、宜しいと云ふ說が近頃出でたのである、つまり之は其食べ人に依つて、健康に差支が無い以上は、生でも半熟でも、或は充分煮たのでも、其人の好みに任して料理するがよろしいと思ふ、

從來日本の玉子の料理法は、鷄卵蒸とか、鷄卵燒とか云ふやうな兎角固く燒き過す樣になつて居るが、若しこれが半熟の方が宜いと思つたら、たとひ、鷄卵煎でも鷄卵燒でも勝手に半熟に出來るのである、又時に依つては、ソップに混せたり酒に混じたり或はビール、ブランデーの樣なものに組合せて病人に食べさせることも出來る、其他黄身は菓子及び、蕎麥などにも混じて、滋養分の不足を補ふと云ふ場合は、其用實に夥しいものである、

又白身は、下痢病人なんぞがあつた場合に、其病人が水を欲しがると云ふ時に只の水はよくないが、水の中に鷄卵の白身を入れてよく振り混せて呑ませると冷水が害にならぬ、

玉子と云へば普通鷄卵の事計りのやうに思つて居るが、魚の卵でも、或病人には、鹽辛にしておいて食べさせると、大變に効能のあるものである、又生の卵を煮て食しても滋養になる、

さて鷄卵の善惡を鑑別するには、先づ外面から見たところで其良否を知るには、外皮に少しも光澤の無い丁度胡粉を薄く塗り付けたやうなのが新しい證據であつて、非常にテラ〳〵と光澤を放つて居るのは段々其胡粉のやうなものが除れて光つて來たのであるから、光澤の多くあるほど、古い鷄卵である、夫から其外皮の色の薄紅いのと眞白なのとありますが、薄紅い方は、肉用鷄と云うて、肉を喰べるために飼つてある鳥の生んだので、白い方は、産卵鷄と申して卵を産ませるために養つてある鳥の産んだのである、何方が質が善いかと申すと、無論色の白い

方が善いのである、注意して見ると、大概紅い方の鶏卵は皮が厚い、これは滅多に生まないところの肉用鶏が生んだのであるから、どうしても石灰分が多いのである、之に反して白い方は皮が薄くて石灰分が少なく、同じ大きさでも、量目が餘程白い方が重い、夫から猶其上にモウ一層上等なのは、受精しない鶏卵であつて、之は大變に味も佳いし長く保存することが出來る、能く世上で寒鶏卵は大變に滋養になるとか、長く保存して置くことが出來るとか云ふことであるが、之は矢張り其理から出たので、寒中は餘り受精することが無いから、自然鶏卵は善いのである、

夫から猶能く分るのは割つて見るので、器の上に割つた時分に黄身が中高に盛り上つて居て、白身も二段か三段に高く成つて居るのは新しい證據で、黄身も白身もダラリと擴がるのは古い證據である、

鶏卵の半熟、序に一寸半熟の拵へ方をいへば、世間普通の半熟といふのは、周圍の白身ばかり半熟になつて、中の黄身は少しも煮えて居ませんが、あれでは眞の半熟ではない、眞實の半熟は白身も黄身も半熟に成らなければ成らぬ、今其方法の極く手輕な一法を示せば、極く弱き火に湯を指の先を一寸入れらるゝ位の温度にして掛け、其中に鶏卵を入れ、三十分より四十分間位湯煮るのです而うすると、白身も黄身も丁度よき程に半熟に成る、斯うすると味も大變によく、又腐敗する事も遲いのである、

英國に於けるマッチの消費高

英國に於て一日に消費するマッチは、平均五億本にして、婦人小供を合算して、一人に割當つれば、一日十二本づゝ消費する割合なり、殊に喫烟者はマッチを消費すること多く、マッチ製造の原料たる木材を以て計算すれば、一日に九十噸を消費し、一年に積れば三萬五千噸の多きに上るべく、若し英國にて一日に消費するマッチを一本づゝ一直線に接ぎ合すれば、一萬五千哩の長さに達すべしと云ふ、又マッチ製造の盛なる瑞典、諾威にては、年々木製マッチの二萬五千噸を輸出し、マッチに税を課する佛國にては、一人平均四ペンスのマッチ税を負擔しつゝあり、

書簡を認むる注意

黄雛女史

人の心情を喜ばしむること固よりさま〴〵なるべしと雖、聲なき言葉を一片の紙上に寫して、はるばる取りかはすてふことは、確に著しき慰藉なるべし。日夜劇務に紛れ暮すが中にも、郵便配夫が齎せる書簡を手に受けては、先づ笑ましげに開封せざるものなし、況やよく學びてよく遊ぶべき暇あるもの、戀しき郷里を離れたるもの、閑居して文墨を嗜めるものが、文待ちあかさんは理にも過ぎたり。

さまで心もせであまた送りたる文に號數などつけて、文字ある客人毎に示して樂しめるもあれば『待ちあかしたる御玉章あまりの嬉しさに、哺を含みつゝ食事の半に讀み終りぬ。』とも『いたう嬉しく悲しくて、涙に文字も得よみわかざりき。』とも『君が御文こそは吾がなやめる心を蘇らしむるものなれ。この返りごとのみは疲れたる身も忘れて、夜半すぐる頃まで起き居てかくなん奉る。』とも、さま〴〵なさけ溢るゝ言の葉を得てし折の嬉しさ、我も人も皆おなじかるべし。はたさもあらぬものとても、大かたは人の文を等閑ならず思ふが常なれば、いつしかに送りしものが、こゝかしこに藏められて、末にはあまたの人の目に觸れて、さま〴〵批評せらるゝことなしとにもあらず心して文かくべきはかゝる恐のあればなりけり。

吾が文庫に、人毎に分ちて藏せる書簡二になひわるが中に、少きも一人に四五通、多きは七八十通に及べるにて知りぬ、吾が心なく人に送りし文の數も、今此にある人の文の數しらぬとひとしくあまた處に廣がりて、好事なる人は、亦わが如く秘め置きたまふにや、と裏耻かしく心づかひせらるゝなり。凡そ一たび此の文の面に寫されたる影は、鏡の物を寫すより明にして、消えざる心の影を宿せば、いかに親しき人の中らひとても、決していふまじき言を筆にすべきにあらず。

人の撮影せん時は、其容貌の美醜を問はず。必多少風彩を整ふるは、永く消えざる形を遺すもの故、其天質以下に下るを望まざる故なり。親しき友に贈るものなればとて、誰か殊更に蓬髮垢面に弊衣をまとひて撮影する者あらんや。人皆かくの如く外貌を重んずることを知れるに、內心を重んずることと其半にも至らざるは何故ぞや。

駟も舌に及ばずとは過言の傳はり易きを戒むる言なり。然るに文字なくして傳はりしものには、自ら誤聞もやあらむ、枝葉もや加はりなん、と人未だ悉く信せざれども、已に一旦之を文に寫して人の手に投ずれば、其過言は終に滅せずして、之を見む人皆信を置くべし。されば傳はること甚だ速ならねども思はぬ害をかもし、思はぬ恥辱を招き、思はぬ事の證據物になど擇り取らるゝものは則これなるに非ずや。かゝる事は、固より屢あるべきにあらねど、必ず秘め置きたまへといひやりし文を、彼は深くも心にとゞめずして、たやすく人に示すことあれば、謹みてよからぬ言を筆にのぼすまじきなり。

他人の見むも耻かしとて、文字などいと心してかく人は多くあれど、いふべき言の種類を擇ぶことにはさほどの注意を用ゐざるは何故ぞや、御覽の上は火に投じたまへなどいひて、美はしき筆蹟もて、よからぬ事を認むるはいかなる心なるにや、風采とゝのへる寫眞に添へてふさはしからぬ。文造るはいかなる心なるにや、耻づべきは容貌と筆蹟との醜きのみと思ふは甚しき誤なり。宜しく風采を整へて撮影するが如く、筆蹟か拙らぬやうにと文書きいづる如くに、否それよりも深き注意を以て書簡の文意を正しうすべきなり。

さりとて心にもあらぬ浮華虚飾を文意に施して、人を欺くをいふにあらず。かくの如きは其罪更に深く、却りて人の嘲を增すのみなり。吾がいふ文意を正しくすとは、性に任せて、或は激論大言を吐き、或は非難攻擊し、或は男女親愛の過ぎたる言を述べ、凡て其身其職にふさはしからぬ言葉を輕々しく述べ

ざるやう心せよといふなり。一言せば情の激せる時、それに任せて文書くこと勿れといふなり。彼の狂者とは情の一部の狂ひて久しきものをいふなり。本心の失はれて定めがたきものをいふなり。人の或る情に激せらるゝ時は、本心なきこと猶狂者の如くなり。故に其いふことも多くは當然の理を離れて、若し怒に乘ずれば、あらゆる暴言を吐き、人の意をわくまで害ひ、禮なく、愛なく道なき事をも云ひ出るもの也、又若し愛に溺れば、前後左右をも顧みず、火の燃ゆるばかりに、淺墓なる事、邪なる事、賤しげなるきゝにくき事をも說きいづるものなり。はた悲しみ極れる時は、或は天を呪ひ、地を罵り、人を恨みて、狂ひ戯ふは、何ぞ狂者と異ならん。平常人に重んせらるゝ人も、事にわたりて本心を亂すことかくの如きを自ら認めし文書に證すべくんば、其人の價値確に一二等を減ずべき也、これ皆情の激するにまかせて文かき送りたる過なりと知るべし、故に人若し亂髮弊衣にして撮影せんを欲せずんば、更に此の亂心狂態を文に寫して、天質以下に見らるゝを厭ふべきにあらずや。

人の聞くを憚る言は云はざるに若かず、人の見るを憚る文は書かざるに若かず、自ら其善からざるを知りつゝ憚わる文を書きて、直に火中せよといひやるとも、人恐くは之を斷行せざるべし。かくする中に折わしく人に認められ等して、さまで深き心もなくて書きたる文すら甚く怪まれて、事漸く大きうなり、思はぬ恥辱を受くる事あらば、互に慰藉を得べきものによりて、却りて奇禍を買ふものとなるべし。

故に書簡は必心を靜めたる後に書くべし、自ら書きすぎたりと悟らば、强て投函を見合すべし、四情の動くに任せて筆を馳するは何人にもわり易きことなれば、謹みて、意滿つれども驕らず、愛深けれども亂れず、悲しめども恨まず、怒れども人を傷けず、眞實篤敬を旨とし、よく前後左右を慮りて禮を失はず、これを文かく時の心ざまとして文を造らば、必人をして、或時は敬慕に堪へざらしめ、或時は感謝

静なからしむべし。然るに一朝心を用ゐる事淺く、動き易き情のまに〳〵主義定まらぬ文のみ送らば、たとひ其書に多少の理由ありとするも、或時は野鄙とせられ、或時は其文言を厭はしめて、漸々其親しみを遠ざくるに至る。かくてこれより生ずる害を察するに、恐くは舌の害よりも深かるべし。

妻となれる心事

駿臺女史

古から英雄とか豪傑とか、云はれる程の事業をなしたる人を見ますと、大抵其の人の家庭の幸福が之を援けて居るのが、多い樣です。なぜ家庭が幸福なれば名高い人が出るかと申しますれば、其は云ふまでもなく、男子に内顧の憂がないから、安心して専ら自分の事業に熱中致すことが出來るからです。其の家庭を作るのは誰の務かと申しますと、全く妻たる人の心掛にあるのです。男子は常に社會に立つて活動するのですから、日々渡世の爲に苦勞することは、女子にくらべては、遙かに多いのです。大なる事業をして居れば居るほど、精神を用ゐることも大きいのですが、其勞れたる精神を新にし、其苦勞を慰めるのは誰でせうか、之は妻でなくては外にないでせう。其故勞れたる精神を安めて、其力を新鮮にしては、又事にあたらしむるやうに心掛ねばなりません。何しろ男子のためには、家庭といふ者は、丁度、浪風のあらい大海の港と同じ者なのですから、安心して船を泊めて置くことが出來る樣に、築いて置かねばなりません。

是ならば、自己が居らずとも、何事も大丈夫であると云ふ安心を、良人にあたへる樣でなければなりません。

先年津輕の海峽邊にて、露船と衝突して、沈沒しました、あの黄海丸の船長などは、確かに船長たる任務を盡したる人です。この事は誰しも知らない人はありますまい。誠に彼の船長は已の職務に忠實な

人であつたのですが、是には今申す通り幸福な家庭を作つて居られる船長の妻たる人にも大に與る所があると思ひます。もし船長にして、家庭に不安心な、ことがありましたならば、老いたる父母を思ひやり愛兒の後來を心配して、或は潔く任務を盡し終へることをよくせられなかつたかも知れませぬ。

其から又、妻たる人は、良人の事業をば良人其人の事ではなくて、己も共になす可きこと丶心掛けねばなりません。假令自分の爲すことの出來ないこと丶申しましても、必ず此の心だけでも納めて居てほしいのです。是に就いては、斯云ふ實話があります。歐洲で高名な或畫家が妻をめとつたさうですが、其時に友人等が畫家に向つて、吁誠に御目出度いことであるが、御身の筆は、最早や坂より降りはじめるであらうと申したさうです。なぜなれば此の畫家は、あまり富有でありませんものですから、友達等は、彼は必ず妻子を養ふためにばかりの畫で、とても誠の畫はかくひまもあるまいと察したのでした。然るに其後彼の筆は、いよ〳〵進んで、其名はます〳〵高くなりまして、つひには史上にまでも其名の止められるやうになりました彼の名と共に、朽ちない手本を出したのは、彼の妻でした。此人は畫家に嫁ぎましてから、豊でも

師走十題



其の六　埋火

ない其家計を受持つて、少しも苦しい樣子を見せず、何時も樂しく、面白く致して、良人に苦勞なく畫に向はしめる樣に心掛けながらに、又自分も畫家となつて、彼處にも此の畫の爲によい參考品があるなどゝきゝますれば、百里の道をも遠しとは致しませんでした、或時は自分自らがモデルとなりまして、晝となく、夜となく、良人を援けて、良人のためには、まるで已の身は犧牲にして、盡しました。其ですから、此の畫家の名を得たのも、決して偶然ではなかつたのです。ビスマルク公は、常に友人に語つて、余が妻に負ふところは、實に數々で、とても云ひ盡すことは出來ないと、申して居られましたが、妻となつて世に立つた位ならば、此の語を受くるほどの心掛は必ず備へられたいものです。

日本の婦人等は他に嫁せず、最早なにごとも終つた樣な考で、其より以上に智識を開いてゆかうなどの考へは、さつぱりないと申しても宜しい位です。其ですから、相談をかけられましても、良人を援けて、共に語るなどゝ云ふことは、一寸も出來ないのです。何卒嫁してから後も、日々其智識を磨くことを務めて、常識ある立派なる妻となり、良人のためには、最もよき友となることが出來る樣に、心掛けられ度いものです。

鹽鱈の料理法

下村椅水

總て鹽鱈を料理するには、必ず鹽拔をせねばならぬ、鹽拔の時間の長短は、時候の寒暖及鹽の種類に因て加減するのであるが、大概一晝夜間前後水に浸し置き、時々水を取替へるのである、其鹽氣の拔け加減を知るのには、肉の一片を炙つて風味するが最も確な法である、

▽うま煮、鹽拔したる鱈を適宜に切つて、鰹節を入れて醬油、砂糖を加減して、芋、獨活、人參等の野菜と共に煮る、總て普通うま煮と同じ方法である、

又羹を煮れば最もよし、
▽膾　鹽出したる鱈を厚く作り身にして、煠で、皿に盛り、獨活の千切して暫く水に浸し置きたるを、あしらひとして、辛子酢をかけて出す、
▽酢の物　能く鹽出したる鱈を茹滾し、細かにほくして、針生姜か粉山椒を添へ、甘酢か三杯酢をかけて出す、
▽燒物　鹽出したる鱈の皮を剝ぎ、薄く四角に切りて串にさし、日光に晒して少しく乾かしたる後、燒きて味淋をかけて出す、
▽吸物　鰹節のだしにてうしほの汁を造り、之に鹽出したる鱈の切身を入れ、青昆布か、とろゝ昆布をあしらひて出す、
▽田麩　鹽出せる鱈の肉を取り、乾して水氣を去り細かく裂きて、擂鉢に入れて擂り、纖維の如くなりしを味淋と砂糖とにていり上げる、
以上述べた料理法は、日本風の主なるものであるが、歐米諸國にては古來此魚を賞味して居る、從つて米國流の無骨鱈などは、最も高尙な製造物である、以下所謂西洋料理の方法を述べるが、之に要する器具等は宜しく我邦在來のものを應用して、成るべく此外國風の料理法を日本化せしむることが必要だと思ひます、
▽フライ　これは普通のフライ、フイシユを造ると同じ方法で、能く鹽拔したる鱈の皮を剝ぎ、骨を去つて適宜の大さに切つて、麥粉をつけて能く攪拌した鷄卵を附け、また之にパン粉をつけて、煮立つた油で揚げる、鹽の拔け加減をよくすることが必要で胡椒で味をつければよい位にするのである、
△バターソース掛け　鹽出したる鱈肉を細く裂き、豫め煮立て置ける湯に入れて、煮へ上るを待つて卸して水を切り、更に火にかけて水分を蒸散させて之を溫めた皿に盛り、溶かしたバターを掛けて、其暖い內に出すのである、都合によりてはバターの代りにラードを用ゐてもよし、これは米國人の御惣菜に能く用ゐらるゝ方法である、

▽ホワイトソース掛け、牛乳を煮てバタを適宜に加味して、麥粉を溶かしたものを加へ、焦げぬ樣に煮てドロドロの液を造る、これが即ちホワイト、クリーム、ソースである、之を鹽出して湯煮して剝した鱈肉にかける、上にセロリの細かく刻みたるをふり掛ける、

▽フイシユ、ボール　冷水をタップリ入れた鍋の中に、細かに裂きたる鹽鱈肉を、約三合入位の皿に一杯と、又厚く切りたる馬鈴薯を同じ大さの皿に二杯とを共に入れ、煮て馬鈴薯の全く煮へたるを度として卸し、水を切りて擂木樣の『ポテトーマシユアー』ものにて能く搗き混ぜ、之に鷄卵大程のバターと、能く攪拌したる鷄卵一個と、クリームか濃き牛乳かを茶匙に三杯加へて、尚よく搗きまぜる、さて之を適宜の團子に丸める、手につかぬ爲に麥粉をつけて宜し、之をバターかラードかを溶したフライ鍋で揚げる、其度合は右の團子が美麗なる褐色を呈する迄である、並に注意すべきことは鱈と馬鈴薯と共に煮る前に、鱈の鹽氣を拔かぬでもよいことである、それから又多くの料理人はバターの代りにラードを用ゆる、

▽鱈アラモード　鹽出したる鱈肉の細かく裂きたるものをコーヒー碗一杯、能く搗きまぜたる馬鈴薯を同じく二杯、クリーム又は濃き牛乳約三合、能く攪拌したる鷄卵二個、バター牛杯、鹽胡椒適宜、右の品々を能く混ぜ合せて、之を土製の燒き皿『ベーキレグヂッシユ』に盛り、ストーブに入れて二十分か二十五分間燒いて、其まゝ取出して盆に載せ、ナフキンを被ひて出す、

▽スチユード鱈　鱈の肉の白き厚きものを少時間水に浸し、柔らかになりて細かく裂ける頃に之を細かく碎き、水と共に鍋に入れ煮へ上るを待ちて注意して徐ろに水を切り、之に鱈肉の量に應じて適宜の牛乳を加へ、再び火にかけて三分間位徐々煮て、後バター一塊を加へ胡椒をふりかけ、冷き牛乳にて麥粉をクリームの濃さ位に溶きたるものを加へ、尚五分

間蒸して食膳に供す、此時能く溶した卵二個を入れて攪きませる、尤も卵は省きても風味は充分である

此料理法は朝餐には殊に賞用せらる丶ものある、

●嬰兒の啼聲に就て

前號に老産婆の説を揭げしが、今復片山博士の説を左に揭げて、母親の參考に資せん、

一、意に逆らひたる時は烈しく泣き叫ぶ、

二、睡眠を催せし時は、如何にも物憂げに泣く、欠伸する時も同樣なり、

三、眠りより醒めたる時は其聲甚だ鋭し、

四、悲しき時或は淋しき時は歔欷す、

五、飢渇の時は涙を流さず哀れげに泣く、

六、身體に故障ある時は、其故障ある場所により泣き方も異れり、齒の痛む時は大にぢれて泣き、耳の痛む時は他人の耳を貫く如き聲にて、苦し相に泣き、腹痛の時は泣き聲に間斷ありて兩脚を縮め大に力む、

以上は健康の場合

一、氣管支加答兒にかゝれる兒は咽喉に痰の纏り居るが如き聲にて泣く

二、肺臓に故障ある時は、泣くと云ふよりも寧ろ呻吟と云ふを適當とす、

三、腦膜炎即ち驚風の時は、泣き聲たかく、且つ強くして聞くに忍びず、

四、一般に重病の小兒の泣く時、涙を流すは先づよき方にて、萬一涙なきときは、特に大なる注意を要するものと知るべし、

以上は病氣の場合

●梅博士の廣東婦人觀

梅法學博士は過般清國漫遊中、廣東婦人より特別の優遇を受け、痛く其婦人の活潑にして、教育宜しきに感服し、兩廣總督及び同地紳衿の招待に臨み、一場の演説を試みたる際にも、口を極めて廣東婦人を賞揚し、就中同地婦人が纏足の弊風に陥らざるを稱讃し、昔し紐育人は倫敦に赴き、同地の婦人を一瞥して、英國婦人は如何にして歩行するやとの疑問を發したるに、倫敦人は更に巴里に赴き、其婦人を見、佛國婦人は、如何にして生存せるやとの疑問を發したりとの諺を引用し、世界に於て最も活潑に、最も進歩せる興國的の婦人は、米國婦人にして、足の大小は其國婦人、進歩の程度を計るべく、廣東婦人は清國は勿論東洋において最も進歩したる興國的活動的美容的の婦人なり、廣東地方が近來偉人傑士を輩出するも、亦其謂れありと結論し、非常の喝采を博し、廣東姫をして、頓に聲價を騰げしめたりと云ふ、



雨後の月

石鼎茶翁

本郷駒込の大観音前に、綾小路妙とて五十前後の寡婦が、今年十三の房子と云ふ一女を相手に、細き煙のかやりも燻き長屋住居、風聞にきけば、以前は京都にその名を知られし検校の奥方にて、維新以後うち續く一家の不幸に、住みなれし都を後に東のうき旅、四五年前に今のところに居を卜して、藝は身を扶くるうき世の憐れを音に忍ぶ、琴の指南にその日を送るも、かよわき女の手一つには、常に不如意の事のみ多かりき、

寡婦生態で、琴の指南といへば、何にやら人目を包む黒の被布の下にも、紅裏小袖の八口に、花も咲きさうな話なれども、西の都の榮華の昔しを、過ぎにし夕の夢とさとりて、世に捨てられつ世を棄てつるお妙の身には、切下げの撫る髮筋も、布子の袖にみださぬ折目も、ゆめ世に媚ぶる仇し心のためならで『小供の行末を頼むぞよ』この一言をこの世の名殘りに東海道の驛路に露と消えられし亡夫への、心ばかりの嚮禮の香華、雪の朝、雨の夕に調ぶる琴の音も亡夫こひしやこの娘がいとしと心に泣けば、胸の涙は指頭を通ふて、こゝろなき絲にも啼かせ、汗にまぎらして、片手にぬぐふは紅涙一滴、老樂のなぐさみにとて

身にたしなまされし、この琴の音を、草葉の蔭でおきゝやる兩親樣、さぞや無念におぼさるならん』と、狹き女の胸一ッに、三界に定めなきこの身の苦樂を藏めて、夢現の世を送るこそ、子を思ふ親の心の闇にも照る、きよき恩愛の絆しなれ、

其日々々の生計に、物の不自由なき身にさへ、病氣のためには、心苦しき事のみ多かるに、娘一人を相手に心細きその日暮の寡婦の身にとりては、かりそめなる風氣に臥しても、まゝならぬ事のみ多く、貧しき身にも病氣だになくば、三度の膳に向つても笑つて箸をとる日もあるべきに、この春の花の頃より床に就きて、手なれぬ房子に煎湯をたかせ藥をとらせて、その日を送るお妙の心のいかに苦しかるらん、見舞の客が『こなたのお孃さまは十三にはませて居らして、中々御用が足りまする』と言はるゝ御世辭も身に染みて、『人手が足らでこの娘の歳に不似合な水仕事さへ、あれよこれよとさすればこそ、自と氣もませて、我娘ながらも、よう氣がついてくれたと讃むる事さへあれど、まゝなる事なら十四五までは、大樣に小兒らしう育てたいとは思へど、貧苦は自から節儉の道を敎へ、母子の恩愛は自ら孝養の心を生みて、立居ふるまひの大人らしうなるさへ可憐らし』と思ふ事も多かりき、

母のお妙は臥床の上に坐して、今日は土曜日なれば、もう房子も學校より下る刻限なりとて、お向ふの時計が今がた十二時を打ちしを樂みに、房子の歸りを待居りしが、足ばやに表の橋板をふみならして、やがて格子戸を引きあけ、病める母親の顏を見て、莞爾笑ひ可愛口もとをついて出る言葉はお定りの『お母さん只今』

『今日は土曜日なのにお歸りが遲かつたね』

『さう、わたいはね、學校から直にお醫者さんのとこに行つて、お母さんの御藥をもらつてきやうとした

らもうお母さんは御藥をあがらんでもよいから、後は御養生をなさいとおつしやつてよ」

『おやさうかい、今日はことに氣分がよいから、わしも御藥はやめても、よいかしらと思つて居つたが、それでは飲まんでもよいかね、お醫者さんが遠いから御藥取がなくなると御前も少しはお樂だね」

『お醫者さんが、お母樣に御養生をさせなさいとおつしやるから、妾はどんな養生がよう厶いますかと問ふたらね、先生は笑ひながら、ほんとうはお母樣の御病氣には湯治は一番によいけれども、其は御金がかゝるから、只牛乳でも少々づゝあがつて、近所のたゞの湯屋でもよいから毎日二度位づゝ御出なさいとおつしやつてよ」

『さうかい、それじやさうしやうかね」

『お母さん湯治に行くには、どんなに澤山お金がかゝるかね」

『さうさね、今は物がお高くなつて居るから、中々かゝるだらうよ」

『何程かゝるかね」

『まあ、よいじやないか、どうせ湯治になぞはいかれんから、何程かゝつても」

『でも只聞いて見るのさ、何程かゝるか」

『近頃お向ふの質屋の御隱居さんが、箱根の湯にいらして、お湯屋ばかりのおかゝりが、毎日二圓位のおかゝりであつたとよ、尤もそれよりも幾等もお安いのもあるさうだけれど湯治場なんぞはお金のかけ次第のものさ」

『お母樣二十圓位で湯治は出來やうかね」

『なぜ、出來ればどうするのよ」

「おのそれ、家の琴の御弟子方が、皆様で妾にこしらいて下すつた御召と帶が、五十圓位のお金のものだと、お隣のおばさんがおつしやつてよ、だからね、あれをお向ふのお店にお預け申して、二十圓をいたゞいて、それでお母様に湯治をさせ申さうと思つて」

「お前はいやな娘だよ、そんなちびのくせに、そんな事を覺えて」

『だッて、お隣のおばさんがあなたのお召なら、向ふの御店に持つてゆけば、二十や三十のお金は何時でも出來るから、妾の家はお長屋中で一番の金持だとおつしやつたから、お向ふに願つてお母様に湯治をさせて上げたいと思つてさ」

「お前のお心はありがたいけれど、それはおよしよ、皆様がお前が可憐さうだと云つて、お孃様方が御自分方の御小費を五圓だ十圓だと御出しになッて切角お求め下すつた品物だから」

「お母様はそんな頑固ばかりいふからいやよ、そのお金を惡い事にでもお母様がお費ひなさるのなら、それは濟ないけれど、御病氣のために湯治にお費ひなさるのだもの、ちよッとも惡くないわ」

「わるく無くつてもいけないよ」

『だッてお母様の御病氣がそれでは早くなほらんもの」

「もう病氣はよいのだよ」

「お母様は妾に心配させたくないと思ひなすッて、何時でも病氣はよいとばッかりおッしやッて」

「お前が立派な奥様になッたら、湯治にやッてもらうから、今はそんな心配をせんでもよいよ」

母の病氣をいたはる房子の眞心、それを察する母親の心になつて見たなら、可愛やらかたじけないやら世が世で物事に不自由でなき身の上なら、今年十三のこの娘にまで、なんでこのやうな心配をさせやう、

世には心なき娘小供を持つて、手にもてあまして、泣く母親もあるに、妾はこの娘がこの不肖なる母に盡さんとて、稚き心を千々にくだきて、心配する愍然な心根を察して、どうして泣かずに居られやう

「房やなにをそのやうにお泣きだよ、」

「お母樣が涙をこぼしなすつて泣ていらッしやるから、妾も泣たわ、」

「おやさうかい、お母樣は何も悲しくないけれど、涙がひとりで溢れたのだから、お泣きでないよ、お前がお母樣に心切を言ふてくれるので、遂ひ思はず………

子を思ふ親の心はみな一ツ、世には歷々の兩親に蝶よ花よとはぐゝまるゝ娘子もあるに、生れて三月めに片靨の笑顏が可愛といはれし其月に父に永別れて、見ず知らずのこの地にてこの母親の手一ツに、襁褓の裡より憂き艱難を身にしめて、その日の事にもこと缺げて、今年十三まで育てしものゝ、世間の娘小供のやうに、たゞの一度も觀劇遊山の樂しみをさせし事もなければ、去年の暮までは、學校の免狀取りにもあの二子の洗濯袷に、あのいぢらしい唐縮緬の扱帶一筋、着物のみえにだゝをこねる年頃なるに、いやな顏すら見せずして、我娘ながらも孝行ものじやと、心に讃るあの娘の心切、長き病氣のその間も年に似合ぬ甲斐々々しき看病、もの事利發で學校の席順も上席で、年こそゆかね彈琴の手なみも今二三年もたちなば、この母さへ一目を置く程の見事な腕前、もしやあれが短命の徵にもやとあらぬ事まで心配せられ、夏の夜の短き夢を結ばずに、ありあけの鐘きく事も多かりき、

醫者の勸めにまかせて、七日あまりも駒込の伊香保の温泉に通ひしも、少しも功驗のなかりしかば、房子はなほさら氣をもみて、もしや其まゝお母樣の御足が不自由になつたなら妾はどうしやうとて、夜も日もなげき、立派な着物や帶などはいらぬから、あれを賣つても湯治に行つてくれとて、朝夕いく度となく

母に口說き、母が頑固で勸めをきかぬとて、遂ひにぞなき泣顏をして、食事さへろく〳〵にせぬ始末、母親も世間の義理は義理としても、この娘の心切を無にして、これまで心配させるもあまりの心なき仕業なれば一週間ぐらゐも湯治に行て見んと心を定め、それを房子に話せしかば、房子のうれしさ喜ばしさ、はや母の病が全快したやうに打喜び、今日にも明日にも行けとせき立るも、仕度があればとて四五日立って箱根に赴かんとて、其用意にとりかゝりぬ、

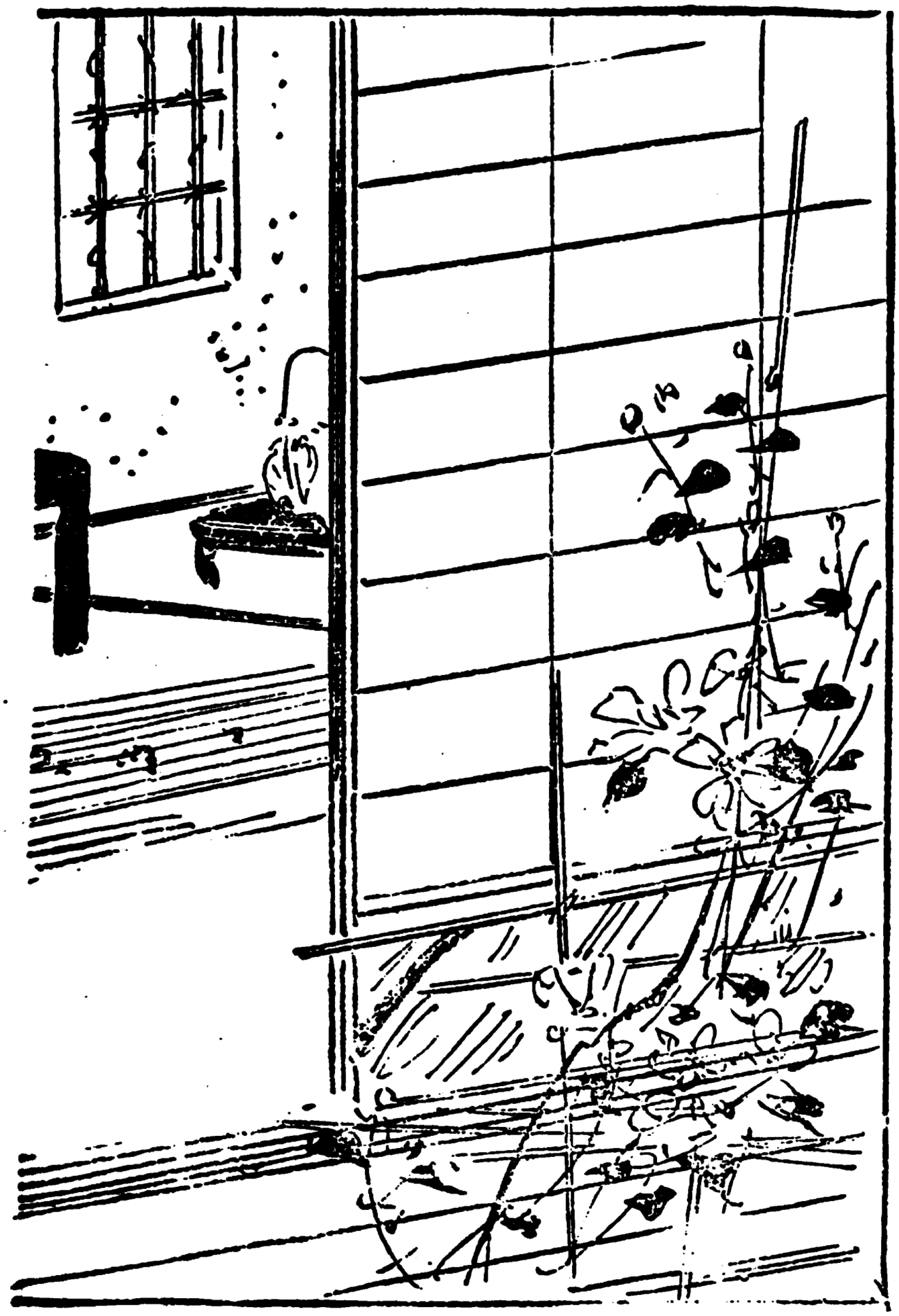
　琴のお師匠樣が、箱根の湯治に赴かるゝとて、弟子の中にも金滿家なる福井と云ふ豪家の令孃が發起して、餞別のしるしにとて集めて送つてくれし金は十圓内外、自分の用意の金に其を合はしてどうやら三十圓これ程あらば、親子二人にて湯治のまねが出來やうとて、七月の十五日に箱根へと赴きぬ、

　荷物とては、鼓の締緒でからげし茶色にくすんだ柳行李が一ッと、外に小な布呂敷包、母のお妙は蚊飛白の單衣に、黑繻子の丸帶、身に綾羅のかざりなくも、氣品氣高き立派な御隱居、房子は髮を稚子髷に結ばせて、母と一對なる質素のみなり、もしやこの娘に綾をまとはせ、錦を着するなら、人は天女のあま降れるかとも思ふ程なる絶世の美貌、身貧界に生れて、あたら光玉を襤褸に包みても、名玉自から光りあり、

　國府津にて汽車を下り、それより電車に乘りて、箱根の湯本に着し、停車場向ふの茶屋に休みて、車中の病勞を息め、茶を飮みながら、茶屋の主人と塔の澤までの道程の話などをして居りしが、お妙親子の身なりがいかにも質素で、この客の入り込む夏中に湯にくるやうな客の樣子ならねば、宿の主人も不審顏をして、根ほり葉ほり湯治に來りし次第などを尋ね、お妙は病氣の事や、この娘に勸められて湯治に來りし次第などを具さに告げしに、この家の主人は聊か義氣ある男にて、お妙の一身に深く同情を表し、今年は

物價騰貴のために湯場のかゝりも中々にて、御隠居様も御迷惑なるべければ私が一つ熟懇なる湯場の主人に、御隠居様の身の上をあかして、なるたけ安値に上るやうに頼んで上げませうと云ふ深き心切、これから一寸、塔の澤の私の親しい湯場に行つてくる程に、暫時こゝに休息しておいでなされとて主人は出で行きぬ、

間もなく其屋の主人が歸り來りて、塔の澤の藤屋と云ふ温泉宿は私の親しい家なるが、今行きてあなた方親子様の身の上話をしてお宿を頼みしに、藤屋の主人もおかみさんも、中々親切な方なれば心よく了知してくれ、兎も角も直に湯本の出入の車屋に云附けて御二人様を當方に御案内する様にと申されました



と喜びての傳言に、お妙親子は厚く禮を述べて塔の澤の藤屋へと車をいそがせぬ、

お妙親子は藤屋の主人の世話にて、奥の小座敷の一間が客の居間にも離れて、至極閑靜なれば、そこにてゆる〳〵湯治する樣にとて萬事に心をつけられ、こゝの座敷には電話がないからとて呼鈴まで用意してくれ、主人も内儀も毎日二三度づゝは見舞ふてくれ、こよなき珍客のやうにもてなされたり、お妙が琴の師匠なりと聞きて、藤屋の主人は手なぐさみにとて、琴さへ貸してくれしかば、風の涼しき夕晩れなどに娘の房に彈かせて、忍ぶ小聲の歌を合はせ、氣を養ひ心を慰むる事も多かりき



然るに藤屋の隣りなる温泉宿に、二三日來滯留する軍人めきたる紳士の夫婦ありて、男はまだ四十前の人品のよき紳士にて、その夫人は二十七八位のやせぎすなる婦人なるが、身裝調度華美を極めて、何れの誰にやと湯場に指さゝるゝ客の一人なりき、或る夕の事なりしが驟雨塔岑の翠巒をよぎりて、斷雨月を吐き、一陣の涼風苦熱を濯ふて、青燈かせに明滅する小夜なかに、紳士は枕にもたれ書見に餘念なく、夫人は柱にもたれて荒川の流れに映る月影をながめながら、今しも調べ出る隣家の琴の音に耳そばだてゝ居りしが、やがて琴線佳人の纖指に觸れて、流泉松聲、緩調急節、餘音溪泉と共に流れ、絃聲山雲とともに去來し、眞に獨鶴雲に唳き、風泉月に和するの雅操、これを聞き居りし夫人は、いかにしけん、急かに驚きし樣子にてあはたゞしく椽前の方へ走り出でしかば、夫の紳士は何事ならんと打驚き

『何んだ、己れまで怯りしたせ』

『あれあの琴の音が』

『琴の音が什麽したのじや』

『あの曲は、妾が實家の秘傳の一曲、綾小路の『夕顏の曲』あれを彈く人はもしや……』

『なんだ、少しもわからん事を』

『御不審は御尤も……』

と言ひながら、語る一條の身の上話を聞けば、わが十五の年に京都の實家なる綾小路が破產して、父母は一人の妹をつれて東京に移り、自分は一時親戚の世話になり居りしが、村木に緣づく前に、佐沼と云ふ奈良の舊家に養女となり、實父のみまかりし事は風の便りに聞きしも、十三年この方、實母の生死も、一人の妹はいかになりしやも、識る由なかりしが、今方隣りの奥座敷にて調べし一曲は、十四の春に母じや

人より始めて習ひし「夕顔の曲」とて、綾小路の一家より外に、東西の都にも所傳のなき秘曲なれば、もしやわれが母様の調べにやと、心うれしく、夜が更けたれど、これより直に隣家を訪ふて、琴の主人を尋ねんと談り出れば、夫の村木もそれは不思議じや、急度母様に相違あるまい、一時も早く行て見よとて、宿の女中を呼びて、隣家の藤屋へ案内させ、奥の御客の様子を尋ねぬ、

奥の小座敷に通りし婦人は、部屋に入りて、お妙の顔を一目見るより、わつと聲たて泣き亂れ、お妙の膝に身を投げ寄せ『阿母様』と呼ぶ一聲は、確かに覺えのある長女の聲と母のお妙も、あまりの事に打ち驚き『そちや菊か』と思はず一言いひたるも、うれしいやら悲しいやら、常にはもろき涙も出でず『よく御達者で』『ようおほきう成つてくれた』

『今此で遭ふべしとは夢にも思はなんだ』『これがお前の姉様じや』と母に言はれて房子の喜び、菊子のうれしさ、姉妹あひ抱きて涙にかきくれ、母のお妙も涙に咽びて、兎角の言葉も出でず、それより菊子の今の身の上を聞きて、母の喜びも一方ならず、兎も角も夫の村木を呼びて、面會なさんとて自分で隣家に行きて夫に事の仔細を告げ、この夜は村木方の座敷が廣ければとて、母のお妙と房子も共に同家に一泊し、その翌日は藤屋の方に廣き座敷が明きたればとて村木は母と妹も一處にし、自分の東京の宅も夫婦二人ばかりにて誠に寂しければ、母上も妹も今後私がお世話申しまするとて自分に引き受くる事となせり、

その翌日村木の注意にて、母上と妹のみなりしがさみしいからとて、宿の主人に小田原より呉服屋を招して、間に合はせの夏物二三枚を購めて、相應の仕度をなさせしが、母の病も追々快く、日々の夕涼に家族四人が打つれて、いとも睦じさうに、且つ歩み且つ話して居るさまなど、人もうらやむばかりの一家族なりき、

その後東京麴町區有樂町の村木少佐の宅は、急かに家族二人を增して、以然にかはりて家も賑かに、特に房子は一家鍾愛の中心となりて、一家の幸福はこの娘のために在り、少佐が同僚に誇る一ッの話は、この子の器量と人品なりき（終）

文壇奇遇物語

現時文壇の流行ッ兒夏目漱石氏に近頃こんな話があつた▲此の頃青山の原宿に引越して來た女二人の一家がある素性を聞くと二人は母と娘で娘は年頃もう三十を越して居る娘の夫なる人が日露戰爭に出征して旅順の激戰に戰死した爲に元の棲居を引拂つて遺族扶助料を當に今の處へ引越し奥座敷は早稻田へ行く學生に貸して侘しく暮して居るのだと云ふ▲然るに此母子二人が何かの昔話になると好く金之助、金之助と云ふのを平生漱石氏を識つてる例の早稻田の學生が聞いて文壇流行ッ兒の夏目漱石氏も確か名は金之助と云つてる筈だが或は此母子は何か漱石氏の親族ではあるまいかと悦んで居つたが堪へ切れず何かの節に其母なる人に向つて度々仰しやる金之助と云ふ人は姓は夏目と云つて號は漱石、之れ之れの日本唯一の英文學者で文壇の流行ッ兒ではありませんかと聞くと老婦人の答へには成程姓は夏目と云ひました又大學に入つたとまでは聞きましたが其後はどうなつたか皆目便りを聞きませぬ夫は何でもよき事としてあの亂暴の氣まぐれ者の金之助はそんな豪い人物になれる子ではありませんでした貴方の仰しやる漱石と云ふのは屹度何かの人違ひでせうとて何と云つても信じなかつた▲そこで學生は其の時丈は默つて了つたが其後も度々其金之助が漱石である事をれつく說いたので母子も其熱心に動かされ兎に角會つて見る氣になり母子二人連で漱石氏を千駄木に訪ふと出て來たのが果して其金之助であつたので兩方廿幾年振かの面會でもあり世にも稀れな奇遇であり且つ當時の金之助の出世と大名に驚いて二人は涙に咽れる外なかつたと云ふ▲然らば此の二人の婦人は何人かと云ふに漱石氏が幼少の頃家事の都合上或家へ養子となつた養母は即ち此老婦人で氏は其家を繼ぎ今の寡婦の婿となるべきであつたのが其後仔細あつて養父母が離れ離れになる事になり氏は養父に從つて今日までに育て上げられた其間養母と其の娘の消息は少しも知らずにあつたのが今偶然にも文名が媒となつて再會することゝなつた譯だから氏も大に喜んで金品を母子に與へて歸したのは遂此の頃の事、其後も度々母子を訪ふては其寂寥を慰めて居るとのことである、

懸賞小説　貳等

心の誠

神奈川　金子菊子

いかなる英雄も病には勝てぬ、されば藥も世の味の一つであらう、

「姉さん僕はね、何にも要ないです、唯だ姉さんに最後のお願があるんですが、聞いて下さるでせうか

瘦衰た軀を無理に起しながら、賴むやうに云ふのは弟の幸太郞

壁は落ち障子は破れ、疊と云ふのも名のみ、腸ははみ出て、蹈むと小氣味が惡い程、足が埋るので、何の事はない、ちやうど羊小屋のやうな四疊半、煤つた小洋燈は机の上に憐れ氣に輝いてゐる、

南向の壁の破目からは慄い程冴えた冬の月がさし込んで、さなくとも陰氣な是部屋を、いとゞ陰氣に彩つてゐる、無論ひゆうひゆうと身を切る樣な寒風は遠慮なく諸方の破目から吹き通すのである、

「幸さんは、又、改つて何んです、姉さんは何んでも聞いて上ますよ、ホヽヽ、

無理に造つたやうに笑つて恁う云つて起きかゝつた幸太郞をそつと抱へて安臥したのは、廿七八の大丸髷、悲しみと憂の雲は、深く其面にかゝつて居るが面長の頗る品のよい何處と點のつけ樣のない面貌服裝も立派で、如何にも紳士の奧樣風なので是れが此の家の病主公の姉妹としては餘りに不釣合の感がする、

幸太郞と云ふのは某專門學校の生徒で、今年廿二非常な天才なのと、所謂苦學生なので、全校での評判男である、尤も姉や其他の人から學資を供給してやると云つたそうだけれど、一切謝絶して受けない

のであつた彼は本郷の片町なるとある裏長屋の一と間を借り受けて、朝は牛乳配達、夜は車を引くと言ふ風でそれはそれは非常な苦學の結果、茲數ケ月で卒業と云ふ間際まで漕ぎよせたのであつたが、不幸にも不運の神の弄ぶ處となつた、彼は、此春から惡性の心臟病に罹つたのである、わけて此月からは餘病まで併發して頗る重體に陷つた、

『幸さん、いゝでせう、姉さんは惡い事を云ひませんから、今言つた樣になさい、ね、何時までも強情を言はないで大學病院に入つて、ね、姉さんには一人よりない、お前の事ですもの、姉さんは甚麼事をしても充分療治をして上げたいのですし、それにね旦那も久から言つていらつしやるのですからね、幸さんさい承知なさりや、金錢の費ることなんぞ、少とも關やしません、ねえ、幸さんもちつとは姉さんのことも聞いてもいゝでせう、ね、そうおしなさい

婦人は氣遣しそうに幸太郎を見つめた

『姉さんそんなことといりませんよ、もう僕はしつかり、斷念たです、僕はその目的も果たさないで仆れるのは如何にも殘念でたまりませんが、然し生命は凡て神樣の大權に屬してることですから、何んと云つても仕方ありません、こんなになつては病院に入つたて駄目です、それに姉さんは頑固と云ふけれどこの儘此の室で死ぬとも僕は如何しても姉さんの金では、

幸太郎の眼からは滾々と涙が湧き出るのであつた敢て拭ふともしない、二つ三つ苦しさうな嘆息を吐いた、

婦人はハンケチで靜かに幸太郎の眼を拭いた、無言で

『姉さん、僕の願を聞いて下さるのでせうね、

幸太郎は又念を押したのである、

『え、聞きますとも、姉さんで出來ることならきつと聞いて上ますけれども、ね、幸さん、今日はお前は大變疲れとる樣ですから、少し安眠んでからにしたがいゝでせう、

幸太郎は、枕元の水を飲うとして手を伸したが、力がないので出したまゝ疊の上に垂れた、

『これ上げませう、

やがて二口、三口、幸太郎は水を飲んで靜かに、胸を撫でた、如何にも苦しそうに、

『僕はちつとも疲れやしません、じや、言ひますからね、怒つちやいかんですよ、姉さん、僕のお願ひと云ふのは姉さんが大川さんと關係を斷つて、もとの姉さんになつて頂きたいことです

『え、

『僕は姉さんに、斯なことと言ひたくありませんが然し、僕の最後の願です、これ丈は聞いて下さい、僕はこの儘死んでも悲しくありませんが唯、このことばかりは如何にも殘念で堪りません、其でも後妻とか言ふならいゝが、妾なんて、僕は實に殘念です、大川樣夫婦、ことに奥樣からは、亡父樣亡母樣の時から一方ならん御恩を受け、姉さんなんか全く奥樣のお蔭で一通りの教育を受けたぢやありませんか、それが姉樣があんな事になつて終つてそれがため罪のない奥さんが二人も子供があるのに放逐され、實に氣の毒です、僕は其後、奥樣には、遭ひません、けれど御子息の時雄さんとは學校で屢々顔を會はすのですが實に其度毎に僕は氣の毒やら、耻しいやら悲しいやらで泣きます、

飲さしの水をぐつと呑んで幸太郎は苦しそうに語り續ける、

『僕は、姉さんが幾度も學資を貢いでやると言つたのも又、今度療治して下さると言つたのも皆な拒絕したのは、唯だ邪けて言つたのではない、一つは良心に對して潔くないのと、一つは、奥さんや時雄さんに對してすまんからであつたのです

姉さん、能く考へて下さい、代議士とか、紳士とか言ふ者の妾になつて、操を賣つて榮譽榮華をしたつて、そりや僅かあと廿年か卅年でせう、何になります、奥さんや子供を泣かせ、憎まれ、怨まれ、世間からは爪彈されて、そして最後は地獄です、姉さ

んは、大川の奥さんを可愛想だと思ひませんか、
　氣の毒だとは思ひませんか、姉さんは今の境遇を何んと思つてゐなさるか知らんが非常な罪惡です、姉さんは良心に苦しいでせう、大恩のある人の平和な家庭を亂し妻子を泣かせ、金の爲めに操を潰し、そりや姉さんにはいろんな情實もあつたでせう、が妾になつて、ほんとに恐ろしい罪です、姉さん、どうか、斷然、大川さんと今の關係を絶つて、奥樣を前の樣にしてわけて下さい、是れ、この通り僕は賴むから、どうかもとの姉さんになつて下さい、吁、苦しい
　幸太郎は瘦せ細つた手を合して、再び何か言はふとした時、忽ちアッと虚空をつかんで悶絶した、
「姉さん水ッ
　化石のやう、首をうなだれたまゝぴくともせずに深く深く沈默のうちにあつた婦人は此體を見ると、アッと叫んで確と幸太郎を抱き占め、急しげに水をふくました、そして、
「幸さん、幸さん」
二聲三聲身を切るやうな聲で呼んだ
　幸太郎は、靜かに夢から醒めたやうに眼を見開いた、そしてしかと婦人の手を握つた、
「え、姉さん、賴むから、僕の言つたことを聞いて下さい、半は夢中でいひつゝ幸太郎は、眼を瞑つた呼吸は、刻一刻、早く且つ微かになり行くのである
「幸さん、姉さんは、よう分りました、全く姉さんが惡かつたのですから赦して下さい、幸さん、しつかりなさい、姉さんです、わかりますか、
　婦人は耳に口よせて、かう言つた時、幸太郎はこれが聞えたのか、さも嬉しげにつこり笑んで其儘永遠の眠りに移つた、
　按摩の流してゆく笛の音は、憐れさうに下町の方へ消えて行くのである
　其の後、都下の某新聞に「大川代議士の愛妾」と云ふ題で、大川代議士の愛妾、芳子と云ふ美人に

何に感じたのか我と我が黒髪を惜げもなく切捨てゝ暇を取り、大川と關係を斷つた事、自分故で大川に放逐され、親族に厄介となつてゐた本妻には深く謝罪し自ら斡旋してもとの通り納め、そして彼は漂然去つた事行先きは不明であるが、多分、慈善的勞働に身を投ずるのであらうとの事をくわしく書いて、尚ほ、彼は何の動機でかく心機一轉したのかは不明であるが、まさか狂したのでもなからうと書添へてあつた

●靴の耗方と人の性質　瑞西の一ドクトルは、多年研究の結果靴の損じ方にて、人の性質を判斷する方法を發明せる由なるが、其說に依れば、靴の爪先と踵の部分が規則正しく、又た等分に耗るものは其男子たる場合に於ては、極めて着實なる事務家にして、正直の人なるべく、其婦人たる場合に於ては、良妻賢母の人なるべく、靴の外側を穿き耗らす人は、頗る冒險進取の氣象に富み、執拗の性を帶び、又內側を穿き耗らす人は、男子の場合に於ては優柔不斷の人なるべく、婦人の場合に於ては內氣の性質と判斷するを得べしといふ

東洋婦人會總會

去る十三日麴町區有樂町三井倶樂部に於て總會を開けり、出席者は會長鍋島侯爵夫人を始め、小笠原伯夫妻、比志島少將、同夫人、黑田侯爵夫人等百數十名、幷に清國公使館員馬群亮、提學使黄紹箕氏等數十名にして、午後二時過開會、會長鍋島侯爵夫人、音吐瀏喨開會の辭を述べ、次に當日は豫て楊公使の演說ある筈なりしが、夫人病氣の爲め出席なく、提學使黄紹箕氏起つて一場の希望を述べて曰く、清國古來女德を重んじ、賢婦烈女の事蹟尠なからざりしも中古以來漸く教育の途衰へ、今日の我邦女子は全く無教育なりと云はざるを得ざるの狀態に在り、而して將來普通教育の發達を圖らんとするには、先づ其根本たる女子教育の完成を期せざるべからず今や國內に於ける女子教育の門戸を開くに努むると同時に、今後益々多くの女子留學生を日本に派遣するに至るべし、願くは本會にて我女子教育の進步發達の上に、助力を與へられんことを云々、次で同會附屬清國女教員養成所生徒總代岸松尾子の謝辭、同じく阪埼某子の清語謝辭あり、其れより大隈伯の演說あるべき豫定なりしが、俄に差支へたりて言文一致の祝文を寄せたるを、肝付中將朗讀し、次で同會に對する簡短なる希望演說あり、終て餘興に移り業平餅、仁王石神の能狂言は何れも滑稽頤を解くばかりなりければ、彼方此方に笑聲起り、言語に通ぜざる清國人等、皆其所作の滑稽なるを興あり氣に見物し居たるたり



女子と人體畫

東京美術學校教授　黒田清輝

女子が人體畫を學ぶ、男子と同じやうに學ぶと云ふことは、習慣上不思議に思ふ人もあらう、併し習慣といふことが、美術の上にそれほど氣にせねばならぬ事であらうか、美術と普通の風俗とは、少し離れた所がなければならぬ、十年以前、近くて五年前に明白になつた話である、

人體が繪畫を研究するに、どれほどの力を有して居るかと云ふに、人間の身體ほど變化に富んで居るものはない、その形から見ても、其色の上から見ても、その變化は高尚な點まで行つて居る、それから骨と肉との關係、柔らかな所、硬い所、堅いと云ふても骨と筋とは度合が違ひ、柔らかと云ふても、肉と脂肪とは違ひ、又髮の色のやうな、フーワリとして居る柔らか味のあるのもある、實にこれほど變化の妙を有して居るものはない、而して其變化の度の甚しいに拘らず、一方からいへば極めて規則立つて、顔なり手足なり、一定の規則によつて數へる事も習ふことも出來る、即ち規則に外れずに變化して居る、その上便利なことには、その身體は活動もすれば靜止もする、起きて居る姿もあれば、眠て居る形もある、便利の上からもこれ以上のものはない、

木にしても、花にしても、變化もあり、一定の方規によつて畫くことも出來るが、枝のつけ方が少し高くても低くても葉の出でやうが大きからうが、斯うでなければならぬときめる譯には行かん、殊に花などは、一定の道理によつて咲いたものであるが、一つ花がいつまでも持たねば、一つ花の色合も、物によつて非常にかはる、故に大勢の人で一つの花に

向つて書くといふことは出來ぬ、その點に於ても人體は都合がよく、幾日かゝつても鈍い腕を磨く材料となるに適當して居る、

山のやうなものは、朝晩の色合、晴雨の變化、瞬間に代るものであるから、到底初めから研究の材料にする事は出來ぬ、どうしても山の如きは、一通りの美術腦が出來上つて、其變化の速記が出來ねばならぬ、

して見れば、いづれの物と比較しても、人體が研究材料の第一なるは云ふ迄もないことで、この人體が完全に描かれるやうになれば、すべての物を自由に描く事が出來るのである、それを學ぶに男女の區別があらう理由はなく、眞實繪畫を學ぶ考の人は、男女ともこの材料を度外視してはならぬ、

私は歸朝後十年、殊に此人體畫を公衆の展覽に供しそれが爲に非難を受け、當事者からも叱られた事である、そこで私の精神は、この人體畫は私が描いたので、よく出來て居るから見て貰ひたいと云ふのではない、物の形を完全に寫すやうにするには、研究を此材料にとらねばならぬことを知らせる爲で、其信念を廣告した次第である、

成程理屈をつければ、高尙な道理が反對者につかぬでもないが、私の方では又それ以上の理屈がある故に男子に限らず、女子に限らず、少くも繪畫を學ぶとならば、この人體畫を充分に研究して貰ひたいのである、

さて此人體畫は、初めて繪筆をとる人に向つて授けるかといへば、それはむづかしい、初めは石膏細工の如き一色のもので、一色が卒業すれば、すぐに人體に取かゝつてよいので、云はゞ人體は繪畫の第一着手としてよいのである、

◎婦人教育會總集會　大日本婦人教育會にては、去十七日午後一時より高輪南町毛利公爵邸に於て總集會を開き、會計會務の報告、并に澤柳文部次官の演説あり、後演劇筑前琵琶等の餘興ありたるが、當日は總裁閑院宮妃殿下にも、御臨席あらせられ、令旨を賜りたる由、

妙齡なる閨秀畫家

現代の閨秀畫家中に於て、近時其名を知られし、榊原蕉園女史といふあり、今その經歷を聞くに、

◎女史の履歴　蕉園は雅號にして、本名は榊原百合子といひ、北豊島郡日暮里村元金杉二百六十六番地に、父母と共に住み、今正に十九歳なり、女史は去る三十五年中、麹町富士見小學校を卒業し、直ちに矢島楫子女史の女子學院に入學し、專ら普通學を修め居りしも、性來の繪心はこの少女をして、夫れに安んぜしめず、傍ら水野年方畫伯の門に入り、只管浮世繪を學びぬ

◎一家の繪畫狂　女史が繪畫を專攻するに至りし動機は、全く榊原家一家族が繪畫狂なるに起因するものゝ如く、父は浩逸氏(五十三)と云ひ、現に岩倉鐵道學校に幹事を爲し、母はあや子(四十三)とて、其中に女史を長女に弟妹五人あるが、一家擧て繪畫を好み、浩逸氏の如き、中々の眼識ありと云ふ、其血を享けたる女史は、小學生當時既に「姉樣繪」を描くに妙を得、殆んど天稟の才とも見る可きものあり、卒業後ます〳〵繪畫の趣味を深くしたれば、其の長所に向つて發展せしめんと、遂に年方畫伯の門に入るに至りしなり、

◎始めて世に出づ　爾後女子學院は退學し、專ら繪畫を研究し居りしが、一昨年の春始めて美術院派の展覽會、秋季の美術協會等に出品し、二等賞牌を得、また昨年の春は研精會に『わか鳩』と題する畫を出品して、第一席を以て賞牌を得、而かも當時の審査員たる雅邦、玉章、玉堂、廣業、華邨、年方の諸氏をして、再審査をなし、深き賛辭を得るに至りしが、抑もその發芽にしてこれ實に十八歳なりき、

◎女史の平生　專ら寫生のみに心を用ひ、隙さへあれば一室に籠りて筆硯を親しみ、又は古今の美術書を研究し、傍ら女子として、必要なる裁縫も修めつゝ、將來天晴閨秀畫家の月桂冠を被らんと、專心攻究しゐれど、決して今時のハイカラ臭き事はなく、廂髮などに曾て結ひしことなく、何時も高島田にて、一見商家の娘さん式なりと、

◎女史の將來　女史の將來については、大いに聞く可きものあり、師匠年方氏の紹介にて、更らに鈴木華邨畫伯につき動物と草木の研究に心を委れ居れりと、然れども女史は繪畫を以て社會に立ち、之にて獨立せんとする心はなしと云ふ、

◎父母の意見　婦人にして、多少藝術を修むると忽ち獨立するなどゝ云ふは、それは大の間違なり、婦人と生れたからは何處までも婦人たるの義務を社會に盡す可く、若し斯る婦人にして、獨身を云々などは以つての外なり、然れど繪が出來るからとて他の事を放棄するに至るは、猶更なりと、語りしよし、

西洋禮式

戰後外人の來訪俄かに其數を加へ、今後彼我の交通益々頻繁密接に趣かんとする今日に當り、西洋禮式の一斑を心得置くは、我新大帝國々民たるもの〻義務と云ふべく、左に揭ぐるは、知る人に害なく、知らざるものに聊か稗益あるべしとて、正確なる西洋禮法を節約譯出したるものなり中には外人に對する場合のみならず邦人相互の間に於ても、隨分其の實行を望みたる個條も尠からず、

公衆禮法

一、騎馬、步行共常に右に立つ事を忘る〻勿れ、

一、決して人を推除く可からず、誤つて之を爲せば直ちに之を謝せ、

一、人を凝視し又は其特異なる點等を嘲笑す可からず、

一、婦人をして、自ら其荷物を運ぶが

家庭に於ける音樂

女子音樂學校長　山田源一郎

從來我國の家庭に用ゐられて居た音樂は、専ら琴、三味線に限られて居たが、將來に於ても之が家庭に用ゐられる事は當然である、併しこればかりでは今日の社會の要求に對して少しく物足らぬ感じがする、即ち今日の社會は何か一つ外に適當な音樂を要求して居るのである、然らば其要求を充たす音樂は何う云ふものであるかと云ふに、先づ西洋音樂であらう、併し西洋のものを其儘我が家庭に用ゐる事は疑問であつて、今日の處之ならば適當であると推薦する事の出來るものは少ない、だから勢ひ新しい音樂を造らねばならぬ、けれども之は一朝一夕で造り出すことは出來ないから、今日の場合では琴、三味線及び西洋音樂の我が家庭に向くものを撰擇して用ゐる外に仕方がないのである、

家庭の音樂を盛にするには女子が大に之を研究するの必要がある、女子即ち主婦が家庭の中心となつて居るから、此の主婦に音樂的趣味は勿論、音樂的の教育が無ければ、家庭は無味乾燥となるであらう、所が今日一般の有樣を見るに一家の主婦であつて音樂の素養ある者は誠に少ない、中には琴、三味線をやる者はあるけれども、これも不充分である事

如きことあらしむべからず、
一、杖又は蝙蝠傘の持ち方に注意し決して他をして危險の思ひあらしむべからず、
一、婦人の迷惑するが如き時、又場所に於て決して喫煙すべからず
一、步行道又は車內（滊車、電車又は乘合馬車等）に於て、痰唾等を吐くべからず、
一、母又は妻女、姉妹又は貴人又は不具の婦人にあらざれは、日中決して婦人に腕を與ふ（腕を假して之を援く）可からず、
一、先方の微笑、又は叩首して汝を認識するにあらざれば、決して此方より貴女に向つて叩頭す可からず、
一、貴女を祝福するに決して擧手の禮を用ふ可からず、必ず、脫帽すべし、
一、手套の儘にて握手したる節決して詫抔云ふ可からず、
一、婦人の爲には、始終必要の用向を便ずるを忘るべからず、

は免れない、斯樣であるから、ピアノやヴアイオリンなどの素養ある者は殆んど無い、併し今日の老主婦に音樂を學べと云ふのは無理な注文であるから、其娘小供には是非音樂的素養を與へる事をしなくてはならぬこれ家庭の義務である、音樂のない家庭は眞にあはれなる者で決して幸福なる家庭ではない、今日では小學校でも高等女學校でも音樂を教授して居るから、此後社會へ出る女子の音樂的知識は進んで來て、從つて家庭の音樂も益々盛になつて來るであらうと思ふ、併し現在では高等女學校で敎授する音樂の時間は眞に少なく、其上敎員の學力が不充分であるから、高等女學校の音樂敎授丈けでは到底充分に其敎育を施すことが出來ぬ、併し乍ら今の處では高等女學校の音樂の時間を增加するといふ事は餘程困難の事であるから、どうしても學校の外で之を學習する方法を求めねばならぬ、それには家庭に信用ある音樂敎師を招聘するとか、音樂學校へ通學させるとか、其手段は種々あらう、斯樣にして家庭に音樂が盛になれば、家庭は勿論社會一般に及ぼす處の影響は著しくなつて來て、一般國民の音樂趣味が發達し從つて國民の品性が高くなつて來る
戰後の日本は總ての方面に大發展をするであらうが、取り分け音樂を普及奬勵しなくてはならぬ、今の處では他の學問藝術は可なり進步して居るが、最も後れて居るのは音樂である樣に思はれる、だから此方面に最

一、斯くの如く便じたる用務の隙いとして、其懇親を得んと強ゆるが如き心持ある可からず、
一、人を紹介するに急速なる勿れ、先づ其双方共之を好む事を見極めて後、始めて之を爲せ、
一、車内又は劇場等に於て、適當の禮讓をも用ゐず暴進座席を占領することなかれ、
一、車内に於て至當の座席以上を占領すべからず（之に平生能く見る事なり）
一、劇場又は音樂會等にては、其演奏中決して談話すべからず、
一、公演奏會等に於ては、其幕合又は終局にあらざれば、決して其席を去るべからず、
一、特に保護を要する場合の外は、決して同時に二人の婦人を援くべからず

接客室禮法

一、外套又は掛靴（濕氣を防ぐ爲め普通の靴の上に穿つ護謨靴）の儘にて、

も力を入れなければならぬ、政府でも音樂學校を設けて之が普及を計つて居るが、今日で一の音樂學校では、到底社會の要求を充たす事は出來ない、年々入學を志望する者が增して來るのに、學校は十年前と殆んど同じ有樣である、だから若し出來得べくんば、大阪とか仙臺とかいふ要所々々の地方にも音樂學校を起して、一般子女が音樂を研究するの便宜を與へる樣にしたいものである、又東京でも市の事業として音樂學校を經營するの必要があらうと思ふ、而して斯樣の學校によつて一般市民の音樂趣味を發達せしめ、併せて市の子女が音樂學習の便利を得る樣にしたい、音樂學校の經營は比較的設備等に經費を要するので、一私人の經營は少し六かしいから、どうしても公共的の事業としなければならぬ、だから市の經營として極適度のものであらう、又近來音樂會の催が餘程盛になつて來たのは、音樂の爲に甚だ結構な事である、併し乍ら其多くは、慈善音樂會といふ種類のものであつて、音樂が單に慈善の爲のものであると思ふのは心得違と謂はねばならぬ、慈善音樂會はもとより惡いことでは無いけれども、音樂會は是非音樂の爲の音樂でなければ、眞の音樂の隆盛を來すことは出來ない、慈善會の手段として利用される計りでは甚だ心細い次第である、併し近頃の音樂會の盛ないは音樂趣味を養ふに極く善いのである、且つ東京市が日比谷公園に音樂堂を設けて以來

接客室に入るべからず、又煙管煙草入抔を携へ入るは言外なり、
一、室内を視廻はす事勿れ、
一、家具の價を問ふ可からず、
一、婦人に向ひて握手を要むべからず必ず先方の申出を待て、
一、特に請はれざる限り、決して室内装飾の美術品に其手を觸る可からず、
一、席に就くに急なる勿れ、
一、貴女の入室に際しては、必らず席を起つを忘る可からず、
一、餘りに隔り過ぎ、又は場外れの所に座す可からず、態度は頗る快適たれ
一、自己の居室以外にては、無遠慮に身體を伸すべからず、
一、椅子内にて身體を動かし、又は椅子の上に身體を浮かす等の事ある可からず、
一、貴女を紳士に紹介す可からず、後者を前者に紹介す可し、
一、女主人の命にあらざれば、決して謠ひ又は戲る可からず、

此所に音樂を演奏する時には、市民は競つて之を聽きに行くと云ふ有様であるから、一般市民の幸福は勿論、音樂の爲にも賀すべきことで、市の事業として又適當である、尚此上は他の場所にも音樂堂を設けられんことを望むのであるが、差當り上野及び九段の公園に之を設けられんことを望むのである、尤も日比谷の様な立派なものでなくとも、モツト簡易な者でもよいから一般市民が老若貴賤を問はず、平等に音樂趣味を味ふ事が出來る様にするのは最も大切の事である、

そこで音樂と云つても範圍が廣いものであつて、東京音樂學校で教授して居るのは專門的であつて、餘程程度が高いのである、勿論音樂專門の方から云へば何處迄も程度が高くなければならぬのである、それ故音樂專門の學校は其程度を高くしなければならぬ、けれ共又一方から云へば如何に專門家でも社會を顧みなければならぬ、若し全く社會を離れたならば折角の專門も甲斐のない事となる、だから識者は日本現在の狀況如何を觀察しなければならぬ、官立音樂學校の今日の有様は專門的方面から見たならば遺憾は無いが、社會はまだ其所まで進んで居ないので、音樂趣味はまだ餘程低いのである、殊に家庭の音樂を進める側から云へば、極くポピユラーのものを廣めなければならぬ、それで音樂學校は專門家を養成するのであるから、高い程度でなければならぬが、一方には

一、人を呼び掛くるに、手を以て其身體に觸る可からず、
一、高聲又は喧噪に談話する事勿れ、
一、室を隔てし人と交話する事ある可からず、
一、會衆中にて私語する事勿れ、
一、自ら知る名士の事を、之を知らざる人々に向て誇言する事勿れ、
一、他人に對する諧謔は慣例の度を過ぎて之を爲す可からず、成る可くは全く之を爲さゞれ、
一、不確實なる事項の物語を爲す事勿れ、
一、他人の談話を阻止し、又は之に反對し、或は爭論を挑む等の態度あるべからず、
一、縱し請はれたりとも、決して冗長なる物語を爲す事勿れ、
一、他人の會話に無頓着の態を示す勿れ、
一、名刺を扱ふに手指を濕はす可からず、
一、事の勝敗如何に拘はらず、決して

社會と結びついて行く必要があるから、此邊は餘程注意を要する所である、

世界に於て音樂の最も進んで居る國は獨逸であることは、世界の認むる所である、東京音樂學校では其獨逸の進んだ音樂をやつて居るので、毎年春秋二季に開く音樂會には隨分集り來る者は多いが、折角結構な音樂を聽聞しても其要領を得る者は誠に少ない樣であつて、たゞ上手に演奏すると云ふ事しか分らぬ、隨つて其樂曲の來歴とか作者の性格などいふ事は更に分らぬ、だから折角の音樂も所謂樂屋落となつて多くの聽衆には不得要領に終るのである、獨逸の音樂が日本へ來て直ぐに當て嵌るかどうかといふことは一の問題であらうと思ふ、獨逸語の唱歌は獨逸語で唱へばこそ初めて獨逸の國風が現れ獨逸國民の性情もよく發現されるが、若しそれに日本語を嵌めるとすると、餘程可笑しなものにはなるまいか、それが爲原作の趣を損ふ樣にはなるまいか、隨分從來「辨慶がな―ぎなた」流の無理コジツケの者がないでもない是等は餘程注意すべき點であらうと思ふ、同校近來の唱歌が大分歐羅巴化して來たのは主として外國教師の感化によるのでもあらうが日本語をも外國語風に唱ふのは余程滑稽であるのみならず我國語の粹を損ふ恐れがあると某先輩は心配されて居る、私共の見る所では北歐の音樂よりは却つて南歐の音樂が

喧囂を極むべからず、

一、會衆中にては讀書は勿論新聞紙の披見だも爲す可からず、

一、退屈然として懷中時計を眺む可からず、

一、一旦退出せんと稱して更らに又止まる事勿れ、立際に長き立話を爲す可からず、

一、如何なる場所にても餘りに長居す可からず、

食堂作法

一、會食者を待たしむる事勿れ、時に及て必ず參席せよ、

一、椅子に凭れ又は肱を卓上に置く可からず、

一、各貴女の着席を了る迄は、決して座席に就く可からず、

一、横樣に坐す可らず卓子に正面せよ、

一、「ナプキン」を胸掛とす可からず必ず膝の上に置け、

一、一口毎に頰を膨むべからず、喃然

日本に近い樣である、例へは伊太利、佛蘭西等のもの丶方が比較的日本國民の趣味に結び着き易い樣に思はれる、併しこれは餘程考究しなければならぬ問題である、一朝一夕には速斷する事が出來ぬ、

近頃一般の音樂研究者の意向を察するに、唯一時の流行熱に犯されて居る傾が無いでも無い、斯樣の傾向があるのは餘り好ましい現象では無い、是非眞面目に研究するのでなければ眞の音樂趣味を味ふ事が出來ぬ所が近頃は音樂を始めてから僅々一ケ月か二ケ月位で止める者が澤山ある、これ等は全く一時の流行熱に犯されたのであつて、音樂に對して誠實と確信とが無い者である、斯樣な者は折角の音樂研究を思い立つたのは何の役にも立たず、單に貴重な時間を空費したに過ぎないので寧ろ最初から爲さぬに若かないのである、それから又近頃の音樂學生にはヴアイオリンの學習を望む者が多い、此樂器は音色が優美で、携帶に便利で其上價格も低廉であるから、一般に之を望むのは無理の無い事である、併しヴアイオリンは音樂の中でも學ぶに最も六ケしいもので、少くとも音樂の普通の智識を得た者でなければ學ぶ事の出來ない者としてあるのである、だから音樂の知識の皆無の者が突然之を學ばうとするのは無謀の沙汰と云はねばならぬ、それで音樂を學ぶに最も容易なる道筋は、先づ唱歌を學ぶのである、唱歌なれば單に聲帶を働かせる丈けで、最も簡

として直坐せよ、

一、「パン」は洋刀にて截る可からず手にて之を裂け、

一、洋刀を以て食品を口に運ぶ可からず、

一、肉叉を用ふるに決して投把を用ゆる如くす可からず、食品を投げ込むべからず、

一、匙は其尖端よりして口中に差入るべからず、必ず其側面を用ゐよ、

一、口内にて騒々しき音せしむ可からす、

一、口内に物を含み、又は半ばにても頰張りながら談話する事勿れ、

一、食品を嚥下せざる前會話を始むべからず、

一、酒盃の酒を一口に飲干す可からず

一、酒盃を額頭以上に上ぐ可からず、必ず先づ之を下位に持行き、然る後漸上せよ、

一、飲食中張肱す可からず、

一、決して口内より骨片又は其他の物

便である、之に次で樂器を用ゐるには第一にピアノである、ピアノは歐米を通じて普通に音樂を研究する者が第一に着手する所のもので、殆んど歐州の全家庭を支配するものと見ても差支ない、日本でも出來る事ならば一般の家庭に供へつける樣にしたいけれども、困ることにはピアノは高價であつて、和製でも三百圓以上、舶來になれば六百圓以上である歐米の樣な生活の度の高い所では、格別の事もないであらうが、日本の樣な生活の度の低い處では、中流以下の家庭に斯樣の高價のものを供へつける事は少し六ケ敷いのである、其上日本現在の家庭の構造はピアノの樣な重い樂器を置くに堪へないのである、だから之を備へるとすれば多少家屋の構造も改めねばならぬので隨分困難である、併し日本でも近來ピアノの製造が追々盛になつて來て、近來は其製造人の伎倆は餘程進歩して來て、原料は歐米から輸入するから、善良な樂器を安價に購買する事の出來る樣になるのは勿論家屋とても年々に改善されるから、現在では之を一般家庭に備へる事は六ケ敷い樣に思はれるが、將來は益々其の便宜が多くなつて來るであらうと思ふ、

近頃は學校でもピアノを用ゐる所が多くなつて來たのは誠に喜ばしい現象である、從前はオルガンばかりを用ゐて居たが、これは價格が低廉である所から用ゐられたのである、學校用としては音色其他總ての點に

件を皿上又は床上等に吐出すべからず

一、固形物を取去り又は之を口内に運ぶには、決して肉叉以外の器を用ゆべからず、

一、「ナプキン」にて顔を拭ふ可からず只唇頭及び口髭のみを拭へ、

一、食品は總て婦人を先にすべき事を忘るゝ事勿れ、

一、左右の婦人に注意を怠る勿れ、

一、小楊枝を用ゆるには、必ず手もて之を蔽ひ、愼みて使用せざる可からず

一、再度の注文を命ずる場合には小刀及び肉叉を皿上に差置くべからず、

一、皿を運び去らんとする前、之を他の皿上に重ぬべからず、

一、頭髮、服裝又は洗手の中ばにして食卓に着く可からず、

一、過食す可からず又人に先じて食卓を離るゝ事勿れ、

訪問の禮法

訪問の禮法に於ては左の件々を以て秩

於てピアノの方が優つて居る、聲音を練習するにはオルガンよりもピアノの方が有効である、音樂者一般の輿論であるから、學校でも盛に之を用ゐる樣にしたいのである、たゞ此に不便なのはピアノは調子が狂ひ易いので、殊に日本の樣な氣候に變化の多い土地では、之を保存するのは稍々困難である、東京ならば調律をするのは容易であるが、邊鄙な村落では調律師を招くにも餘程困難である、併し若し之が一般に盛んに用ゐられる樣になつたらば、信用ある調律師が間斷なく地方を巡回する事も出來るから多く差支は無いであらう、

卓上茶道に就て

田畑夏子

夫れ文明の風潮は、百般の事物をして、徒らに舊式に泥まず、日夜改善の氣運に向はしめつゝ有るにあらずや、殊に今日の文明は、維新以來長足の進歩をなしたるものにして、今や歐西の風は、內地人の心魂に接觸して、彼我の長短は、相互に對照し、以て各事業の發達を企圖しつゝあり、此の時に當り獨我が茶道界に於ては、未だ西歐の長を取りて、本邦古式の短を補はんとするものあるを聞かず、却つて茶人の本性として

序正しきものとす、
一、最初に訪問し來りたるものは、最初に退出す可き事、
一、初めて人より訪問を受けたる時は必ず一週間内に自身初訪を返すべき事
一、初めて案内を蒙りたる時は、成る可く速に自身訪問す可き事、
一、一婦人が紳士を招待せんと欲する時は其婦人の伯父又は陪從者(女)たる人必ず之を訪問すべき事、
一、何種の饗宴にても之に與りたる者は、其後一週間内に必ず訪問す可き事
一、久しく不在なりし知人の歸宅に際しては訪問を怠る可からざる事、
一、社會の上地位に在る人に對しては自ら初訪を爲すべき事(尤も先方の所望ある場合に於て)
一、婚約の通知を得、又は結婚の事行せられたる場合には、必ず一度其家族を訪問す可き事、
一、近隣に新移轉者移轉し來る時には、新住者は直ちに初訪爲すべき事、

徒らに歐風を斥け、只管古來の方式をのみ墨守して、各自に家元を誇稱し、宗匠を氣取りて、未だ社交、衞生、美德の諸點より觀察を下し、以て茶道の改善を圖らんとするものあるを聞かず、それ斯の如くにして、果して茶道は進歩すべきものなりや否や、將た斯かる宗匠を目して、茶道に忠實なる人と云ふを得べきか如何、されぱとて、妾は素より淺學無才の身なれば、敢て世人の好評を得べき卓見を有するものならざれども聊か數年來の經驗と苦心とに基きて茶道將來の爲に、深く鑑みる所あるに依り、遂に自ら奮つて、從來の經驗を公にし、之を實地に活用して廣く世の貴婦人諸孃に請ふ所あらんとす、而して茲に所謂卓上茶道とはその名の如く、先づ室内を清洋風に裝飾して、左右兩翼の椅子に列せる諸賓に對する點茶方式にして、座式の如く窮窟にして、且つ陰鬱なるものに非ず、頗る快活にして、文明的なる者なり、猶卓上茶道の特長は
第一 胸廓を壓縮するの憂なく、 第二 姿勢を矯正するを得て、
第三 社交的の智識を增進す、
以上の如きは、その重なるものなり、斯の如きは、只卑見の概略を陳述したるに過ぎざれども、是等の改善は我が茶道界に於ける目下の最大急務なりと信ず、不才の妾、茲に思ひを及ぼせりと雖も、今なほ研究中なれば、世の諸賢に向ひ、伏して高敎を垂れ給はんとを切望するもの也

野口小蘋女史

折柴園主人

閨秀畫家といへば、第一に指を屈するのは、野口小蘋女史である、女子は阿波國麻植郡喜來村の人松村春岱氏の女で、春岱氏が大坂に醫術開業中、弘化四年に呱々の聲を擧げたのである、旃檀は嫩葉より芳ばし、女史は幼より畫を好み、四歳の時既に筆を執つて、物の形を描き、周圍の人をして、今日あるを豫想せしめたのである、

永坂石埭氏が、醫を業として而も能書を以て鳴る如く、春岱氏は風流韻事に富み、醫術より繪畫に堪能で、後には一枝の筆を以て世に立たんとし、諸國遊歷を思立ち、加越濃の諸州に杖を曳き、名古屋の客舍で二竪に犯され、其名を多く知られずして不歸の人となつた、女史年漸く十三、母と共に隨行したのであつたが、父君の病床に侍して、藥餌にも事を缺ぐに至つたものであるから、父君に代つて筆を揮ひ、辛うじて其日を送り、父君の野邊の送りも、女史の細腕によつて營まれたのである、

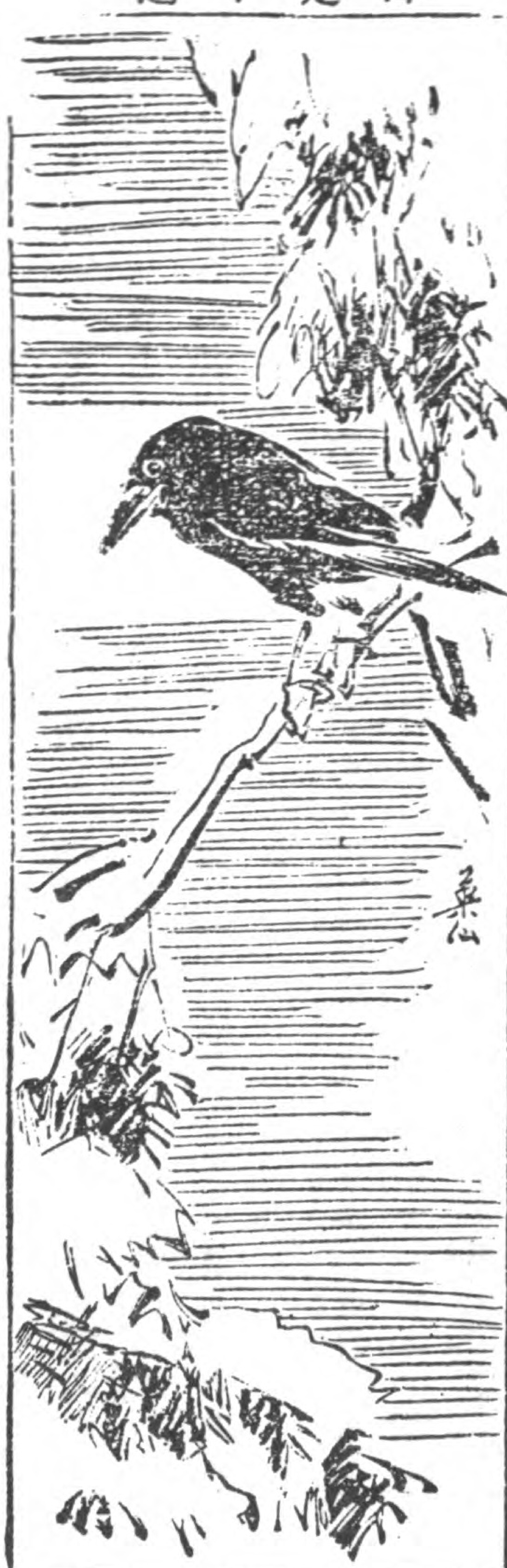
糸切れた紙鳶の如き境遇に立つた女史は、繪畫を以て獨立し、母君をして薪炭の患なからしめたのである、然るに女史は容貌清秀で、父君が鍾愛の餘りに衣服の美麗を極めしたると、今母子女性の生活を侮り、あらぬ惡聲を放つものさへあつた、女史は之を聞いて、形を飾り容を修むるは、女子の身の嗜みと思ふが故である、われ苟も一藝を修めて世に立たんとするもの、裝飾姿色によつて人の誹譏を受くるは迷惑此上なしと、忽ち羅綾を廢し、釵を捨て、髮を束ねて、少しも脂粉を施さず、一種獨異の容姿をなし、齡二十三に至つて初めて女裝に復したとの事である、此の間世路の難艱如何ばかりであつたか、實に察するに餘りある次第である、

文久年間京都に出で、日野根對山に就て南宗の畫を學び、大に其技を研いて、明治四年上京し、詩を岡本黄石翁に學び、大に繪畫の氣韻を高めた、同

年近江の人野口正章氏に嫁し、氏と共に五年甲府に在り、同十五年再び京都に出で、内國繪畫共進會に臨畫二幅を出品し、『區中の殊異なるもの』との褒狀を得、同十七年第二内國繪畫共進會に濃淡二幅を出品し、是亦『區中の優異なるもの』との褒狀をうけ、これより女史の名聲は忽ち揚るに至つた明治十八年東興宮城に遊び、大に畫心を養ひ、同十九年東洋繪畫共進會に　皇后陛下行啓の際、御前揮毫の榮を擔ひ、二十一年の秋筆を載せて上州に遊歷し翌二十二年華族女學校の教授となり、爾來博覽會共進等に十數回出品して、諸種の賞牌を受け、第三回内國勸業博覽會に西王母の繪畫一幅を出品したる際の如きは、其畫に對し『描法正健、賦彩温厚手姿端麗、麗容人を照らす、妙技甚嘉賞すべし』といふ薦告文であつた、

女子は繪畫に於ける天才の人であるが、今日の大成を致したるよ、拮据精勵の功果で、幼年の頃より今日に至るまで、病床に臥せざる限りは、一日として筆を休めた事はなく、繁忙蒲柳の質に堪難きも、勉めて事を貫徹するの氣風があり、負けぬ氣性は藝術の上に大に活躍したのであつた、女史が十五歳の頃、勝田三雪と云ふ醫師の家に行き、二三の客と畫

師走十題



其の七　雪

談をしたことがあつた、此時女史は、言葉の行がゝり上、一晝夜千枚の畫を描き得るといふ話をして、結局之を實行するといふ事になつた、座客はむつかしきことゝいふ、主人はそれは面白きことなりとあつて直ちに倉庫より唐紙を出し、一枚を八葉に裁ち立どころに千枚をつくり座客はその檢視の役を引受ねばならぬことゝなつたので、晝夜を徹するの議を廢し、十二時間づゝ二日にして仕上げる事とし、其翌朝より筆を執り、揮毫の神速繼承に遑あらざる有樣にて、第二日の午後早く千葉の畫を悉く仕上げ大に一座の人を驚嘆せしめた、實に西鶴が住吉の社頭に、一日二萬三千句を發したと、好一對の佳話である、

女史は繪畫に於ける修業は機械的に技藝を習ひしにはあらず、幼時より其時好に任せて、畫帖を摸寫し、萬象を寫生し、種々の工夫を費やしたもので自ら生氣が紙面に横溢して居る、且つ女史は書齋に呻吟して、空想を描くことを好まず、美術は造化自然を師とするに在りといふので、良人と共に東海、東山、北陸の地を跋渉し、至る所の名山大澤を藉つて雅趣を啓發して即ち天地の粉本に則り、自家の工夫精研によつて、山水畫は殊に女史の得意とする所である、

女史の畫風は南宗に北宗の趣を加味し、書は顔眞卿の風を慕ひて、これ亦其堂に入り、詩も前述の如く黄石翁に學んで秀逸の作に乏しからぬのである、實に女史は畫家として其人物と共に完全なる人である、

川田甕江先生は、女史の東遊を送る序に『閨秀ノ文墨ヲ能クスルモノ、大低言語動止丈夫ニ類シ、面目憎ムベキヲ覺ユ、獨リ小蘋女史ハ然ラズ、女史善ク山水ヲ畫キ、兼テ花卉ニ巧ニ、而シテ其ノ詩ノ書ト、亦頗ル觀ルベキモノアリ』又『女史婉々懿ヲ挾ンデ物ニ傲ラズ、人皆其愛スベキヲ知ル』などいふ文字がある、これによつても女史の一斑を窺知する事が出來るのである、



紀元二千五百六十六年　西暦一千九百六年　清暦光緒三十二年
明治三十九年十二月一日土曜日　つものごう

△投書　この新聞誌面にも和歌俳句短文を歡迎す、續々おもしろき作を投稿あれ

▽定價　△紙の郵稅にて△紙の讀者には自然ロハで見らる、譯
▽廣告　一行十五字詰金二十錢但し四面に限る

發行人兼編輯人　永少納言　印刷人　赤坂心門

發行所　東京築地二丁目　株式會社　國光社

時言

歲晩の感

年々歲々の花、實を遺す、年々歲々の人何の結果ぞ、日東より出て西に沒し、月前半に照して後半に隱る、規律循々、役々として辭せず、三百有六十日、一日も休ます、而して人の勞役は如何、枯葉地に敷きて獨木悄然たり、鴻雁高く鳴きて、夥路、荻に落つ、夜寒月の悽慘たるに物思ひして、夜の長きに滿悵する時、人間の多恨、今なって其最となす、

輕薄と快感

輕薄なるものは愉快に感ぜらる、帽子は輕くして薄きを快とし、衣服も輕くして薄きを快とし、布團も輕くして薄きを快とし、荷物は猶ほ更ら輕くして薄きを快とす、凡そ膚に接觸する、輕薄なるより快なるあらんや、然れども霜氣森々、風稜稜々たる夜、着る所は重きを厭はず、纏ふ所は厚きを厭はず、彌が上に彌やに衣類を着重ねんと欲するなり、荷物も價あるを欲せば、決して重きを厭ふべからず、殊に人情に於ては然り、

輕薄の世

今日の社會は、相見て冷笑する社會なり、事物に冷淡なる社會なり、政事家の政事に於ける、教育家の教育に於ける、各種の事業家が各種の社會に於ける、誠心誠意に自家の理想を遂行し、實驗せんとするもの、果して幾何ありと為す歟、十の九までは皆な加減にお茶を濁し、巧に世を渡るを以て、智者の事とし能者の事とす、此を當世の才士となせり、社會の輕薄かくの如し、嘆すべきの極みにこそ、



大根引

鱸流

孫の手を引いておうなは今日もまた、み寺に行くか小春日和に、
夕くれて竹尾をわたす舟人の、簑きる見れば時雨ふるらし、
老僧が箒目もきよき寺の庭、五ひら六ひら落葉しにけり、
はきためし落葉にあさる庭鳥の、こゝと雛を呼ぶ夕まぐれかな、
ふけわたる都大路に人たえて、置霜しろし冬の夜の月、
み冬月われ旅すると我妹子が、縫うてくれたる綿おほき衣、
かきくもる雪げの空よ心せよ、我せの君は今旅にあり、

○

枯禪子

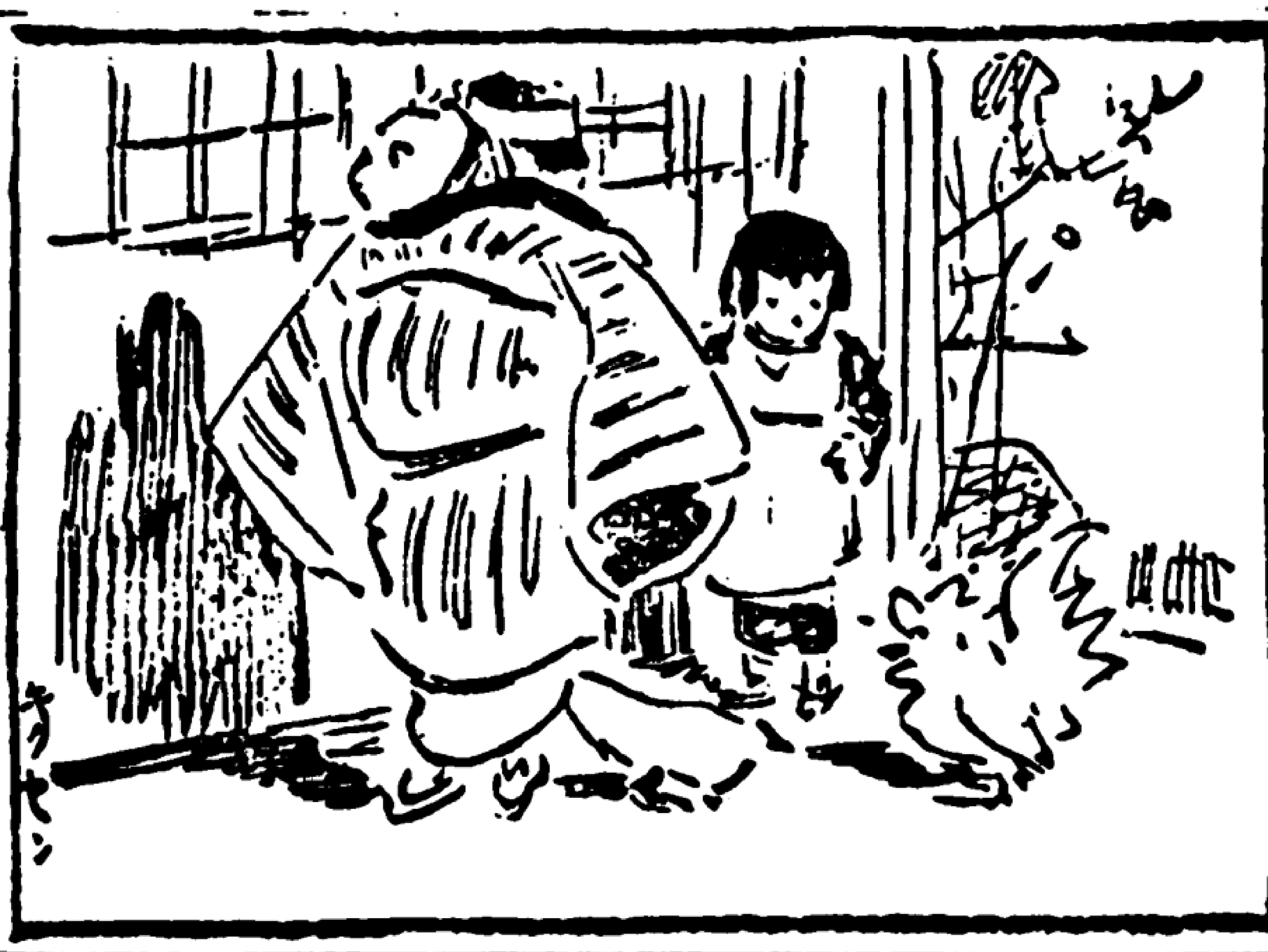
斧の音小春の山の靜かなり
初冬やかつ散る軒の蔦紅葉
冬こもる加茂の宮司や桐火桶
埋火に耳朶に吳山の鐘遠し
挾み得て心もとなきたとんかな
桂川しぐれを下る筏かな

雜　録

兩殿下と寫眞術

高輪御殿に在せる、常宮周宮兩内親王殿下が、日頃何事にも御用意深く、殊に世の込みたる技ども必ず御心を寄せさせられ、御附の方々をも感ぜさせたまふこと、今更申すも畏こし、然れば兩殿下には、先つ頃より寫眞術に御嗜なみ篤く、御手づから、機械を執らせたまひて、御研究遊ばされたるが、是亦御上達の早きには御附の人々も驚き申すの外なく、近頃は御園内の景色を、親しく御撮影ありしに、孰れも美事に拜し奉りしと洩れ承はる、

◎小學教育勅語審査　　文部省にては、白仁普通學務局長松本參事官、大島帝原兩視學官を、小學校勅語審査委員に任じ、審査の結果勅語ある小學校長の當該事務與となりしが、目下は小學校學務委員等の功績を調査中なりと、



◎女子醫學試驗の好成績　　文部省にて施行の醫術前期試驗の最近調査の成績によれば、今回の受驗志願者、男子千九百七十八人に對し合格者百七十三人、即ち僅に全數百分の九なるに、女子は九十九人の志願者に對し、合格者十二人即ち百分の十二に當り、男子よりも好成績を示せりと、

◎淺草本願寺の婦人法話會　　貴婦人の精神教養を目的とせる、淺草本願寺内の婦人法話會は、今秋は創立滿二十年に相當するより、去十一日會員死亡者追弔法要を兼れて、紀念大會を開催したり、會員死亡者追弔法要は、午前九時半淺草本願寺本堂内に連枝寳揚院道師となりて執行し、來賓並に會員の燒香に次いで、南條文雄博士の法話ありて式を了り、更に淺草公園傳法院に設けられたる會場に移りて、午後一時より紀念大會を催せり、式は君ケ代二唱に始まり、會長岩倉公爵夫人の式辭、公爵母堂毛利安子刀自の祝辭あり、最後に平松理英氏は本會創立の狀況に就て、一場の演說ありて、園遊會を開きたるが、岩倉公、小笠原伯、野田男、各夫人、及び跡見花蹊女史を始め七百餘名の盛會あり

◎流行のショール　　婦人防寒用としてのショールは、其の形も年々變化し來り、昨年の四方形の二ツ折りは全く廢りて菱形となり、半菱形となり、長菱形となり、或は水雷形となりしが、本年最も流行の形は、蒲鉾形が第一にて、其次は短册形にして、色合と代價より云へば▽蒲鉾形、淡紫、葡萄色、生壁色、鉄茶色、錆小豆色、梅松茶色は六圓八十錢▽短册形縮緬兩總付栗皮茶は四圓三十錢同形にて絹臘虎織、焦茶色五圓卅錢より五圓八十錢▽半菱形牡丹色、赤小豆色夜光飾付四圓五十錢、同形大眞鶴リボン製淡色藍鼠七圓五十錢、同形小鼠色、オリーブ茶色五圓八十錢より六圓五十錢又上等物にては蒲鉾形に眞鶴羽毛總付紅掛色、鉄茶色十一圓五十錢、又小兒用としては半菱形色牡丹、鼠、赤小豆薄紫色など一圓三十錢より一圓八十錢なり、

團欒

赤十字社婦人社員

日本赤十字社に於ける、去る八月末日現在の婦人社員の總數は、五萬六千二百五十一人にして、内外國婦人七百廿二名あり、現在一千名以上の支部は東京、北海道、愛媛、愛知、京都、長崎、大阪、福岡、神奈川、富山、大分、滋賀、廣島、岡山、石川、香川、兵庫、新潟、埼玉、長野の各府縣なりと

◎愛國婦人會韓國支部　同支部發會式には、伊藤統監、長谷川大將、韓國大官以下實業家三百餘名招待せられ鶴原長官發會の辭を述べ、三浦夫人岩倉會長の祝辭を代讀し、統監は我婦女の社會的行爲に付き、明治十五年歐米漫遊の際目擊せし、獨露其他列國の慈善事業の談話を試み頗る、會衆の感動を惹きたるが、韓國婦人の入會者多數にして盛會なりき、

◎横濱外人の婦人クラブ　一般社交を離れて、婦人の技能を研究する目的にて、今回横濱山手町二百十貳番屋敷居住、ストレーン孃等の發起にて、婦人倶樂部と云ふを組織したるが、同孃は婦人體育會の會長をなし居れり、

◎女子雇員の監督　數百の青年男女を使役せる、郵便爲替貯金管理所にては、風儀の監督に就て、十分の注意を拂ひ居れるが、今後女子の雇員採用は、東京市内に於て父兄と同居せるものに限ることゝなし、出入共に家族と相連絡して、監督を嚴にすることゝなれりと、

◎帝國婦人技藝協會の設立　同會は、飯島榮太郎氏并に夫人鐘子の兩氏が、歐米富豪婦人の美風に鑑み、由來我國婦人が、手藝に巧なるを利用すると共に、益々之を奨勵して勞作を、賤むの惡習慣を打破せんとの趣旨により、大隈伯、金子男等を始め江湖知名の人々の賛成を得て設立したるものなる由

◎運動會に見たる婦人の粧ひ　去る十日擧行したる帝國大學陸上運動會に婦人の觀覽者夥だしく、重に女學生令孃細君など流行の粹をあつめたる、中流社會の者のみなりき、今其頭髮及び服裝に就て見たる所を記さんに▽廂髮は廿歲前後の婦人に多く、卅歲前後の婦人は重に雲井なり、リボンは水淺黄白最も勢ひを占め、大抵幅の廣き鬢髱の前後に挿し、横に挿したるは稀なり、次は紫にてオリーブ色は廢れ、濃オリーブ色と變れり、又髮の上にリボンを挿し、横に西洋草花の簪を挿したるも多かりし△七八歲より十一二歲の女子は、多くお下げなるが、リボンは肉色又は眞紅色の物にて上下を結ぶが通例にて、十三四歲の女子は前を廂となし、後をお下げにしたるも見受けたり、リボンは何れも幅廣のものなりし▽次に羽織を見に、少女は筒袖の友禪縮緬の被布多く二十前後より三十前後までは、紫根、櫻鼠、鶯茶の色合を用ひ、小紋は餘り見受けざりし、紋は餘り小さからず六分位のもの流行せり△羽織の地は紋縮緬と濱縮なりしが、紋縮緬は少し光澤ありて、華麗なる爲若き方に多く廿歲前後の婦人は、これを被布としたるものありき△肩掛は獅々毛及び三角形のフラシテンは餘り見受けず、何れも長く裾に垂、中には自製の絹糸もありしが、此の絹糸にて編みたる物は、追々流行の模樣あり△履物は女學生が重に靴にて、其他は繻珍の鼻緒天鵞絨の鼻緒草履最も多く、衣服は卅前後が風通、太島、廿歲前後は矢絣又は紬等なり

家庭

配偶の撰擇

◎我邦の配偶選法　婚姻の慣習は國により所により多種多樣にして何れも歴史上の理由を有することなるが、我邦の現狀を見るに頗る慾を强うすべきものあり、男女年頃に達すれば兩親兄弟親戚乃至朋友は夫々其配偶者を選擇し、本人の納得したる後にて取極を爲すこと我邦從來よりの風習なり、而して選擇の標準とする所は、第一に血統即ち惡疾の遺傳無きや否やにして、第二に技能即ち一藝一能に長ずるや否やなり、素より財産格式等の穿鑿も之無しとにはあらざれども、一般より云へば此等は第二位に置かるゝものと見て不可なかるべく、藝術家の如き其門弟子の中より技能の優秀なる者を選んで女婿と爲すはありふれたる事實にして、某醫家の如きは嫡出の嫡續者あるにも拘らず、其養成せる子弟の最も技倆ある者を繼嗣と爲すを以て不易の家憲と爲す程なり、予は之を以て最も人爲淘汰の理法に適へる配偶選擇法なりと信ず、

◎其の當然の結果　技能不能を配偶選擇の方法とすれば、其子として生れ來る者の技倆の優秀なるは自然の理數にして、斯くて數代數十代を經て子孫の智能其面目を一新するに至ること疑ふべきもあらず、我邦近代の進歩發展は其原因種々あるべけんも、予は配偶選擇に關する我邦從來の習俗少くとも與つて多少の力ありしことを信ず、此點或は我婚姻慣習の長所として永遠に繼續すべき所なりとせむ、

◎某學者の奇言　大家の子に大家無く英雄は英雄を生まずと云へば、前陳の理論は凡ての場合に行はるとは言ひ難し、獨逸の某學者は予が卓絶せる技倆を有せざるは予の子に取りては幸福なりとの奇語を吐けるは、確に一面の眞理を穿てるに相違なきも、大家英雄の子は常に愚物なりとしも限らず、團十郎の家は血統相續にて九代の名優を出せしが如き事例必ずしも稀なりとせざるべし、賢者の子に賢子なしとの西洋の俚諺に當る例外の場合を示せると見て不可なし

◎東西風習の差異　我邦は技能を配偶選擇の標準とし、西洋は戀愛を結婚の動機とす、我は冷靜に配偶者の良否を選擇し、彼は熱情の極動もすれば取捨を誤る、其利害得失必ずしも智者を俟つて後知らざるなり、然るに西人往々にして我が婚姻の習俗を非難し、觀て未開野蠻の臭味を脱せずと爲すものゝ如く、而も我習慣の淘汰の理法に適ひ彼の慣習に比し一歩の長所あるを顧慮せざるに似たり、惟ふに、西洋諸國は個人を社會の單位とし、婚姻は各個人の權利にして父母兄弟と雖も其權利を無視して濫りに容喙すべからずと云ふ觀念に基きて結婚自由の風習を形成せるが、之に反して我國家の單位は家にあり、親子の關係は夫婦の關係よりも重視せられ婚姻に父母の承諾を必要とするは勿論、長者たる父母の選擇に係る配偶は子たる者多少其意志を枉げてまでも之に服從せざるべからずと爲せし事、現在の習俗を爲せし所以ならん、理論の是非は姑く措き、實際上二者孰れを可とするやと云へば、予は寧ろ我習慣を採らんと欲するものなり、

（箕作博士談片）

雜録

學者と處世訓

文學士　山本無極

皆川淇園

▽衣服は何の爲にか着る、寒さを凌ぎ、暑さを厭はんが爲なり、されば寒からず、暑からず着ば、麁服にても厭ふことあるべからず、美服に奢るは未だ寒暑の身にしまざるが故なり

▽食事は何の爲にかする、空腹をやすめんが爲なり、されば添物はなくて足りなん、添物なくて食の進まざるは、未だ飢の至らざるなり、飢の至る時は、精糠をだも嫌はず、

▽家は何の爲にか作れる、雨露を厭はんが爲なり、されば無益の造作など無くて足りなん、水火の災ひに家を失はゞ人の軒端にても厭ふものあるべからず

細川三齋

▽寄合てよき友
正直や能者もの書學文じや
貴人年寄うそつかぬ人

▽寄合ひてあしき友、
喧嘩好いらぬ廣言うつけもの
人の中言公事たくむ人

▽よく思はるゝ人
心よく人事いはずいんぎんに、
慈悲ある人に遠慮ある人

▽憎まるゝ人、
うそつきや人事咄しさし出口
高慢ありて自慢する人

▽物の成る人、
朝起きや身を働かせ小食に
忠孝ありて灸をたやさず

▽物の成らぬ人
夜遊びや朝寝晝寝に遊山すき
引込思案油断不氣根

▽利根なる人、
人近く言葉すくなくいんぎんに
知りたることも知らぬ振して、
白川樂翁

▽夜ふけてことゝふとも、初ほとゝぎす、雁がねは、必ずうとくすべからず、

▽枕に通ふとも、とがなきものは、花の香、遠寺の鉦、霜夜の虫の音は、殊にあはれむべし、

▽にくゝとも許すべきものは、花の風、月の雲、うちつけに爭ふ人は、ゆるすのみかは、

▽野分のあしたの庭ならで、亂るゝを許すはあらざるべし、

▽うたてきものは、みな月の鶯、落葉の風にさわぎたる、

▽多きを怨む者は、茶器、おそ櫻、りうたう花、ほとゝぎす、松虫

▽思ふに違ひて、うれしき者は、さみだれの雲間の月、葉月十五夜の晴れたる、人の兒のいとけなきと思ふが、いつか文つくり、歌よみたる、

▽梅が香を櫻の花、柳の枝になどゝは、思ふまじき事なり、花の紅、柳の綠、心をわけて樂しむべし、

▽たれりと思ふべきは吾が身、足らずとして好き物は、つとむべき道、
蜀山人

▽太公望曰く、子が可愛くば棒を喰はせよ、子が憎くば砂糖餅を喰はせよと、是れ子を敎ふるの法なり、

▽世の中を渡りくらべて今ぞ知る、阿波の鳴戸に立つ波もなし、

▽得ぬことを得たり顔する人にこそ、仕落も恥もあるものと知れ、

▽白き齒を見せぬ親こそ戀しけれ、口をすぼめて世を渡る身は、
中江藤樹

▽故郷にかへる心のいかなれや、久しく旅に年をふりつゝ、

故郷の人未だ郷に到らざる時は、難に逢ひて、愈歸思多し、一息尚存する中は、此心止むことあらず、百年の故郷すら此の如し、況や道德は萬劫不壞の故郷なるをや

まことなる志をば身をすてゝ、求むる名にしなぞらへて見よ、

凡夫は名利を安身立命の地なりとすれば、何事も皆名利の計にあらざるはなし、されば名利の為に身命を惜まざること、塵芥の如し、此心を道にうつしぬれば、所謂眞志なり、其志立つときは、入德難きにあらず、故に志立ちて、學半なり、

德川光國

師走十題



其の八　寒月

苦は樂の種、たのしみは苦しみの種と知るべし、主人と親とは無理なるものと思へ、下人は足らぬものと知るべし、恩を忘るること勿れ、子程に親を思へ、子なき者は身にくらべ近き手本とすべし、掟におぢよ、火におぢよ、分別なき者におぢよ、朝寐すべからず、分別は堪忍なり、小なる事は分別せよ、大なる事は驚くべからず、九分に足らば十分にこぼるゝと知るべし、

太田錦城

飲食もなるべきたけ薄くすべし、房室もなるべきたけ少くすべし、是れ身を全うするの法なり、衣服もなるべきたけ質素なるべし、器用もなるべきたけ儉朴なるべし、宮室もなるべき丈は卑陋なるべし、是家を守る法なり、奢侈の念を抑へ制すると、放縱の欲を抑へ制すると、天下國家を治むる人も、一身を守る者も、抑への一字、至近切要の學なり、

足代弘訓

△人を欺むく爲に學問すべからざる事
△人と爭ふ爲に學問すべからざる事
△人を誹る爲に學問すべからざる事
△人の邪魔する爲に學問すべからざる事
△名を賣る爲にすまじき事
△利を賣る爲にすまじき事

川路敬齋

行狀は之を扇に譬ふべく、心は之を要に譬ふべし、要に毛厘のゆるびあれば扇其用を成さず、

松尾芭蕉

△衣服器財相應にすべし、過ぎたるは善からず、足らざるは惡し、
△他の短を擧げて、己が長をあらはす勿れ、人を謗りて、己れに誇るは、甚たいやしき事なり、
△一字の師恩たりとも忘るゝこと勿れ、

伊達政宗

△仁に過れば弱くなる、
△義に過れば固くなる、
△禮に過れば諂となる、
△智に過れば嘘をつく、
△信に過れば損をする、

氣長く心穏にして、萬に儉約を用ひて金を備ふべし、儉約の仕方は不自由なるを忍ぶにあり、此の世に來たと思へば、何の苦もなし、朝夕の食事うまからずとも、ほめて食ふべし、元來客の身なれば、好嫌は申されまじ、今日の行おくり、子孫兄弟によく挨拶をして、しやばの御暇申すがよし、

人體と科學（二）

工學士 長橋芝翁

さて人間は到底空氣計りぢや生きて居られませんけれども、何よりも第一に大切なのは此空氣でござります、何せと申しますれば滋養分中主要の酸素は之から得らるゝので、之がなかつた日にやどうでせう、それは云ふ迄もありませんつまり血のけがなくなるのであります、それで生きて居るには呼吸をしたり、熱を起したり、酸化作用の力を借りねばなりません、空氣が不足で充分之等のことが行屆かず終に往生したためしは御了承の通り澤山あります、實に人體は一種の熱機關と見ても好からうと存じます、イヤ全く其通りで皆様は機關士運轉士で御坐りますから、御注意遊ばして破裂、脱線、衝突のない樣に願いたい、ヤヽもすると機械の掃除が悪い爲に意外な災難を被ります、それが證據に修繕工塲即ち病院へ行つて御覽なさい、さま〴〵の破損品が來て居りましてドクトルは其修繕に忙がしいので御坐ります、

元來空氣の性分として普通其二割一分は酸素でありますが、之が減じて七分になると窒息を始めます極平常の呼吸では一回に三合餘りの空氣を出し入れし、其入れた量と出した量とは餘り違はないが、併し性質は大部變つて居ります、機關などでは火門と煙突とあつて瓦斯の通り道が異つて居りますけれども、人體では口や鼻丈けで多く呼吸しやうといふ仕掛であります、入る空氣の成立ちはどんなものかといふに、酸素の量は前に申した通り、それから窒素七割九分、水蒸氣八厘四毛、炭酸四毛、而して出した空氣には炭酸と水蒸氣がズット多く、酸素は非常に少なくなつて居る、尤も運動する人とせない人と、又菜食者と肉食者とは出す炭酸の量に相違があります、それについていろんな、實驗がありますが、先づ凡そ中肉の人で一分間四升許りの空氣から五百十八ミリグラムの酸素をとり、六百十九ミリグラム

の炭酸を吐くのですから、廿四時間に積つて見ると、七十五萬グラムの酸素を吸ふて九十萬グラムの炭酸を出すことになる

さて空氣中の酸素や其他のものがどうして人體中へ入つて行くかといふに、御案内の通り此化學工場へ入て直ぐ氣管といふものがありまして、口やら口の上の二ツの窓から入つて來る空氣が此氣管を通り、次に氣管枝、肺臓、小葉と順を追ふて進みます、此小葉は極めて薄い壁から出來て、其周圍には血管の細かい網がありきす、小葉壁と此網は非常に接近して居て、いはゞ顯微鏡的小孔から取引する瓦斯の兩換屋といふべきものでしやう、そこで入つた酸素は血管へ通じ血球に化學作用を與へ、其血液は動脈といふパイプで丁度水道管が水を運ぶ樣に、全身へ普及し工場全體を潤すのである　今度動脈末端の毛細管は二度び集つて靜脈即ち下水路といふ樣なものになります、かく毛細管を通ずるとき血液は酸素を化學室即ち細胞で炭酸と交易しそれを肺へ輸送して再び酸素を求むる次第、又小量ではありますが皮膚もやはり酸素と炭酸の兩換屋をつとめます、皮膚呼吸といふのは即ち此事で御座ります、尤も皮膚が廿四時間で出す量は肺が出す量よりは多くして三と二の割合、重さからいふと體量の六十七分の一ではありますが、其中の主なるものは水蒸氣で、炭酸は水蒸氣の何百分の一といふ位しかない、皮膚が吸ふ酸素の量は出す炭酸の量位か或は之より少ないので、肺と比較すると、皮膚の炭酸排出は肺の二百二十分の一、又酸素吸入は肺の百八十分の一に當つて居ります、併し温度の高低運動の有無によりて此等の量の増減することは云ふまでもありません、

人體の化學工場ではいろんなもの丶製造に從事いたして居りますから、空氣計りとは申しません、種々なる食物中に伏在してある雜多な材料を要するので御坐ります、前述の酸素は言葉を換へていふと丁度エンヂンの燃料に當ります、それが熱したり、濕らしたり、結合したり、分離したりして驚くべき作

用をなし組織に大變化を與ふるといふ始末、ナント皆様、皆様の化學工場がどれ丈け大仕掛だかお感じになりましたか、それから食物ですが、食物中の大切な滋養分と云ふのは、蛋白質、脂肪、炭化水素物、水、鹽分等であります、有名なる生理學者フォイグト氏や、ペッテンコーフェル氏は、肉體を使用するものと精神を使用するものとを區別して、二十四時間に上述の分子を何程づゝ要するかを論じて其研究を報告いたして居ります、つまり二十四時間に要する分子をそれ丈け食物からとれば好いのだ、即ち勞働者が二十四時間に要する蛋白質百十八グラムと炭化水素物五百グラムを得やうとするには何程の鷄卵とパンを食べねばならぬか、丸で算術の問題見た樣になりましたが、イヤ化學工場の仕事をするのですから算術は臺所でもどこでも必要でございます、料理の原理は決して見たところを好くするが能でない、いや何式だのカニ式だのとひねくつても工場で必要な材料を與へなけりや工場のやりくりがつかない、だから人體に必要なものを或適度の勞力で腸胃が呼吸出來る樣に程よく料理するのが臺所の哲學では御座りませんか、考へて見ますると實に臺所哲學は何人も研究して置かねばならぬ學科と申して好からうと信じます、それはそうと先きの算術の解答はかうで御座ります、即ちあれ丈けの滋養分を取るには鷄卵十八個とパン四五ポンド喰べねばなりません、

食物や滋養物が化學工場へ入つてどんな工合になり行きませうか、カーマンの所謂齒のいけ垣を通りてから化學的作用を受けて、工場の利益になる丈け利用せらるゝので御座います、消化作用は即ち第一に口内にて始まります、そこで澱粉の幾分は嚙切機械で碎かるゝと同時に唾液の爲糖分に變ずることはいふ迄もありませんが、それから胃は蛋白質を攻め落し、鹽分を解かし、脂肪を液化いたします、又腸へ來るとどうなるかといふに、其長い〲道中の間に物理的化學的作用を受け、變形し變質し終には血

液中に呼吸せらるゝのである、誠に化學工塲で取扱ふ方法も又製作品の變り具合も巧妙なものでとても筆紙には盡されません、其中には膽汁や唾液といふ大切なものがあります、二十四時間に製造せらるゝ容量は、膽汁八百六方センチメートル、唾液百五十グラム、前者は脂肪を石鹼樣に變質して吸收に便ならしめ、後者はそれをグリスリン及び脂肪酸に溶解せしめ、又唾液の樣に澱粉を糖分にかへ、胃液の樣に蛋白質をペプトンにかへるのであります、

こう云ふ風に出來た品物を腸粘液膜の絨毛が吸收いたします、絨毛といふのは粘液膜の絲の樣になつて居る部分を指すので、各々の絲には細かく分れてある淋巴管が來て、而して絲の細胞は手をのばして此滋養分を捕へそれを淋巴管に運びます、淋巴と云ふのは御存じの通り赤血球のない即ち色のない血のことで御座ります、細かい淋巴管は集り〱て太くなり、之が靜脈系統に通ずるから、滋養分は血と共に流れて全身に及び、普ねく化學室に届きます、すると組織になるものは組織になり、排泄物になるものは排泄物と常に區分を致します、サア此小さい化學室では化學者のいふ逆進法といふのが始まるので、此處でまた血液構成分は酸素の爲に崩解して組織分となり最後の分解物となります、全體滋養分を大別すると含窒物と無窒素物の二種類で、含窒物は蛋白質を以て代表し、無窒素物は脂肪、炭化水素物をいひ、化學室で之等がどんな逆進法をするかと云ふに、含窒素物は尿とあらはれ、無窒素物は炭酸と水とになります、無論こゝ迄は一通りの順序ぢやない、酸化作用も起るし、諸々なる酸ともなり、乳酸、酪酸、醋酸、蟻酸、琥珀酸、蓚酸が其道中に出來るので御ざります

して見ると代謝機能の最後の結果は炭酸と水と尿で、又之等を工塲の下水とも稱し得るし、腎臟と皮膚、肺臟は即ち下水掃除の受負人で御座りましやう、水は腎臟からは尿皮膚からは汗、肺からは水蒸氣となつて出來ますが、凡て一日に出る水の量は其

は、ねむれる目を開き、居直りて、見れば各々は武士方と見え侍るが、主人の留守といひ、案内もなく屋敷へ踏込、その上女の寝室まで入込、無體の事をいひかけ給ふ、夫は、小身者ゆゑ、漸下女一人召つかひ、江戸在番の留守の内、我は、産後のなやみにて、斯やうに枕も上らず、我身さへ、自由ならざるに、然様の人を、何とてかくし置べきや、屋後にも出口あれば、もしや通り拔したるも知らず、假令それはともかくも、各々實の士ならば、武士の作法は御存じあるべきに、女子ばかりの所へ、案内もなく押込、その上、女の寢室まで踏込、無禮の擧動、

師走十題



其の九 侍[illegible]

何方の御家中にて、名は何と申す御方に候哉、何とも法外なる仕方、不屆の至なり、女なれども武士の妻、その分にはなりがたし、一人も還しはせじ、とありあふ物にて鉢巻しめ立上り、長押に掛たる長刀の鞘をはらひ、小脇にかひ込立むかふ、追手のものども大きに驚き、皆一同平伏し、仰せの段々至極せり、我々心のせくまゝに、重々の無禮、殊に御産室をさわがせし段、無調法至極、一言の申しわけもなき仕合、眞平御免下さるべし、といはせも果てず、否々夫れは御卑怯なり、無禮も無調法も、眞成の武士より先だつて知る

べき筈、それを知らぬは實の武士にあらず、女中ばかりと知つて、物とらんとての事、盜賊の惡名を受くるが厭なら、立上て勝負しや、とせりかけせりかけ詰めよすれば、いやはや、いか樣に仰せ候とも、手向は、仕らず、御國ひなき段も見屆候、無調法の段、幾重にも御免々々としり込して、ほう〳〵の體にて逃て歸りける、漸く鳴も、しづまり、夜に入ければ、件の男を出し、今宵は此にと申したく候へども、御覧の通り、女子ばかりの住居なれば、夫への義理、世間の遠慮、かた〳〵御留申しがたし、裏門より忍びて御出、何方へも御落着き候へと、人を討し情形、對手の名、その者の姓名等を、とくと聞糺し、湯漬などしたゝめさせ、下女を出し、門外の樣子をみせ、疑しき事もなければ、道路の案内を敎へ、裏門より出しやりぬ、彼男活命の恩厚く感謝し、あまた度叩頭して、產婦の義あり情あり智あるを感歎して、暇乞して出て去くその後下女へもかたく口どめしてさりげなき、風情にて過ぎさりぬ、かゝる義話も、亦武士妻女の典型といふべきものなり、

昆蟲の話

深井龍蠅

鳥、獸、蟲、介、之が昔時の動物分類法でありました、されば此の蟲と云ふのは如何なる動物を云ふたのであつたかと申すと、蛇、蛙、蜂、蝶、蜘蛛、蚯蚓等の類を總稱して云つたのであります、勿論今日でも斯く申して居る者も少くはありませんが、若し昆蟲と申したならば、今少しく明確な區別をせねばなりませぬ、動物學で昆蟲と云ふのは、氣管で呼吸し、體軀は關節から成立ち、頭、胸、腹の三部は明に區別され、頭には一對の觸角を具へ、胸部には三對の脚と普通二對、又は一對の翅を具備して居る動物を云ふのでありますから、蜂、蝶は昆蟲でありますけれども、蛇、蛙、蜘蛛、蚯蚓等は昆蟲の類ではありません、昆蟲類は動物學上節足動物門の昆蟲

綱であります、

萬物皆卵より發生すと、ハーヴェーは申しましたが、昆蟲も亦卵から發するのであります、源兼昌の歌に

草むらに住む夏蟲は去年の秋
　朽ちし草葉のなるにやあらむ

とありますが、昆蟲とて親があつて卵を産まねば、決して發生するものではありません、春陽草木が芽を出す頃、蠶兒（幼虫）は卵から發生致しますが、三四十日間桑葉を食ふと、繭を作り、其内で蛹になります、此の蛹も亦拾四五日を經ると、今度は蛾（成蟲）となつて、繭から出で交尾して産卵致すのです、かく卵から幼蟲、蛹、成虫と判明に四つの時代を經過する昆虫を、術語では完全變態と申します、蝶、蜂、蠅等はすべて此の類です、之に反しまして不完全變態と申すは、蝗の如卵から生れた時（幼虫）も、蝗（成虫）となつた時も、格別の差異のないのを申します、これらはすべて蛹時代が分明しないのでして、蜻蛉、蟬は此類なのであります、

昆虫の數は、全動物數の凡四分の三でして、最近の報告によりますと、二十九萬九千五百餘種であると申します、日本では一萬種程しか知れて居りませぬが、恐らくは五六萬種位は居るだらうと存じます、之を研究する學問を昆虫學と申し、類を集めて比較分類するのを、昆虫分類法と申します、昆虫の分類で最も簡單なのは、米國の動物學者パッカルド氏の七分類法であり、大低初等の動物書には、此分類が掲げてありますですから、茲にも一寸此の分類を書きませう分類を知らぬと、昆虫を研究しても面白くありません、

(一)直翅目　蝗、蟷螂、螽斯、蟋蟀の類、不完全變態
(二)半翅目、蟬、椿象、蚜虫の類、不完全變態
(三)脈翅目　蜻蛉、蜉蝣の類　完全又は不完全變態
(四)鱗翅目　蚊蠅類　完全變態
(五)双翅目　蝶蛾類　完全變態
(六)鞘翅目　甲虫類　完全變態
(七)膜翅目　蜂蟻類　完全變態

之はホンに一例ですけれども、之から同じ類を同目に組み入れることを學びますれば、直に判ります、此分類は獨逸の學者カルシユ氏も採用して居るので、初學者に最も宜しい、

私は昆虫學を專攻して居るものでありますが、數月以前から病院生活をして居るので、無聊のまゝ蜉蝣日記と云ふ昆蟲思ひ出の記を書いて居りますが、近頃マリー夫人の訪問を受けた時、一寸之を見て貰つたら、紙上へでも出したらばどうです、と申したから、秩序はありませんが、載せることにしました、何卒其つもりにて一讀を願ひたいのです、

一　蜉蝣　脈翅目

蜉蝣の羽、衣裳楚々、心之憂矣、於我歸處と詩經にありますが、蜉蝣は古くから知れて居りまして、『蜉蝣之生命』など、至つて短命な者としてあります、蜉蝣はカゲロウと訓し、フユウと音讀します、古は蜻蛉の事をカゲロウと申しました、彼の蜻蛉日記は此の類であります、夏夜など涼風南の窓から吹く時になど、それは〳〵驚く程多數の蜉蝣が燈火の四圍へ集まる事があります、又濠の傍などの瓦斯燈などに、無數の蜉蝣が飛廻つて居る事があります、蜉蝣は種類は隨分多いのですが、皆體は軟でして、五分位、四ッの翅は大低前翅が大きいのです、腹端には二本(くれかげろふ、及びかとんぼ類)又は三本(こかげろふ、及はめかけろふの類)の長い尾を備へて居ります、多くは太陽西へ傾く頃發生するので、先づ幼虫は川から這ひ出して草にとまり、脱皮して成虫となるべきなのですが、カゲロウばかりは、今一度脱皮せねば、成虫にはなれないのです、成虫は一時に發生するのでして、場合によりますと、群をなして飛ぶ事があります、けれどもカゲロウは食物を食べませんから、また食べる必要もないのですから、四時間か長くも一日間位しか生命がないのです、此の理由は、カゲロウは羽化(成虫になる事)してから、たゞちに交尾して水中に卵を産んでしまいますから、親(成虫)として生れた甲斐を數時間

に盡してしまふからであります、ですから蜉蝣は種々な異名がありまして、朝生暮死虫、またアサガホと申し、獨逸では一日蜖と云ひ、英米では白露虫と申します、又五月トンボなどとも申しますが、之は溫暖な五月頃多く發生するからでせう、日本では八月九月頃が最も多く發生すると思はれます、

カゲロウの、卵は塊狀でありまして、水中に產み落されるのであります、孵化して幼虫となりますが、元來カゲロウは不完全變態でありますから、幼虫は翅がない丈で、他に成虫と異つた點は、澤山ありません、水中を活潑に食物を獲る爲に動きます、多くは流れる河に居るのですが、池や沼にも亦住んで居ります、そして大抵底に穴を掘りましたり、又は泥土を被たりして、巧に隱れて居ります、水中に住むこと二ヶ年許でやつと、空中に飛ぶ樣になりましても、情ない哉一日の生命しかないのであります、余も亦此の蜉蝣の如くなるのではではあるまいか、

二　菓子の穀盜　鞘翅目

菓子箱を開けて吃驚虫が居り、貰つた菓子箱を、それからそれへと手摺れる迄、持ち歩いたならば、隨分此位な事もありませう、菓子の害虫と申すと、十五六種はありますが、實際大層な害を受ける事はないのです、それは菓子などを長く貯へて置かぬからでありませう、シカシ今菓子箱内に穀盜の一種を發見しましたから、一寸申します、幼虫の長さは六厘ばかりで、白色頭部に近き二三節は黑褐色で、脚は三對しかありません、親（又成虫）は長さ一分ばかりの褐色の光ある甲虫でして、胸部の兩側は鋸狀をして居るのです、けれども鋸穀象とは異つて居るのです、卵は二三日で孵化致しまして、それから穀盜（成虫）になる迄、一ケ月位かゝります、此虫は澱粉質を好みますので、菓子は主に澱粉質の物を害します、

さらば如何して之が發生しない樣にするかと申せば先づ長く貯へぬのが專一です、それから箱も密閉する事のできる、ブリキ罐などはよいでせう、そ

して折詰の日附を何月何日とするのです、そして菓子の種類にもよりますが、所謂乾性(ビスケット類)の物でも、夏期は二週間以内に開封すると定めたが宜しい、此點から見ると、風月堂の主人などは注意したもので、毎日の賣殘りは皆土中に埋めたと申します、猶進んで菓子箱に日附をすると云ふ事をして欲いのであります、

歳晩偶記

紅露女史

獨立心の必要

眞に盛衰は世の常なる哉、見よ一歳の中にも、鳥歌ひ花笑ふ長閑なる芳辰の頃のみはあるべからず、天寒くして、風も冷かなる時にも變ずべし、人の運命も亦同じからずや、いかに樂しく興じつゝある時のありとも、其の樂やながゝらず、勢盛んにして、其の令する所行はれざることなき程の人も、其の勢は夢の如くに衰へ行き、平和なる樂しき時はしばらくもつゞかずして、多くは名狀すべからざる如き艱難をなめざるべからざる境遇にも變ぜん、實に世を吹く風は思ひしよりも、温きものにはあらざるなり想ふに彼の故鄕を出でし時には八千人の武者を從へて、威容堂々たりし項羽も、垓下に於てはそも如何に、あはれ四面楚歌の聲を聞く否運に陷りしには非ずや、かゝる變遷は豈只項羽が上にのみあらんや、凡て世はかく定めなきものなり、今更に何をか憂へ何をか悲しまん、ただ〳〵如何なる悲慘の境遇に陷りたる時に當りても、これに打ち勝ち、毅然として事に處すべき强き氣象を具へんことこそ希はしけれそれ世人の多くは安逸をのみ求めて、事に接して堪ふべき心魂を備へざるが常なれども、天は人に與ふるにたゞ樂しき時のみを以てせざれば、或は任ひ難き程の艱苦を與ふる事もまゝありなん、其の時に接して、徒に悲しみなげき、何のなす事も覺えざる迄に落膽しゐたりとて何の益かあらん、かゝる時には

嘆くとも旣に詮なき事なれば、速に其の運命に安んじ、其の心してこれに堪へ、自ら任い得べき氣象を備へんことこそ必要なれ、もしさなくば、一朝事のあらん時、自らも苦しみ、爲に人を恨むが如くに至りぬべし、

それ何事もなくして、樂しく平和なる順境にある時は、求めずとも、人々集ひ來て、共に興じ、共に樂しみて語り合へども、一旦事あり悲慘なる境遇に變ずるや、人皆おのづからはなれ行きて、只よそながら、實にあはれなる人よ、幸うすき人哉との聲を聞くのみにて、省みるものは曉の星よりもまれなるに至らん、人の賴むに足らざること此くの如し、かゝる時に至りて獨力あるもの、賴みとなるものは神助の外には、已れに有する堅固なる氣象より他になければ、常々より獨立獨步の氣象を養ふ事に心掛るこそ最も必要なれ、勿論世は情なき人のみにて滿さるゝにもあらざれども、他日悲慘なる境遇に變ずる事あらんを思ひて、男子は言はずもがな、纎弱なる女子と雖、勇氣豪宏なる氣象を具ふる事肝要なり、旅は路伴とか言へる言葉もあれど、さるものあらずして、孤獨ならん時には、自ら不屈の精神を以て行かざるべからず、進まざるべからず、凡て人は賴みによらぬもの又賴もしと思はるゝ人も、同じく悲慘なる境遇に陷るかもはかられざるものなれば、只已れに不屈の精神を具有するあらんには、如何なる時如何なる境遇に接したりとて、何をか恐れ、何をか迷ふことあらん、

いづれ世は平地のみにはあらずして、大小の山川もあるものなれば、森深き谷をも越え、流急しき川をも渡らざるべからず、されば弱き女性よ、常に心に獨立の精神を養ひ、事に當らん時、力足らずとのみ自覺しつゝ、空しく苦悶に打ちしづむ事なく、其の天性の優しき美しき性質を保ちつゝ、これを失はず、害はざる以上は、他日事のあるなきによらず、常に心に忘れずして獨立獨步の精神を修養せられん事こそ望ましけれ、

誹謗をさけよ

世に誹謗てふ者のやまん折は、そも何れの時にあらむか、あはれ、世と共に其生存を同じくして終までともなはざる可からざるものとせば、實に嘆ずべき事ならずや。

それ時として、人の打ち集ひて、互に樂しく語り興じつゝあるを見ん、されど終には其の談話のおのづから人の上に涉り、而かも誹謗に近づきつゝあるを覺ゆ、さらば獨居の折には如何なるべきか、こは自ら思ひ知る所にまかせんは常なれど、かゝる折にも思はずとのみ云ふべからず、何れかこれに思念の走る其間にも、或は誹の念に傾く時のなきにしもあらざるべし、譬ひ小兒と雖も其の智と心との發達の程によつて、互に相誹りあふことを免れず、されば世のあらん限り、人の生存せる限りは、彼處を望み此處を顧ても、至る處に誹謗の聲は止まざるべし、その中にも、諸人の德なからん人をば誹る事の緩にして、德高く行ひ人より秀でたる人をば、かれこれと神ならぬ身に缺點を探り求めて、此を誹るは實に愚かの極と云ふの他なからん、さるを如何にせん、尙多く行はれつゝあるを、遙に古に立ちかへりて、數多の聖人を想起せんに、德萬衆より高く、行ひ萬人より美しき人こそ、尙、幾倍の誹を受けたるを認るなれ、あゝ是れ何たる行ひぞ、實に口惜しくぞ思はるゝ、世の現象によりても、亦斯かる狀あるを見ん、試に大海に突出せる岸邊に立てりとせんに、彼處に於てそも何を聞くならんか、必ず絕ゆることなく岸打つ浪の音響くを聞かん、さなり、これ地の何れよりも秀でたるによりて、常にたゆることなく、止むことなく、よせくる浪は此を打ち、地は其浪にて洗はれ凡てをあばかれつゝあるを見ん、森林に於ても亦樹木の諸木より丈高く秀でたらんは吹きくる風の此を摧く事外よりも甚しからん、知るべし人に於ても亦かくの如くなるを、

あゝ人にして誰か完全なるものあるべき、いかに德高き人たりとも、缺點のなきものはあらじ、凡て

の人には一得一失ありて、一つも缺くる所なき圓滿なる人とてはあらざるなり、さるを人はなどてか、るあさましきわざをなすらん、これ他なし、只己れを知ると、人性の如何なるかを認むる事に深からぬ故なり、されば、すべからく其の心に、人性の完全ならざると共に、缺點の多きを認め得ず、おのづから己れの有しつゝある缺點を知り、隨ひて、他人の缺點を見るとも、必ず誹謗の念を起さず、もし起すとも、常に其の心して歩みなば、終にはかへつて、德高き人を賞し、これを仰ぎ見て自らも均しく德ある人となりぬべし、これめでたく、願はしかるべき行ひにあらずや、故にさけよ、すてよ、誹ればとて何かあらん、いたづらに己れも亦誹らるゝに過ぎず尙又己れを傷つくるにひとしかるべし、故に云へるにあらずや『他人を量らんとせば、先づ自ら量るべし、人を傷むる語はこれ自ら傷むるなり、血を食みて人に噴けば、先づ自ら其口を汚すなり』と、宜なるかな、

徳川伯爵母堂

徳川達孝伯母堂光子は(八十五)閑院宮孝仁親王の第三女にお坐し、直子と稱せられ、初めは睦宮、後には桂宮とも申しまつりしが、弘化三年廣大院夫人の媒介にて、田安中納言慶賴卿即ち達孝伯の父君に御降嫁あらせられ、琴瑟和合して平和なる家庭を樂しまれしが、慶賴卿逝去の後は、落飾して和樂院と稱し、浮世の外の人となり、專ら思ひを敷島の道に寄せ、光風霽月裏の仙女たりしかば、固より之と云ふ病氣もなく、一年前より次第々々に死期に近づきたるのみにて、自身も來月二日には、白玉樓中の人とならんなど申し居られしが、格別の苦痛もなく、去十月廿六日拂曉溘焉として易簀せられたり、竹の園生に人となり給しにも似ず、下民の情に通じ、召使等を憐れみ給しかば、知るも知らぬも婦人の模範として仰ぎたるより其訃を聞きて慟哭せざるものもなしとはさもあるべし、葬式は翌十一月二日に佛式を以て營まれし由、敷島の道には天性の才お坐したるものと見えて、口を開けば咳唾悉く珠をなして響き、嫋々たる和歌のなるを常としきとは驚くべし、左に其一首新年河と云ふを揭げんに、

神風や御裳濯川におりたちて
としの若水けさは汲みけり

東京養育院内の一消息

▲左手の裁縫　兒童室の二階に、裁縫室あり。そこには十二三歳より十七八歳までの少女が、女教師の指教の下に、裁縫をなしつゝありしが、そのうち最も不憫に思はれしは、左手もて巧に針を運びつゝある、林とく（十八）といへるが身の上なり。彼れは大阪の生れにて、東京に父母ありと聞き、今より三年以前に遙々尋ね來りしも、そのかひなくて、廻りあふこと叶はず、或家に下女奉公をなしけるに、金子が紛失したりとて、その嫌疑を受けたる事を、娘心にもはかなく思ひ逐に四谷見附の軌道に轢死を企たるその時、右手と左足を切斷せられ、生れもつかぬ不具者となりて、當院に收容せられしとぞ。されど天性怜悧にして、指頭巧に動き、左手なれども、裁縫にかけては、院中第一と稱せられ、上等衣類の裁縫は、大方この女の手に成るものなりといふ。また入院の際は一丁字なかりしも、學藝も亦人に秀で、今は高等女學二年級の學科を修めつゝあり、人物また溫良なるを以て、將來は院兒の教師となさん心がまへなりと、幹事の話なり。

◎院内の小學校　孤兒、貧兒、棄兒等を集めたる同院の事とて、小學校とても、固より簡易科にて、其學課、程度、普通小學に比すべくもあらざれど、教師熱心に教鞭を執り、院兒また殊勝に學びつゝあり、尙いたいけなる幼稚園生の遊戯より、女生徒の體操を觀て、最後に啞生の學科練習を觀たりしが、教師は山本某（廿四五歳）といへる盲啞學校卒業生にて、こは純然たる啞者にはあらざるも、十四歳の時耳を聾せしめたるとかにて、手眞似もて話せば、答ふる所あるも、發音に高低なきを以て、頗る聞にくし。さて生徒は四五名にて、黑板には、左の如く記しあり。

九月廿二日　土ヨウ　アメ　ダイ七　オガハ

ワタクシノイヘノマヘニハ、オガハガアリマス。ソノオガハノキシニハ、クサガハエテヰマス。ヤナギノキモ一ポンアリマス。

山本氏は、少女の啞者を呼び出して、これが練習を爲さしめしに、少女は出でゝ塗板に向ひ、異様の目鼻を動かし、巧に手眞似をなしつゝ、その文意を表白せり。一例を示さば、草が生えての時は、兩手の指を悉く上に向け、また柳には兩手を垂れ、一本には指一本を示すなどにて、余等は塗板と手眞似とを見較べて、その半以上を解するを得たり。

嫉妬の心

高橋五子

嫉妬と申すことは、嫉みそねみと申すことでございまして、人の心の中に色々の風になりて萠します、夫婦の間には悋氣となつて顯れ、姑媳の間には爭となりて顯れ、兄弟姉妹の間には怨嗟となつて顯れ、朋友の間には猜忌となつて顯れ、君臣の間には讒言となつて顯れ、其他機に臨み變に應じて種々の姿に於て顯れます、して此罪は、其萠芽は至つて小いものでありますが、これ程恐しい結果を生ずるものはありません、人苟も此心に襲はれます時には、何ともいへぬ不愉快を感じます、憂欝になりまして、唯々煩悶に煩悶を重ねて、何事に遇ひましても、とんと満足といふことは得られぬやうになります、のみならず其心のいよ〳〵増長して來ますと、心のなやみだけでは足らないで、人を殺し自分も死ぬやうな恐ろしい罪に陷ります、御覧なさい日々の新聞紙を如何なる日でも、大抵人殺しの記事のない日はありません、又情死の記事のない日さへ至つて稀な位でございます、何によりてか〻る記事が絶えないのでございませうか、其原因を正しますと、半分過ぎは嫉妬心より起るのでございます、

さて嫉妬といふ心は何んな處から起るかと申すと、實に心の量の狭い所から起るのでございます、申さば自分獨り他人に愛せられたい、他人の愛は自分獨り占めたい、と云ふ實にいやらしい手前勝手の心より起るのでございます、して亦此心は誰にでもありまして、男女老幼の區別はありません、御覧なさい乳房を含んでる頑是なき小供すら、此心はあります其證據は、母が若し他人の子を抱きました時には、其實子は如何でせう、必ず泣いて怒つて、其母の手より他人の子をふり離させて、自分が母の手にまゐりまして、始めて安心した様子をいたします、これ小供ながらに已に嫉妬心のある證據でございます、人は誰でも此心のない人はありません、けれども大

人になりますと、子供のやうに正直でないから、いくらか心に飾といふことがあつて、あからさまに其心を見せません、因りて外面には小供のやうには顯れませんでも、其心に這入つて見ましたならば、寸毫も小供と異つたことはないのでございます、されば一家の間に不調和を來すのも、君臣の間の亂るゝのも、朋友の間に爭が起るのも、皆多くは此嫉妬心に妨げらるゝのですから、互に注意する事が肝要だと思はれます、世間でもよくいふことです、子息と娘との折合のよいのを聞けば、姑の機嫌が惡い、娘と舅とのむつまじいのを見れば、子息の機嫌が惡い婿と姑とむつまじくて娘に不快を與ふる、といふやうなことは、皆嫉妬心から起るのでございます、娘と子息との仲のよいのは、まことに結構なことでございます、舅と娘とのむつまじいのも結構なことでございます、何でも一家の調和してるのは、何より結構なことでございます、然るにそれを彼是申すのは、何やら自分の愛を殺がれるやうに思ふ極々狹い

量見なのでございます、世間には、私の子息は娘を貰ひません中はなか／＼に孝行のものでございましたが、娘を貰つてから何だかすげなうなりまして困つたものでございます、など云ひふらして歩く姑がありますが、聞き惡いものでございます、

總じて女には、男よりも嫉妬心が深いやうに考へられます、女には何でも人のすることが羨ましく見ゆるのが、一つの病でございます、羨ましいといふ心は、已に嫉妬の顯はれないのでございまして、唯羨ましいだけで止ればよろしいが、なか／＼にさやうにはまゐりません、何時の間にか羨ましい／＼といふ心がつのつて來まして、遂には他人の幸福をいやがるやうになります、即ち或人は商法がいよ／＼繁昌して來て、有福になつて來たなどと聞いては、何やら自分を卑下せらるやうに思ひ、又彼の人は實に德行家だなど聞きますと、直ぐに自分の身の不德に引き較べて、不快を感ずるなど、凡て嫉妬は他人の完全をよろこばないものでございます、故に他人の

幸福や美事を聞く度に、其心を悩まして、遂にはそれを耳に入れない、人の美事は自分の口よりは人に發表すまいといふやうな小さな狹い考を持つやうになるのでございます、

嫉妬のある人は、例へて申さば空飛ぶ鳶が、靑々とした潔い所に集らないで、人の死體や、犬猫の死體や、凡て腐敗物の所に集ると同樣で、他人の美事善行を見たり聞たりして、それを模範として、幸福のものにならうとしないで、そんなことは聞かないやうにしやう、見ないやうにしやうとするのは、實に歎はしいことでございます、

のみならず嫉妬心のある人は、非常に邪推深いものでございまして、ありもせぬ事を種々に考へまして已を苦しめ、人にも迷惑をかけますことはおびたゞしいものでございます、して其邪推の爲に已を嚙み已を食ひ殺すやうな恐しい罪に陷る人が往々あります、

であるから、此やうな狹い量見は持たずして、如何なる事に遇はうが、如何なる道に踏み入らうが、心を廣く持ちて、凡ての愛といふものは自分獨で占めらるゝものと思はないで、汚らはしい、忌はしい嫉妬心などは切り捨てたいものでございます、

煤はき

愛氷散士

晝の花火

昔は天下の政道暗ければとて、晝提灯を點けて歩きし人あり、今は天下に吉事あれば、盛んに晝花火を打あぐ、晝の提灯のひねくれたるに似ず、晝の花火の稚氣を帶びたる、人のこゝろの豐かになりけるにや、幼兒ならぬ文明國の人々、ドーンと響く音とパッと立つ煙をうれしがるを見れば、何處までも解せられぬは人の心なりけり、

女學生の演藝

活人畫、お伽芝居など盛んに演じらるゝ女學校は

必ず繁昌せる女學校なり、よく學ぶものはよく遊ぶにてもあるべし、されど其藝の極めて巧妙なるを見て、其藝の出所をたづぬれば、其藝を賞讃しながらも身顫ひせらるゝなり、

又

ことしの秋は、各女學校にて、運動會は甚だ賑ひたり、されど運動會といふより、演藝會と見らるゝ方評判よく、表情に重きを置きて、寧ろ體育の上にこれはと思はるゝものさへ少からず、某女學校の自轉車競爭の如き、この上の修業は、淺草の奥山にでも行かでは叶ふまじ、かゝることの修行にも、故郷に血を絞る人のありと思へば、いと氣の毒にも感じらるゝあり、さるにても、いつも華美を極めし華族女學校の演藝的運動會の、ことしは極めて質素に、運動的運動會にてありしは、甚意外なりき、新たに學習院女學部となりし下田部長の、定めて時流に感ずる所ありてのことなるべし、

主義と算盤

原與男氏『色情と靑年』といふ書を著はし、風俗に關することは山根醫學士之を保證したり、氏は予に之を多く賣らんと欲して、諸新聞に廣告したるが就中東京朝日、東京日々の如きは、內容は兎にも角にも、色情の文字甚隱かならずとて、其廣告を拒絕せられたりと語りぬ、その著たるや、もとより廣告を拒絕するほどの物にあらねど、近時堂々たる女學雜誌の多くが、子おろし藥、その他いまはしき諸種の廣告をなし、少しも憚ることなく、世間も多く之を咎めぬ時に於て、比較的廣量なる新聞社に、この事あるは、大に人意を强うするに足る、

筆の祟

思はぬ損害を蒙ることあればこそ、災難といふ文字も生れたるなれ、ことし本誌の七月號に法廷より得たる婦人觀をものしける時、その問題の主人公なる野口倉惠子を訪問したり、その次第は、五月十六日曾惠子に書狀にて豫め面會を申入れ、六月四日初對面、種々雜話の行がゝり上、二三回訪問したるが

り

瓜田の履も人にこそよれ、兎に角婦人雜誌に執筆する身なれば、些の疑惑を受くるも迷惑なれば、いつも書生を伴ひ、午前に行くを例としたり、されど久しく交を結ぶべき人ならねば、七月十三日面會以後全く音信を絶ちたり、而して予はその當時曾惠子に、成るべく世間と隔離して、嗜好の文藝を樂み陰德を積み、他日の幸福を招かるべしと語りし事もあり、されど遂に其人にあらざることを信じたりき然るに人の噂もといふ七十五日以上も經過せし、十月十日の國民新聞に、予が夜間婦人のみの野口家を訪ひ、而して乞得たる筆蹟を以て艶福を誇る等、その他跡かたもなきことを、いかにも醜意味ありげに長々しく記述したり、予はあまりに馬鹿々々しく感じ、予の心事は知る人ぞ知らんと打捨おきしが、後にて聞けば其執筆者は故寧齋氏の門人藤波樂齋氏なりと、然らば本誌の七月號を見てその餘憤を漏らされしはまた無理のなきことなり、されどその七月號を見し人は、予が對曾惠子の感想も明白なるべく、然も樂齋氏は、後予に向ひて、其の誤解を語られたれば、今更その事を云々するにも當らねど、國民新聞の記事を是認するものと思ふ人のあらんもしれず且はことしの煤の大なるものなれば、そを掃はんとて、

錢湯の改良

錢湯に身體を蝦の如く茹でゝ喜ぶ人あり、女湯にもそれがありて、殊の外幅を利かし、これがお熱くば水槽にお這入りあれなどいふ、然るに多くは氣の弱き女性とて、岡湯をのみ使ひて歸るものあり、錢湯に於ける一弊風と見るべかりしが、遠からず警視廳令にて、温度を制限せらるゝよし、序に女湯に三助の裸體にて徘徊するを禁ぜられたきものなり、さるをその三助に脊を流させる如きは以ての外にて、禮儀をしらぬ卑しき振舞見え、あさましともあさまし、

大樹の蔭

すべて物を回數多く買求むる時に、圖書館の入場

劵の如きすら、それ〳〵價格に割引あり、而して世界廣けれども、それのなきものたゞ一つあり、即ち東京電車の回數乘車劵にて、たとひ五十回を買求むるも一厘の割引さへなし、電車の値上に石を投げたる人も、これには寛大なりと見ゆ、さるにても政府が通行税を回數乘車劵に割引せる破格なる、おもしろき取合せならずや、

家庭の支那婦人

支那人の家庭に入りまして、仔細に女子の地位を觀まするど、中々女子は勢力を有て居ります、併しそれは男子が女子を尊敬するといふのでなく、何となく女子を恐れるといふ樣な風も見えるのです、家の主人が妻なる人の室に參るにも、決して突然に來る樣な事は致しません、先づ使をよこしまして奥樣の許をうけそれからでなければ入りは致しません、私など參て居る時に、よく其樣な塲合に出會しますが、今お客があるから不可ませんと使の者に申しますと、主人は決して出ては參りません、それから清國では一家の内に於いて老人よりも主人よりも、一番勢力を有て居るのは處女であります、私は下層の方は餘り知りませんが中以上の家庭に於て、其娘を大切にする事は實に非常なもので、父も母も祖父母に至るまで、親子の愛情といふよりも以上に大事にして可愛がりますから、私は段々それに就て研究もし聞き合せて見ました處が娘は我子とは云へ他日成長の後は他家に嫁入り、他家の姓を冐すものである、即ち外姓の人である、如何なる方に嫁入ていかなる、身分になるか分らぬ、或は其娘の爲に一家一門の榮達を見るかも知れぬ、といふ樣な處から大切に守りたてればならぬものと考へて居るのださうでありまして、左樣いふ考へを持つといふのも清國では三品（位）以上の人は宮中に出入することが出來ますので、今の西太后も、たしか三品の人のお娘御であつたさうですから、或は支那人としての主義からさういふ風に娘を敬愛する樣になつたのではなからうかと思はれます、私共が清國の婦人を招待しました塲合に、皇族方の妃殿下でも、若し高位の人のお孃樣方と御一緒である時には、當方ではたとへ妃殿下を上座にお請じ申上げましても、妃殿下は臣下と申してもよい人の令孃であるに拘はらず、先づ其處女の人を上座にと仰せられまして御自身は其下の席にお着きになるといふ有樣で御座いまして、令孃の勢力と申すものは實に大變なものであります。

皇族方でいらしつても此通りですから、其令孃の伯母樣とか申す樣な長上の人ですら、いつも令孃を上座において、令孃はツンと澄して居て、伯母さんの方からいろ〳〵御機嫌を取つて行くといふ有樣で御座いますそれですから御招待など致しました時は此席順を定めます事が非常に難かしう御座いまして、私共にはとても出來ませんので、何時も左樣な時は然るべき方にお願ひをして私は構はぬ樣にして居るので御座います。

新刊紹介

新女訓

下田次郎著
明治書院發行

著者曰く、本書は我國今日の婦人に、時代相當の要求を提示して、其の實行を促がさんとするものなり、有體の所支那朝鮮あたりの婦人に、本書はなほ適用せず、我國にても十數年前までは同樣にて、舊女訓が丁度頃合なりしなり、されど今の日本は、昔の日本にあらず殊に三年此方は、日本あつての進み方にて、婦人の考へ働きも、到底これまでにては滿足出來ず、新女訓の出づるも畢竟これが爲なりと、思切つた中條なれど成る程其通りなり、本書は女子の修養、戰後の教訓、女子の教育の三章に分ち、縦横自在の快筆を揮つて、多方面に女子を教訓せり、殊に女子も一度はヒマラヤ山に登る位の勇氣は欲しきものなりと語られし氏ほどありて、健康といふことには極めて骨を折りて書きたるが如し、文章の見本とゝもに、その一二節を左に抄録すべし、

婦人の手柄には様々ある中にも、丈夫なよき子を多く生む事は手柄中の手柄なり、されど胡瓜の蔓に南瓜はならず、弱い母に強い子の出來たること昔より聞及ばず、即ち他日母たるものは、身體を健康にし、丈夫して、天晴斯んな子を生みましたと、人前にも誇られ羨まるゝやうの子を持つべし、婦人の飾は帶にあらず、着物にあらず、立派なる子を連れたるにあり、

健康なる長生を授かる法は、仙薬を飲むにあらず、第一氣分を快活にもちて、衣食住を始め、萬事に節制、克巳、秩序、清潔を押し通すにあり、一生の食量には定まりあり、多食すれば命短かしの諺あり、味ふべきなり、仙人を學んて霞は吸はずとも、新鮮なる空氣は必ず吸ふべし、身體は垢つける錦繍よりも、清潔なる綿服を喜ぶ、廣からずとも日當りのよき所に生活し、常に運動を怠る可らず、英國の詩人ウォースウォースは、毎日散歩するを例とし、從つて身體健康にして、常に余は天氣と相談せしことなし、故に醫師と相談せしことなし、と言ひ居たりと、

製本頗る美にして定價八十錢也、

短刀英雄

米光關月著
成功雜誌社發行

近時漸く浮華に名を文士に借りて俳優となり、臆面もなく顔に白粉を塗る事を人も興がる時に於て、此種の如き骨のある著述も亦大に必要あるなり、本書は一青年一振の短刀と少許の金を懐にして家を出で、海上に種々の困苦を經、遂に所持の短刀にて南洋群島に勇武を揮ひ、一酋長の女婿となりて、大貿易業に從事する快男子の一生を敍したるものなり、定價金三十五錢、

心の華

第十卷第十一號
竹柏園發行

本號は通卷第百號に相當するを以て、竹柏園三階總出の滿卷飾にて、紙面大に賑はし、

同誌は文藝雜誌として些の俗臭なく、また弱氣なく、飽くまでも心の華を筆の上に匂はせんとすが如し、定價一册金拾貳錢、

續旋頭歌評釋
神谷保朗著
明治書院發行

旋頭歌といへば、いかなるものにや、其文字の數さへ知らぬもの多き中に、萬學の著者は、記紀又は勅撰集に載せたる旋頭歌を集め、そを注解したるものなり、謎の如き歌をよろこぶ靑年讀書界に、定めて賣行あしからるべきを、そを知らぬ顔に出版する發行所もエラキものなり、定價四十錢、和裝瀟洒なる本也、

色情と靑年
原眞男著
衞生新誌社發行

題目實る方より云へばよかるべし、色情の二文字まづ靑年に虫の毒也、されどその内容に至つては、山根正次氏の序を左劵として、其一節を錄し、本社の評に代ふ、

人の已に長ずるや、各愛友の情を生ず、而も之を理する事機を得ざれば、家を破り身を喪ひ、救ふべからざるの禍に逢ふを免れず、戒めざるべけんや、原君斯道に於て造詣頗る深し、近著一篇を以て余に示さる、之を閲するに、人生化育の危機を解釋して、用意甚だ密なり、意ふに能く本書を讀み、以て造化の妙機を會晤し、而して其身體化育の原由を了解し、勉むべきを勉め戒むべきを警め、反覆せば、其身世の幸福を完ふするを得るのみにあらずして、亦邦家の慶福たるを信ず、云々、定價五十錢、

コブシ
小杉天外著
春光閣發行

氏が得意の諧謔の筆に成れる寫實小說にして、その標題の奇なる如く、行文にも亦一機軸を出せり、著者自らもこれ迄になき苦心の作なりといふ、さもあるべし、その筋書をこゝに記すること能はざるも、其製本の美にして、挿畫に意匠に凝らしたる如き他に比類あるまじ岡田三郎助氏の鍛冶屋、證文燒、窓の顔、ピヤノ、小林鐘吉氏の水浴、雨の音、新聞賣、掲示場、中澤弘光氏の餐辭、腦貧血、心臓鼓動、既以上十二圖、皆モデルを造りて寫生し、一々版權登錄をなしたるものゝ由、畫本として見るもよし、定價八十錢、

婦人坐右銘
博學堂編輯部編纂
同發行

部門を本分、敎育、貞操、風采、交際、言語、衞生、食物、運動、早起、勤勉、忍耐、愼獨、宗敎、修養、文藝、結婚、嫉妬、從順、舅姑、家計、家庭、育兒、奴婢の廿四に分ち、内外諸名家の婦人の敎訓となるべき談片を集めたる小册子なり、定價十五錢、

現世界鐵腕王 獨逸皇帝
成切雜誌社譯
同發行

本書は佛國の人アンリー、ヅ、ヌーサンヌ氏の著せる赤裸々のウイルヒルム二世を譯したるものして、獨逸皇帝の思想、生活、政策、容貌、風采、殆んど有らゆる特色を、表裏兩面より描寫し批評したるものなり、定價四十五錢、

舊山河
大倉桃郎著
金尾文淵堂發行

齋藤松洲畫伯の筆に成れる表紙の意匠、先づ書架を飾るに足る、著者は日露戰爭十有數度の戰鬪に武勳を樹てし勇士にして、この小說亦文士の作として再讀の價値あり、定價六十錢、

誌友倶樂部

◎いかなるものでも　貴誌友倶樂部には、如何なるものを投書してもよろしく候や、伺うかゞひ申ます（淺草田町太田やす子）

◎右答　來る十七年第一號より別項記載の如く、從來の誌友倶樂部と詞議欄を一つにして誌友欄を設き、差支なきものは物の何たるを問はず掲載します（誌友掛）

◎禮式を學ぶ時間　女子の禮式を學びますには、何程位かゝりますか（麹町井上節子）

◎英語獨習　自宅にて英語を獨習するには、如何にするが一番よろしく候や、何さま片田舍にてよき教師なく困り入ます、御教示下され度候（越前鯖江岩田しづ子）

◎古い歌人　女鑑にとき〴〵御名前を拝見する河合象子と仰せらるゝ方は、十餘年も前から雜誌に御名前を出して居らるゝお方のやうに覺え居り候、いかゞに候や（下谷HR女史）

◎各地の女子風俗　女鑑誌友倶樂部に、時々各地の女子風俗をお集め成されてはいかゞでございます（下總香西やす子）

師走十題



其の十　落葉掻

◎其答　本誌も大に望む所です、まづ貴孃からお始め下さい（誌友掛）

◎婦人の作家　現今婦人の小說家で、何といふ方がお上手ですか、又私どもが讀んでよい小說をお書き成さる婦人の作家の名を承りたく候（信州上田喜多川つる子）

◎右答　只今の所、これと申上げる人もこれなく候（社の一人）

◎足のはれ　私は冬になると、足が痒くなり、かけばカサブタが出來、それをとれば血が流るゝと可申有樣にて、誠に困つて居ります、何かよき療法はありませんか（麻布遠藤よれ子）

◎本欄は大に擴張す、續々投書あれ（誌友掛）

本誌の發展

來明治四十年一月發刊の第十七年第一號より、紙面に大刷新を行ひ、まづ欄を左の如くす、

▽論說　專ら婦人に關するあらゆる問題を捉へ諸名家の新說と本社の主張を發表掲載す、

▽家事　一家の煙りの濃淡は臺所より起る、家事整理の如何によつて、其家の盛衰はトせらる、なり、本欄は特に意を用ひ、家事實驗談、衛生育兒其他家事諸科目に就て、心得べき各新案を紹介すべし、

▽文藝　從來の小說、美術の二を本欄に收め文學美術上に高作卓說を掲ぐ、

▽社會　東西に亘り、社會の事件、職業等に就て、其表裏の觀察をなし、あらゆる社會を誌面に現出せしむ、

▽雜錄　即ち雜錄なり、風紀に關せざる限り成るべく、娛樂のうちに實益を得べき、諸名家の科學談の隨筆漫錄等を掲載す、

▽誌友　本欄は誌友諸君の一壇上として、從來詞藻欄として掲載したるもの丶外、この欄にて優に一雜誌の觀を呈すべく、前掲の欄に記する如き諸般の投書を歡迎す、

以上記する所、唯從來の欄數を減じたるのみにて何等刷新の點なきが如し、されど家事は家庭を併せ文藝は小說美術とを合せ、一は家事問題に就て、實驗實說を掲げ、一は文藝を百花爛熳たる如きものとし單に文學雜誌として、理窟のみ多かりしを、以來平易にて云へば、面白くして利益になるといふ主義を執りたれば自ら內容も亦一新すべし、

さて初刷には

◎西園寺侯、牧野文相の女子教育に關する卓說を掲ぐ、いづれも兩氏が女子問題に就てはじめて發表するものなりとの事なり、

◎松平直亮伯、柳原義光伯、秋元興朝子、本莊宗義子　其他諸名家の家庭に關する名説、岡田醫學博士、山根、久保の兩學士、及小笠原伯の衛生、育兒、家庭禮式、及家事に經驗を積みたる某々夫人の家事實驗談を掲載すべし、

◎名家の新年　めづらしき新年の儀式を、公、侯、伯、子、男の五爵家中、一家づゝを紹介すべし

◎文藝欄　は芳賀、萩野、末松、井上、三浦の諸博士、佐々木信綱、大和田建樹、石榑千亦、大塚楠緒子、小山内千代子、齋藤松洲、梶田半古、寺崎廣業、其他諸氏の筆を談によつて大に振ふべし

◎雜錄欄　長橋、深井、伊藤、山本の諸學士、石川殘月、山田枯柳、橘絲子女史其他の諸氏が絢爛なる筆にて賑ひ、又一月の紙上より

◎訪外日記　を掲くべし、この日記は愛氷散士が毎日諸名家を訪問して得たる感想を記せるものにして、一年を通讀せば、ほゞ東京に於ける諸大家の面影を偲ぶを得べし、而して初刷には、本年の十一月十六日より十二月十六日迄の分を載せ、以下順次一月づゝ採錄するなり、

右の外三輪田眞佐子、下田歌子、棚橋絢子、小川直子、中山幸子、阿部僾子、嘉悦孝子、諸女史の文を掲載すべし、

◎口繪　は北白川宮大妃殿下の特に本誌に賜はりたる御筆蹟を始め、德川男爵、井伊子爵世嗣が意匠せられたる寫眞、其他十數葉、いづれも本社の獨得のものゝみを掲ぐ、

◎體裁　も多少從來のとは趣を異にし、殊に初刷には一工夫をなすべし、

◎投稿者の注意　誌友諸君の投書中、卷紙へ長く又は短冊三つも續きたらんやうなる紙に歌など書きて投せらるゝあり、成べく用紙は半紙大に願ひたし

◎臨時增刊　去る二十日發行すべかりし本誌の臨時增刊は、都合により來春に延期することゝなりたり

學校

女子と運動

男爵　細川潤次郎

運動の利益は、人の身體を健康にし、人の精神を健康にし、人をして長壽無病ならしむる者なり、分て之を言へば、筋肉系統に關する利益あり、血行器に關する利益あり、呼吸器に關する利益あり、皮膚に關する利益あり、消化器に關する利益あり、神經系統に關する利益あり、筋肉系統を運動するときは温暖を覺え且つ少く其大さを増すが如し、血行器を運動する時は、心臟血管共に其作用の數を増すが如し、呼吸器を運動するときは肺臟大に其力を増すドクトル、エドワード、スミス氏の言に依れば平臥の時吸入せる空氣の分量を一とせば、坐するときは一、一八起立の時は一、三三又一時間一英里の割合にて歩行するときは一、九、又一時間四英里の割合にて歩行するときは、五、五又六英里の割合なれば七とす、通常人は一分時間に呼吸する度數は、凡そ十九乃至二十二にして其の吸入毎に空氣の分量凡そ十六乃至二十立方「インチ」を容るゝを以て一分時間には四百立方「インチ」を容るゝ者なり、若し一時間四英里の割合にて歩行するときは、一分時間に二千立方「インチ」の空氣を容れ、六英里の割合なるときは、二千八百立方「インチ」を吸入すべし、此の如く多量の空氣を吸入するに由り酸素の多量を吸入し炭酸の多量を呼出し肺臟の全體を活動せしむ、又皮膚に關する効果を言へば、皮膚は身體の外被にして排泄機關の一なり、皮膚健全なるときは排泄すべき者を排泄し、且寒熱の過不及を均一にし、以て身體を保護す、吾人の健否は皮膚作用の十分なると否とに關すること少からず、運動は、皮膚の血液循環並に發汗を増す者なり、又消化器に於ける効果を言

ふときは左の如し、パークス氏曰く體操をなすときは、大に食欲を増し、殊に肉類及び脂肪類を欲する者なり、即ち消化は愈充分となり、吸收も愈迅速となり、肝臓中及腹部の血液亦其勢を増すを以て、食物を増加せざるべからず、戸外に於て之をなすときは効驗殊に著し、不消化病の爲めには、最良醫藥なりと、此は體操を論ずる者なれども、體操も運動の一部なれば、其効驗は同一なるべし、終には神經系統に於ける効果なり、運動不足なるときは、神經系統他の系統を壓制して神經質を呈し、其人の生涯をして、悲歎多く不幸ならしむ、適宜に運動するときは他の系統と平均して、無形の精神亦榮養せらるゝことを得べし、譬へば頭痛の精神過勞より來る者は、運動に出て血液の循環を補助し痛苦を療すことを得不消化より來る者は運動に由て消化を助け、便泌より來る者は、運動に出て腸の運動を助くるときは、便泌を治し、併せて頭痛を治することを得るが如し、此神經系統に關する利益は、男女両性に通ずる者なりと雖も、中に就て女子は神經過敏なる者なる上、上等社會の婦人に在ては、殊に神經病を患ふこと少からず、適宜の運動により、神經の過敏なるを避けざるべからず、神經の少しく鈍きは、即神經の健康なる者なればなり、

醫學博士クラド氏の說に、婦女子に高等なる教育を與ふるは、喜ばしからざる生理的影響を及ぼして、或は子孫の體質を薄弱ならしめ、或は其数を減ぜしむるが如きもの往々にしてありとあり、然るに米國の各女子大學にては、體育に重きを措き、出來得る限り、身體の健康に注意したる爲、遂には高等教育を授かりたる女子は、授からざる女子よりも、遙かに其體格よく、又その入學前後と卒業とを比較し、卒業後の方遙かに、健康を増加せり、されば體育は重んぜざる可からず(成瀬女子大學長談片)

女教師論

女子は男子よりも同情に富み、且つ容易に小兒の心を了解し得る自然の性能を有するものなれば、小學教師としては、男子よりも寧ろ女子の方優れる筈なりとは、英國に於ても、米國に於ても、一般に信ぜらるゝ所にして、事實女教師の數は、非常に多く、成績も亦其期待に背かざるものあり、然れども米國の如き、女教師の極端に發達し、非常の割合を以て、其數を増加したる地には、弊害も亦これに伴うて起りたるが如く、論者中には婦人は思考力、洞察力、創意力等大切の性能に於て缺くる所多く、決して教育者として適當のものにあらずとなし、絶對に女子を非認して、只管男教師の減少を嘆じ、有爲の青年の教育界に來り投ぜざるを慨するものあり、又全く女教師に依て教育せられたるものゝ智識に疑を挾むものあり、微細の點に至つては、女教師の教育を受けたるものは、事物を感情的に觀察するの弊に陷る傾向ありとの説をなすものあり、又或は男生徒の氣力を薄弱ならしむるを以て、女教師の優勢に期するものあり、中には又精神上男女何れにもあらざる中性的兒童を生ぜしむるは、女子が男子を教育するためなりと罵るものありて、論難はてしもなけれど、畢竟結果に就ての非難にして、事實斯くの如きの痕あるは、何人も拒む能はざる所なり、而も米國小學校の女教師は、男教師の一に對し、十三の割合を保ち居る次第なるが、斯く女教師の多き所以は、前記の如く女子は小學教師として、男子よりも適任なりと認めらるゝが爲に非ずして、比較的少額の俸給にて、良教師を雇ひ得べきを以てなり、乃ち第三流の男子を雇ひ得べき俸給にて、第一流の女子を雇ひ得べきより、斯く多くの女子を採用するに至りたりとは、嘗て英人モズリ氏の派遣したる教育視察委員に向つて、米國教育家の答へたるところにして、米國に於ては他の原因よりも先づ經濟上の理由より多くの女子を、小學教師に任ずることゝなり居れり、而もこれがため何程の利益あるや、吾輩之を聞知するなしと雖も、假りに我邦に於て教育上の利害に頓着せず、たゞ經濟上の理由より、尋常高等の正教員を一切女子に改むることとせんか、現在男女兩教師の俸給相違は、高等にて平均六圓二十四錢、尋常にて同二圓六十二錢即ち四割三分弱と、二割一分強の節約を見るべく、三十六年末の調査に依れば、高等科の男教師一萬六千六百四十三人、尋常の男教師三萬九千六百八十一人につき、前記の割合を以て計算する時は、一ヶ年僅に二百四十萬圓程の利益を見る譯なり、其他本科正教員以外の教員をも、悉く女子を採用するとせば、これ又些少の額にあらず、旁々町村の負擔を減ずる金額は實に容易ならぬものあるべし、而もこれ極端の例にして、素より實行を難ずべしと雖も、之れを折衷して小學教師を男女同數位に置くに於ては、教育上發したる弊害なくして、經濟上大なる利益あるべし、但し利益は之に止まらず、我國の如く職業少なき國柄に取ては、小學教員の如きは女子の高等職業として、最も適當のものなるべきにつき、各府縣に於ても能く其利害を研究して、果して良しと決せば、女教師の養成は今一段擴張して然るべきにあらずや、（大阪毎日）

女子教育に就て

石川喜三郎

凡て教育といふことは、如何なる人物を養成して如何なる事業に當らしむべきかといふ問題を決したる後でなければ、學科の種類や程度などを決定することは出來ぬ、勿論昔時の教育家の眼中には、成業の後に如何なる種類の事業に當らしむべきかなどいふ樣な綿密な方針などは、更に無かつた、士農工商を押しなべて、同一の書籍で、同一の方針で、孔孟の典經に依據せる學者の講釋でそれで教育が成功すると思つと思つたのである、故に社會にいろ／＼な變つた人物の出でたのは、それは教育上の特別な成功でなくッて、寧ろ偶然な現象である、然し今日のやうな社會では、その樣な教育はとても行はれぬ、或る年限までの普通教育は勿論必要であるが、早晩この普通教育の年限が短縮せられて、各方面に種々な專門教育が起るに相違ない、これは見易い道理で社會が幼稚なる時は、仕事が單純であるから、何の方面にも普通教育で間に合ふけれども、社會が複雜になッて來て、凡ての仕事が皆專門の智識を要するやうになると、普通教育の年限が縮つて、專門教育の道が開けなければならぬ、都會の小學校と山村もしくは漁村の小學校が多年、その教育の學科と方針とを異にせんければならぬといふのは、畢竟如上の道理に基くので、普通教育の上にも、常に多少專門の傾向が必要なことを示すのである、

然るに女子教育の方針に關しては、この目的が甚だ不明瞭で、女子に諸工藝を授くる學校を除いてはこの目的が少しも明かでない、成業後いかなる社會にいかなる技量を以て立たしむべきであるか、殆ど目的が定つて居らない、

それで、女子教育家は何れも、此の目的を立つることが出來ないから、大概は女子の普通教育といふことを一定の方針にして、何處の女學校でも、單に女子に必要ならんと思はるゝ一般の學科を教授する

を以て目的として居る、これは女子が成業後どんな社會に立つても、何處でも用が足せるやうな才能を養ふといふのであるから、隨分困難な仕事である、

一般の女子敎育をして此に至らしむるのは、こは女子には獨立の生活がない、女子には獨立した社會がないといふ、見解から生ずる結果である、然し、女子將來の生活がその夫の生活によりて常に變動を被むり、その夫の立つて居る社會が變ずる每に妻の一身を處する社會と變ずるから、女子敎育の方針を確定することが出來ぬ、一般に普通敎育を授くるより外に仕方がないといふのは、全くの謬見である、この事は少し逆つて、その根本から論じねばわからぬ、

先づ、夫たる者の業務と云ふ事から吟味せねばわからぬ、今日の社會の人が一身を處するに自分の一身が何處にでも用ゐらるゝやうに、敎育仕おげるといふ事が、全くの謬見である、その人物、何んな社會にでも用ゐらるゝやうでは、それは大豪傑に非ずんば、大愚物である、君子は器ならずで、非凡な人物ならば、無論いかなる社會に立つても、何事でも出來るに相違ない、然しそのやうな人物は稀有であるから、其を議論の標準にする事は出來ぬ、又、一藝もしくは一能に特に秀でゝ居るといふやうな技倆のない人物なら、車夫にならうと運搬夫にならうと、又は土方にならうと、凡そ勞働をなすの業務なら何處にも適用が出來るに相違ない、然し、そのやうな人物を造るのは勿論敎育の目的ではあるまい、斯くの如く論ずると先づ敎育の目的といふもの（特に中等以上の敎育）は、必ずその人物の將來一身を處する社會を目的とせんければならぬ、そして一定の方針に從つて一定の敎育を受けた者は、自己の立つ可き社會が既に定つて居るといふ事が明かである即ち下等社會の人物には、專門の敎育がないから、一身を所する定つた社會がないけれども、中等以上の人物は（尠なくも將來に於て）必ず一定の專門敎育を受けて居るから、大底その社會が定つて居ると

言はなければならぬ、
斯のやうに、文明社會の中流以上の男子の境遇といふものは、既にその專門の教育の方針で定まるとすれば、斯の如きの人物の妻女たる可きもの丶將來の境遇も、やはり教育を受くるの當時から大抵定まらなければならぬ、無論、女子をして將來の夫たる可きもの丶、職業如何によりて其教育の細かき點までも異ならしむるといふ事は出來ぬ、然し大抵の教育の方針を立つる事は、決して困難でない、即ち甲の女學校は、將來商家の妻女たる可き婦人を養ふを以て方針とするとか、又は社會の政治法律などの運用を以て目的とする生活の一家に處する婦人を養ふといふ如き大體の方針を立る事は決して困難でない今日まで、その樣な明了な方針を立てないで來た習慣があるから、一寸困難のやうに思はる、けれどもそれは只習慣である、若し、幕府時代に工業學校や商業學校を始めると云つたら、當時の儒者は必ず不服を言つたに相違ない、今日も商業上に多少の智識ある女子を養ふ女學校を設くるとか、又は特に政治もしくば法律などの方面に少しにても專門の智識を養ふ婦人を養ふ學校を設くるといはゞ、必ず反對者があるに相違ない、然しそれは活社會の活問題を解決する事の出來ぬ、頑固腦髓の見解で少しも意とするに足らない、

元來、夫婦の者が共に身を社會に處するには、萬事が一身の如くに調和せんければならぬものである然るに、今日の社會は、夫婦は何時も跛足で、妻と夫の教育が一致せないから、その人と成りから凡てが一致しない、それで、妻の本分は內助と通り相場がきまつて、內助より外は少しも役に立たぬ、否或る場合には妻の教育が却て夫の事業をする防害になつて居る事さへもある、これは、夫婦相互にとりて實に情けない事で、夫は自己の事業經營等につきて妻と謀議する事が出來ぬといふのは夫たるもの丶身に取りても甚だ遺憾であらう、又重なる事となると女の容喙する事でないとけなされて、口を開く事が

出來ぬのは女子に取りても殘念であらう、これ皆妻と夫が、一致しない敎育を受け、妻は夫の事業や仕事に關しては、少しも專門の智識を有して居らない缺點から生ずる結果である、

若し、夫婦ともに同一なるか、もしくは相類似したる方面の敎育を受けて居つて、互に意氣相投ずる仕事や事業をして居つたならば、今までの仕事を廢して別の仕事に着手すると言ッても　夫は妻の意見を度外視して、自分勝手の仕事に移ると云ふやうな事がなく、その仕事には妻も贊成し、又妻も多少助力する事が出來るやうな仕事に移れるに相違ない、然し、今日の女子敎育は即ち内助主義の一方であるから、婦人が一度人の妻になつたら最後、自己の運命は夫の手一ッにて、夫は馬方か牛方のやうに、妻を牛馬同樣に、何處にでも勝手な所に引いて往くといふ有樣である、されど吾人の主張は、醫者の妻は醫學を研究した者に限るとか、辯護士の妻は法律を研究した者に限るといふやうな、狹い事を云々するのではない、女子敎育の方針をそのやうに狹く限ることは勿論出來ぬ、然し、大體の方針を定むる事は確に出來る、社會に福澤先生主義の學校があれば、この學校出身の人の働く場所は大概定つて居る、又早稻田の學校出身者もそれ〴〵働ける方面が大概定つて居る、このやうに女子敎育も、女子が將來一身を處する大概のところを豫想して、其方面に適するやうに敎育するといふ事は少しも困難でない、

假令ば、東京府内に三ヶ所の高等女學校を設立すると假定して、この三ヶ所の女學校を何れも皆一樣な科目で一樣な方針で、同じ種類の卒業者を得るのを目的とするなどゝいふ事は全く愚な識見である、然し社會では皆この樣な死したる模型を杓子定規にして、同じ主義同じ方針の學校を設くるのが、國家の最良の敎育方針の樣に思つて居る、同じ樣な人物ばかりを澤山造り出して、變つた人物を出さないのは社會の枯死する原因である、三ヶ所でも四ヶ所でも女學校を設くるなら、皆變つた方針を取つた、變

つた方面に向く卒業者を出すのが何より大切である、女子の智識の一様なのは、女子の智識の不完全の證據で、十人寄れば十人ながら、皆多少異なつた智識を持つて居るといふ樣にならなければ、女子教育が進歩したとは言へない、

今、雇人を雇ふにさへも、其雇人の教育の有無を調べるばかりでは滿足しないで、その雇人が如何なる方面に適する教育を受けたかを調べる、然るに今日世人は妻を娶るに、教育の有無は調べるけれども如何なる方面の教育を受けたかといふ事を調べる者はない、又實際、調べても無駄で、女子教育は程度にこそ差があれ、その性質は大概一樣である、故に男子の眼中には、始めから自分の妻を友人となし協議者となし、自己の仕事や事業を經營しやうといふ事がないのである、自己の仕事や事業によりては、妻と云ふ者は雇人よりも當てにせられてないのである、これ皆今日の女子教育が單調一樣で、女子は一家の衣食の内助さへすれば足れりとする偏狹な主義の結果である、今日の女子教育の急務は、成るだけ學校の主義方針を多樣にして、社會の各方面に各々相異なつた才能を有する女子を出す事である、

中等教員合格者

去る五六兩日文部省に於て施行したる、師範學校中學校高等女學校博物科（植物）の受驗者五十四名の内、合格者二十四名の氏名左の如し、但し△印あるものは女子師範學校、及び高等女學校の教員資格者なり、

長崎縣　飯森孫磨
△三重縣　西脇定
岡山縣　小川茂三郎
徳嶋縣　巽洋三
△岡山縣　中村久太郎
和歌山縣　山路金之助
京都府　藤原官次郎
愛知縣　小林玉幸
長野縣　宮本邦基
宮崎縣　平嶋柳一
三重縣　一見清
岐阜縣　加藤長之助
△靜岡縣　袴出譲平
△福井縣　奥村まつ
岐阜縣　小川銓一
岡山縣　難波繁藏
長野縣　久保田運右衛門
愛媛縣　山本一
福嶋縣　古旗安藏
佐賀縣　相良安太郎
新潟縣　神保源五郎
石川縣　平賀金太郎
茨城縣　鈴木靖
長崎縣　高井良精一郎

軍人未亡人と女學校

近年女子に技藝を授くる各學校に、若き軍人の未亡人の入學するもの、著しく增加したるは、誠に悅ばしき現象にして、一方に女學生墮落の聲熾んなる今日、大に特筆すべき美事なりと信ず、

◎シンガーミシン裁縫女學院　最近麹町有樂町に開れたる同學院は、秦文學士夫妻の管する所にて、ミシン裁縫を專門に教授するものなれば、學校臭きを厭ふ婦人にも、一番學び易く、且つ最も實用的なれば、未亡人の通學せるもの、昨今五六十名の多きに上り、中には既に卒業して一人前の腕前となり、立派に暮向を立て居る者五六名あり、其内には日清役に名譽の戰死を遂げたる海軍大佐の未亡人、又天晴勇名を轟したる旅順閉塞隊の某海軍少佐の未亡人もあり、此二人は共に地位も高く、恩給も豊かにて、何不自由なき身の上ながら、無爲に過すは亡夫の位牌に相濟すとて、昨今セッセと稼ぎつゝあるより、海軍士官の奥さん達も、其堅固なる志に感じて、夫の襯衣、子供の洋服など、仕立方を賴むもの引も切らざるより、未亡人は元より同僚の妻君連も、急に遊ぶのが惜くなり、銘々造花、刺繡など手奇麗なる内職を求むる者次第に增加し、中には五六名位づゝ集りて、同院より教師の出張を乞ひ、稽古中の向もありとぞ、

◎共立職業學校　一つ橋外の同校にも、未亡人と名乘つて入學せしは、士官夫人一名、下士官夫人三名なるも、尙他にそれと見受けらる婦人七八名あり、何れも裁縫、造花、刺繡等の手藝を學びつゝあるが、槪して品位好く、仕事も着實なれば、目立ちて上達の方なりと、又下士官の未亡人にて、態々四國より上京して、寄宿舍にある人もありと、

◎女子美術學校　本鄕弓町の同校にも確かに廿五六名は在學の樣子にて、殊に裁縫專科の方は、誰れでも入り易きだけ、落飾の未亡人さへ數名ありて、浮た調子の式部連に立交りつゝも、肅然として學びに耽り居るより、自然成績も良好にて、品性も高く、學校の方でも級長に撰んで、模範生徒として待遇しつゝありと、

◎和洋裁縫學校　九段中坂上の同校にては、生徒の七八百もありて、年長けたるも尠なからざれば、未亡人の通校せるも多けれど、今回の戰役にて良人を失ひしは五六名なるが、其中にて彼の玄海灘に恨を吞んで、軍旗と共に海の藻屑となりし後備近衞步兵聯隊附の藤原少尉の未亡人千鶴子といふは、此程優等にて卒業し、直ちに群馬縣富岡の女學校教員に聘せられしと、

◎東京裁縫學校　本鄕東竹町の同校にも、十五六名は通學せるが中にも、某士官の未亡人は師範科に入り、將來は學校教員たらん目的にて、寄宿舍に存りと、又數日前より佐賀縣士族にて、亡夫は陸軍少佐、從五位の肩書ある留守かよ子といふが普通科に入りて、年若き娘達と枕を並べて勉强中なりと、

其他幾多の學校に就て逐一調査すれば、數限もなき事なるが、學校の方にても斯る地位あり、教育あり、信念固き婦人の入學は、一般學生の風紀匡正の上至大の巧果ありとて、特に此の種の入學者を歡迎しつゝあと、

文部省と教員養成

澤柳次官の語る所に曰く、次期議會に提出せらるべき議案の外、目下文部省に於て問題となりつゝあるは、師範校舍の改正、女子高等師範の増立、臨時教員養成所及び視學機關の擴張にして、師範學校令の改正と、視學機關の擴張は、今に始まりし問題にあらで、何人も大體に於て異論なかるべく、又女子中等教員の不足は、明かなる事實なれば、女子高等師範の増設の今日の急務なるは謂ふ迄もなし、而して中等教員の養成に就ては、獨逸の如く大學卒業、若しくは相當學力ある者を、二年制度の高等師範に入學せしめ、一年は教育學一年は實地練習をなさしめば申分なきも、何分財政上之が實行は六ケ敷かるべく、假令財政上之を許する、肝心の人間が不足なる爲め、今日の塲合如何ともする能はず、現に全國五千人の中等教員中、二千人は無資格者と云ふ有樣なれば、先づドシ／＼中等教員を養成し、第一着に無資格者を採用せざることゝし、次に檢定試驗を廢して、正式の師範教育を受けたる者のみとなし、最後に獨逸の制度などを參酌し、高等師範の程度を高むるは、至當の順序なるべし云々、

◎府下の私立學校　東京府最近の調査に依れば、府下に於て小學校以上の學術を講習し居れる、私立學校數は專門學校三〇、中學校二六、高等女學校四、甲種實業學校八、計六十八校にして、内、徴兵猶豫の特典を有する學校は、總て五十校なり、而して市内十五區幷に郡部に散在せる中等程度の各種男女學校數は左の如し、

麴町	二三	神田	六一	日本橋	七
京橋	一八	芝	一九	麻布	九
赤阪	二	四谷	四	牛込	一七
小石川	一六	本郷	一七	下谷	一四
淺草	六	本所	三	深川	三
荏原	四	豐多摩	一	北豐島	五
西多摩	二	南多摩	七	北多摩	二

總計二四九校にして、此中清國留學生のみを教養し

居れる學校數十五校ありといへり、

盲啞教育熱心の女教師

今回盲啞大會に臨席すべく、地方より上京して、目下盲啞學校の寄宿舍に止宿せる、盲啞教育熱心の女教師あり、即ち島根縣松江市私立盲啞學校長福田よしゆ子(三十五)とて、舊松江藩士福田清七と云へる人の次女なり、十八歲にして女學校を卒業し、其後同縣下八束郡本庄尋常高等小學校訓導として、兒童教育に從事すること九箇年、當時令兄なる松江育兒院長福田平治氏は、其收容せる孤兒中に、盲兒或は啞兒あれど、未だ是が教育に關する設備なきより、女史の兒童教育に經驗あるを幸ひと、遂に京都市立盲啞院の院長鳥居嘉三郎氏に就て、實地指教を受けしむることとなりぬ、幾何もなくして、同院の教師となり、三十三年更に研究の爲め、東京盲啞學校に轉じたるが、當時耳鼻咽喉科を修め、獨逸より歸朝せし醫學博士岡田和一郎氏に就き、聾者發音術の講義を聽取し、約一箇年間の研究を積みて、京都に歸任し、其後伊澤修二氏に就て、視話發音法を學び、大に得る所ありき、從來一概に聾啞と呼び做せど、素聾は啞にあらず、僅かに聽覺の缺損に依る所、啞は聾の爲に來る啞にして、聲帶は全く完備し、些の不都合を見ざれば、此法を應用して、確實に効果を收め得べきものと信じ、三十四年五月を以て、聾啞部に發音課を新設し、其主任として試驗したるに、着々効果顯れ、世にも不幸なる啞者は、遂に物言ふべき現象を示すに至りぬ、實に是れ聾啞教育に、發音法を執りし最先鞭にして、今日に至るも全國二十有餘の盲啞學校中、此法を應用しつゝあるは、京都の同院並に女史の經營せる松江盲啞學校の二校のみなりと云ふ、

勤勞ある女教師

先般全國小學校教員中三十三名に、效績狀を給與せらるゝ內、萬綠叢中の紅一點とも云ふべきは、長野

縣小縣郡上田町六百廿一番地士族河内山寅子（嘉永三年三月十五日生）なり、女史は明治三年以來、今日に至る迄卅六年一日の如く兒童の敎育に從事し、一生を敎育事業に委ねつゝあり、其經歷左の如し、

○學業　△明治三四年上田町熊倉政次郎氏につき數學修業△同五年より八年迄上田町上野尚志に就き漢籍を修む△十一年本縣小學師範學校第一期課程卒業其後理科敎育學を修む△廿五年長野縣尋常小學校本校正敎員免許狀を受く

○敎職　△明治三年父長善と共に小縣郡踏入村兒童敎育に從事△常田成明學校授業生となと夫より上田町一愛小學校に奉職月給十三圓其後十六圓に進み△十九年上田女學校授業生拜命月十七圓其後十三圓に進み△卅二年四月上田尋常高等小學校訓導に任せられ月俸十三圓其後漸次進み今は現に七級上俸なり

◎校長の前身　裁縫、造花、編物、縫繡、割烹等の如き技藝のみを専門に敎授する處も、學校と稱してそれを敎ふる人々は、講師と敬意を拂はるゝ俗を來たしたれば、今に琴、三味線の稽古所も、何々學校の名を負せ、燕口か〻へてお稽古に行くものも、行燈袴をはき女學生と云ふに至るべしなど、腮のぶつツかり放題に口走るものあるは、餘り極端の惡口なるが、斯かる所謂學校にては、敎場の取締が甚だ不完全であつて、授業中に平氣で煙草を吹かし、羽織も袴も着けず、ダラシなく兵古帶又は三尺帶の突懸草履で出る講師もありとは、驚くべき事ならずや、東京には七十有餘の女學校ありて、其うち眞個の敎育家と目し能はざるものにして、一女學校の校長、又校長にして校主を兼ねるもの〻、前身を調査すれば左の如くなりしとの通信ありき、

一　敎科書肆の運動員上り……………一
一　某紳士の妾たりし婦人……………三
一　足袋屋の小僧より出しもの………一
一　某銀行の支配人たりしもの………一
一　敎科書事件の失敗者………………一
一　某工場の職工たりしもの…………二
一　鐵道請負師たりしもの……………一
一　敎育に無關係なりし素人…………六

◎裁縫女學院の開校式　麴町區有樂町一丁目に新築したる、シンガーミシン裁縫女學院は、去十月廿一日午前九時より同三階大廣間にて新築落成の祝意を

兼ね、正式の開校式を執行せり、澤柳文部次官は吾國裁縫の發達と學校教科目に加へらるゝ事の、歐米の各國より遙に進歩し居れる實情を列擧し、一層進んで、吾國の家庭に斯る便益なる機具を利用せん事を希望する旨を述べ、文學博士高楠順次郎氏は、本院設立者秦敏之氏とはエー、ビー、シーよりの同窓なりとて、秦氏の成功今日に至れるは當然なりとの徑路を語り、家庭裁縫の一層發達して、今日見るが如きデモ洋服屋の跋扈を防ぎ、整ひたる儀容に、文明國の伍伴に入るべしと結び、生徒の君ケ代合唱ありて式を終り、階上中央に配列したるミシン機の臺について、生徒の裁縫實地演習を觀覽せしめたる後、別室に陳列せる同院出身者、並に生徒の製作品百數十點につきて、設立者に一一説明し、茶菓を供したる後散會せり、高楠博士の説明せる如く、設立者の機を見るに敏なる今日、吾國一般の家庭に此の必需の利器を紹介せんと、シンガーミシン製造會社と特約し、其の助力を得て同學院を創立したるは、時節柄最も歡迎すべき計畫と云ふべし、

◎東洋女藝學校展覽會　神田區仲猿樂町なる東洋女藝學校にては、這般校舍落成を機とし、十月廿七、八兩日同校樓上に於て生徒製作品の展覽會を開催せり、陳列品の數は合計四千三百點にて、内裁縫八百點刺繡三百點造花三千點なるが、右の内最も優れたるは刺繡にて、加木しづ子の「百合」、田邊壽子の「麥に豆の花」、鈴木きよ子の「山櫻に猿」近藤しげ子の「竹屋の渡し」及び「羽衣」等殊に出來榮え見事に其他裁縫には三枚襲、小兒改良服等、何れも精巧を極め、造花にては淸國少女の手に成りし拆細工の寫眞は、最も人目を惹き、觀者は何れも飽かず眺め居たり、因みに同校は、高橋菊太郎氏の殆んど献身的經營に係り、開校後僅かに一年餘の短日月なるも、其の成績頗る見るべきものあり、目下の生徒數は百廿名にて、十五名の教師は何れも熱心に教鞭を執りつゝありと、

詞藻



貴族院議員 文學士 男爵 千秋季隆君選

雪

天

妻ごとのしらべ絶えたる高樓の
をすまく袖に雪ぞこぼるゝ
岡山 内田やす子

地

ふる雪に松は千とせの色のみか
聲さへけさはうづもれにけり
東京 外山よし子

人

花もわれと月もわれとも野山をは
わか物にしてつもるゆきかな
松山 上原のぶ子

秀逸

○○塵の世は一夜のほどにうづもれて
雪のあしたのおもしろきかな
常陸 岡田萬子

○むらすゝめともよびかはす聲ばかり
雪にうもれぬをかの竹むら
愛知 永井さい子

○世の常のものとは知れと何となく
めづらしと見る今朝のはつ雪
東京 林 艶子

○蝶とまひ花とやちりてふりつもる
雪のみはるのこゝろなるらむ
東京 土田すゑ子

○長谷寺の鐘の音とほくきこゆなり雪ふりつもる稻村か崎
埼玉 横田政子

○しら雪をまとにあつめて文よみしむかしの人そしのはれにける
新潟 岩本よし子

○ながむればをすまきあけしむかしまで思ひぞ及ぶにはのしら雪
播磨 横田春枝子

てふ／＼のまふかとまかふ雪の花枯木をさへもへたてさりけり
秋田 齋藤たけ子

、〇　山口　村上操子
めつらしと見し日の數もふる雪のつもりてはさは思はさりけり
、、、　佐賀　笠原とら子
白雪をけたてゝかへるをしへ子のかけ見えぬまで窓に見おくる
〇　秋田　齋藤とめの
あさひ影さすかに匂ふしら雪はゆたけきとしのしるしなるらし
〇　秋田　細矢はる子
音もなくふりしゆふへの白雪にのやまもなへてうつもれにけり
、〇　秋田　長田せつ子
しら雪のうたかひかゝる花よりもはれてまはゆしとほやまの雪
、、、　岐阜　山田ふさ子
さひしさをふりかくしたるいなはやまみねの松原つもるはつ雪
、、、　奈良　栗山高子
見る人もなくて暮れゆくやま里の枯れしこすゑにふれるはつ雪
〇　岐阜　登田ふゆ子
わか庭のこけもかれはも見えぬまてふかくも雪のつもるけさ哉
〇　奈良　栗山俊子
野も山も雪しろたへに降つもり見れどもあかぬながめなりけり
〇　埼玉　横田やな子
我山はあまりしつかにふけにけりみねのあらしも雪にうもれて
、、、　松山　田村多豆子
ふれはかつとくるみなみの國にては雪は花よりめつらしくして
〇　陸前　末永きえ子
わかせこのかりねの床やいかならんふるさとさむく雪そ積れる
、、、　佐賀　古川くま子
學びやにはしり行く子よこゝろせよ坂のほそみち雪にうもるゝ
、、、　宮城　大槻慶子
ふる雪にもるゝこすゑもなかりけりはるにしられぬ花ぞ咲けり
、、、　薩摩　松原岑子

學びやにかよふうなゐら寒からしそらかきくらし雪のふりける
、、、　東京　碓井のぶ子
みやこすら踏わけがたきけさの雪山ちはいかにふりすさぶらん
、、、　宮城　前田河みさを子
今朝みれは枯木にはなの咲けるかとおもふはかりにふれる白雪
〇　神戸　足立ゑい子
冬の夜もながくはあらじをちかたのやまは雪より明そめにけり
、〇　相州　中島茂子
あさけたくけふりのあとも埋もれて雪しつかなりむさしのゝ里
〇　東京　西郷なを子
降るまゝに木毎に雪のはなさきて冬かれとしもおもはざりけり
〇　愛媛　樋口孝子
をさな兒のとく起いてゝさわくなり庭もましろにつもるはつ雪
、〇　東京　土田八重子
ちり深きみやこ大路につむ雪はけがれうづむるこゝろなるらむ
〇　陸前　大槻初音子
しらかはの關は名のみと思ひしをふりとざしたるゆきのしろ妙
〇　岡山　小山松枝子
ふるまゝに庭のちりひち埋めつゝ花なきやどもにほふしらゆき
〇　東京　松本まつ子
冬かれのきゝのこずゑにめつらしく花かと見えてつもるしら雪
、、、　東京　高野元子
朝さむにこらがつどへる大路には雪のだるまのをちこちにみゆ
〇　佐賀　尾方八重子
ともをよふたけにすゝめのこゑさえてゑのころいさむ庭の初雪
〇　東京　河合きよ子
犬のこもまたあとつけぬ庭の雪をとふひとあらはなしと答へむ
〇　東京　吉岡龜子
犬のこのあしあと梅の花かたに見わたすけさのにはのしらゆき

、○きつれなくよはのみゆきやつもるらむまくらにひゞく下折の聲　埼玉　小川政子

○馬くるまゆきゝも絶しゆきのよにいれすかどもる犬のあはれさ　東京　益子逸子

○松浦川くたすいかたにちりかゝる花かとみえてふれるしらゆき　佐賀　尾方綾子

、○さえわたる月かげそへて松がえにいろこそまされ庭のしらゆき　長野　松岡章子

、、○はてしらぬからの廣野にふる雪の花をとゝめむこすゑたになき　清國　富成梓子

、、、木枯しにふかれぬいろの松か枝もげさはひとつにむつの花さく　群馬　吉田露子

、○賤が家も森も小川もたそがれてゆきになりゆくさとのまつはら　相摸　大谷津みれ子

、○春は花秋はもみぢとおもひしを雪見のひとのこゝろふかしや　埼玉　横田秋子

○いけ水もせまくなり行こゝちしてこほるかたよりつもる雪かな　肥後　友永常子

、、、初雪をふむも珍らしきえぬまにいさとひてみんひくらしのさと　隆前　大槻初子

、○やよ雀こゝにきたらばえならむ枝につもれるゆきな散らせそ　佐賀　田崎のぶ子

○豊としの雪に野やまはうつもれて民のかまどのけぶりにぎはし　神戸　足立あさ子

、、、松が枝にふりつむ雪の千代かけて御國ことほくしるしとそみゆ　陸前　前田河千年子

、○世の塵もしづがわらじのちりもとめず雪のみつもる谷のかけ橋　下野　井上倫子

、○雪のごと清くたもたむわがこゝろ浮世の塵に身はつゝむとも　佐賀　永田はぎ子

○とよとしのしるしのみゆき降つみてにほはぬ花の木毎にそさく　東京　青木たま子

○春のはな秋のもみちにいやまして雪ふる木々のうつくしきかな　東京　林環子

○國の戸をあけて山里見渡せはゆきの中より烟たつなり　神戸　羽田香子

○冬ふかくふり積りたるしら雪はけたけき御代のしるしなるらん　東京　圓津うめ子

○訪ふ人もあらぬものからわが庭はきのふの雪をそのまゝにして　相州　岩谷浅子

、○野も山もよそほひ同じ雪ころもこちたからぬをめでてこそ見れ　山梨　樱文子

、○かぜふけど笹のはづれのあともなし雪にふすらむまとのわか竹　山梨　樱武子

○咲く花の春にもまさるなかめかなまつのはやしの雪のあけほの　長野　岡田千穗子

、、、たゝならす身にしむ夜半と思ひてし今朝あわ雪ぞ花とさきける　和歌山　植木雄子

○あまどあくるたえ間〳〵に雪落ちてくれたけさわぐ冬の園かな　備後　四松女史

○きゝなれし風のおとさへきえうせてときはの松にむつの花さく　愛知　佐野さい子

千鳥

天

ヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽ
こよろぎの磯の洲崎に汐みちて　東京　廣瀬健子

松ばらつたひ千鳥なくなり　宮城　杉山千代子

地

唐琴の浦おもしろく聲たてゝ波のしらべに千鳥なくなり　大和　栗山俊子

人

風なぎて八重のしほぢもさわかねばなくや千鳥の聲のさびしさ

秀逸

○○
さながらに散れる木の葉と見るばかり月におりたつ磯千鳥かな　東京　林艶子

、、○
うちひさす花のみやこのすみた川なとさむけくも千鳥なくらん　秋田　齋藤たけよ子

○
ゆきかへり須磨に明石にかけさゆるつきを友にもなく千鳥かな　松山　田村多豆子

、○
しがの浦やひらのねおろし身にしみてなくか千鳥の聲の寒けき　愛知　永井さい子

○
うちよする男波女波にまぎらはで友よびかはすさ夜千どりかな　岩代　菅野和子

○
ふゆのよのしぶきもこほる燈臺につき白くしてちどりなきよる　下野　井上愈子

いまよりは友とたのまむ濱ちどり親にわかれしみなしごの身は　佐賀　光吉たえ子

○
まどかなる月の夜すがらなく千どり玉に聲あるこゝちこそすれ　松山　上原のぶ子

○
月かげのあかしのうらの風さえて聲するものは千鳥なりけり　常陸　岡田鳳子

○
沖遠く汐のひかたにあさるらむうらすのちどりこえはるかなり　埼玉　小川政子

○
風さむく瀬のおとたかき佐保川に千鳥のこゑはまぎれざりけり　神戸　足立あさ子

○
このころは霜にまつへる霜みえて千鳥のこゑもさむけかりける　宮城　前田河みさを子

○
世のなかのうきをはなれて浪の上にこゝろたかくもなく千鳥哉　東京　松本まつ子

、○
品川の汐やひかたになりぬらむむれゐしちどりとほくなりゆく　佐賀　尾方綾子

玉の浦なみまにさわくむらちどり月になく音もさえわたりつゝ　山口　村上操子

こぎわたる船をば中にひがしにも西にもなきてゆく千どりかな　陸前　大槻初音子

○
なにはがた汀のなみの音たえてとほくちどりの聲をきくかな　埼玉　横田秋子

○
あはし島月の出しほやみちぬらんかよふ千どりの聲そさむけき　東京　青木たま子

よる浪もこほるはかりの月かけに友なしちとり聲しきるなり
東京　林　磯子
なみの音のたえま〲に聞ゆなり明石のうらのちとりなくこゑ
○　東京　爾津うめ子
さよふかく武庫の海つらゝ月さえてなる尾の潟にちどりなくなり
○　相州　中島茂子
わかいほはすまのうらへにかよひくる千とりの聲を枕にそきく
○　東京　西村直子
みきはなるあしのかれはに風あれてこえも寒けになく千とり哉
○　東京　土田八重子
月かげも明石のうらに夜もすがらたちかへりつゝ千鳥なくなり
○　京京　金子遜子
おき津かせあれのみさきの濱風につばさみだれてちとり鳴なり
○　東京　土田すゑ子
あらいそに月を友とやなく千とり聲もなみ間にうきしづみして
○　岡山　小山松枝子
あかしがたおきつしほ風吹たちて友よぶ千どりこゑみたるなり
○　東京　河合きよ子
よもすがら浪立かへりこゆるきのいそがしげにもなく千鳥かな
○　佐賀　鹿方やゑ子
波のはなちるやすさきの月のよに聲もこほりてちとりなくなり
○　長野　松岡草子
さ夜ふけてたちさやぐなり濱ちとり沖のなみ風いかにふくらん
○　群馬　吉田露子
沖とほくしら帆とまれるゆふ波にちどりの聲の寒くもあるかな
○　相摸　大谷津峯子
別れゆく君がすがたのかげくれて夕べさびしき千どりなくなり
○　肥後　友永常子
いそ行けは並木のまつの霜ちりてしほかせさむみ千鳥なくなり

○　陸前　末永きえ子
いたく夜もふけひの浦になく千鳥つまやこふらん友やよふらん
○　宮城　大槻暎子
小夜ふけてなく音もあはれ濱千鳥とこのうらわになみや立らん
○　東京　神田けい子
霜こほるあしまの月のかけ更けて千鳥しは鳴くこゑあはれなり
○　薩摩　松原峯子
すみよしの浦のまつ風さむき夜をいやなき渡るとも千とりかな
○　東京　碓井のぶ子
れさめしてきけは千鳥の友よびてきよき河原になきわたるなり
○　陸前　前田河千年子
濱間よりこほるはかりにこゑたてゝ友よひかはすむら千鳥哉
○　神戸　足立ゑい子
玉島の河にしば鳴く小夜千とりたちしあとこそこほり初むらめ
○　埼玉　横田やな子
汐のぼるしら洲が崎のひとつ松ちとり羽根ほすところなりけり
○　埼玉　横田政子
すみ田川中洲のよしに月さえてともなし千とり夜たて鳴くらん
○　東京　高野元子
時つかぜ汐やみつらむこゆるきの磯たちならし千とりなくなり
○　新潟　岩本芳子
住の江や汐みちくらしさ夜ふけてまつはらがくれ千鳥なくなり
○　秋田　細矢はる子
よりてくる波につゝみをうたせつゝむれし千鳥の聲ふそぶらん
○　秋田　長田せつ子
打よする波のひきゆくあとおひて磯のちどりはゑをあさりけり
○　岐阜　山田ふさ子
月かけはなみにくだけてよな寒みともよひさわくむら千鳥かな
○　岐阜　豊田冬子

汐かぜに吹おくられてうらなみのよる〳〵さわくむら千鳥かな

、〇　東京　吉岡　艶子

友ちとりよはにしばなく聲すなりあさるかたなく汐やみつらむ

〇　大和　栗山　たか子

須磨のうら浦風さむくふきあれて立ゐさわけるむらちとりかな

〇　秋田　齋藤　とめの子

わかの浦よせくる波のたえ〳〵に聲うちそへてなくちとりかな

〇　山梨　標　文子

名も聲もかはらぬ御代の友千鳥須磨のうらわにゆきかへりなく

〇　東京　美矢竹光子

あらいそに友よびかはすはま千鳥さびしくきこゆをちこちの聲

〇　和歌　植木撫子

吹く風にうらなみさわく夜もすから聲もみたれて千鳥なくなり

〇　埼玉　安部とみ子

浦々の夕なみ千とりなかなけはしほのみちひもひとや知るらむ

、〇　山梨　標　武子

乘すてし海人の小ぶれのほにかけて友なし千どり月になくなり

短文

天賞

夜の湖　千葉　木村春枝子

古りたる岩の隙間より、落來る水の音すゞく、青柳の絲をみだして、池の水面にうつろふ毎に、細波かすかによせて、水皆紋をなせり、遙に吹來る風は、山寺の鐘をつたへ、白雲西に馳せて星影物さびし

地賞

水の音　伊勢　井口孝子

巖垂るゝ水の音のいかにか弱く、いかに小さきことよ、松風の木魂にもまぎれつべし、されど豁々として雲より落つる飛泉は、その弱き小さき水の生いたるなり、されば人勉めて怠るなかれ、

人賞

農家の冬　下野　井上侚子

米俵は土間に富士の山味噌もつきたり柴も刈りたり干柿は家を廻り妻は機織り、布子も出來たり、雪降れ雪降れ、こん年の豐けきしるしに、寒き夜は爐邊に坐して、濁酒數盃ひな歌の節面白し、快なる哉心ゆたけき農家の冬

〇〇星と菫　東京　土田八重子

あはれ床しき星と菫、彼等がよひ〳〵にかはす笑みと光りの、いかにやさしく、美しき、やがてみ空の星の消えゆく時、見よ必ずや露の涙は、菫の

花に浮ぶめり、名にしも深きかれとこれ、諸共にた丶へらる丶を、さなはとがめそ我世の人、

、、〇初霜　　播磨　横田　春枝子

見渡すかぎり、露は、霜とおきかはりて、木々の梢に、屋根の瓦に、さては、千町田の案山子の頭より、我秘藏の、寒椿の紅の口びる迄も唯白く、霜蓋せんとて、いそぎ破れ傘持ち出づれば、庭の紅葉を錦と照らして、朝日はうら丶かに差昇りぬ。

、、〇雁の聲　　越後　松永　しげ子

前栽の黄菊笑つて、坐に古里を懐はしむる雁の聲、あな美しき虹秋姫の渡り給ふ橋なるか、雨水蜩のなきからを流せば、散りし紅葉之を覆ひ、み空には亦鳴き渡る雁の聲々。

、〇雪後眺望　　肥後　友永　常子

住吉の松は梢に雪をいたゞいて一夜に老い。あわと見し淡路島はま白にして呼べば答へむとするが如し。海上遠く雪をおさりて歸る漁舟。雪に埋れし芦屋の夕煙。皆是畫中の書にあらずや、

、〇山田長政奸臣に毒殺せられ國亂れたれば阿因に代りて　　相模　柚木　とよ子

吾異邦に生れ、身痩せたりと雖も、東姫國の血胤倘薄からざるを知る、然は云へ、小女の身、何ぞ兵馬の事を敢てせん、只正義國の臣、父王の名を瀆さん事を畏るのみ、四方に放散せる義憤の士よ、須らく來れ、神は義の爲めに汝等を祐助せん、

、〇田舍に宿りし一夜　　東京　槇野　久美枝

徒然なるま丶に柴の戸ぬけ出で丶、月清き田のあぜ道に出づれば肌寒き夜嵐に、稻葉打そよぎし丶となく虫の音、物悲しき折しも、何處よりか、打すさぶ砧の音、はた糸車の響き、あ丶都にのみ住みなれし身の今宵は、いとも珍らしき詩料を得たりしよ。

、〇筑波山　　常陸　岡田　萬子

紫のゆかりに匂ふ筑波の峯、東は男體、西は女體、神代より夫婦の分正しく、天地の分れし始に、出來たりけむ此山はしも、朝な夕なに見れども飽かず、雲の帶する中腹より、湧き出るみなの川は、

陽成院の御歌と其名世々に流れ、此面彼面に繁る木影は、大君の恵に添奉るそありかたき、春は霞、秋は紅葉、夏の青葉に、冬のみ雪、何れか四季の眺めならざる、實に尊く美しきかも此山

〇冬野　松山　田付多豆子

秋霧のうみのはれ渡るまに〳〵、尾花のなみの、うちよするさまの、をかしかりしも、今はかへらぬ冬の夢野にして、千種の花も只霜のひとくさと枯果ぬる、淋しさいはむ方なし、すへて、世の人の夢野の冬も、かゝらむとおもへは、かなしともかなし、

〇惜秋　東京　神田けい子

風の音凄ましくなり行くは、秋も早暮れ行くなめり。庭は千草に山は紅葉に錦織りかけし秋の今はと暮るゝ惜しさは吾のみならじ。枯生に殘る蛬、草の宿りは枯れ果てゝ霜深くなり行く夜をわびしと思はゝ、諸共に鳴きて止めよ、行く秋の名殘を。

〇病母　岩代　菅野和子

今日は聲立てゝ泣かんと、母屋の裏にいづ。空は、密雲湍の如く流れて定まらず。木々は、昨夜の嵐にちぎれて枯枝のやう。鴉は、的もなく飛びまはりて姦し。

「アヽ嫌な聲だワ」と。走りぬ。鴉は木葉の落る時節になくもんで」

ふり向けば父は悄然佇立。病室には、また、母が力なき咳嗽。

〇勇士の墓前　大阪　小野はつ子

青山の片邊、とある小丘の上に、松樹を植雜せたる中に、海軍中佐廣瀨武夫之墓の十字、いとおごそかに讀まれつ、墓前には樒梢彩しう挿され、薫香の煙立罩めて、一陣の風に搖めきぬ。三とせ餘りの雨露に打れて、青黛はやく苔むし、一しほ靜寂の趣を添へつ、今は夢と過ぎにし旅順の壯擧に、勇ましくも悲しき武夫ぬしの英姿偲はれて、只何となく氣高く涙ぐまれぬ。

〇殘菊　長野　松岡章子

庭の千草枯れ伏して、露を命に鳴く虫の聲、絕々になる秋のく

れ、花の形見に只獨り、籬の下に匂う清らなる色に匂へる、鈴山の岩の間、敍の苔の中、優しうもくちなし色に咲きいでゝ、人々に愛でらるゝなど、霜雪にもたわまぬ操は、人にも勝りていとあはれ。

○女子のみにくきもの　東京　碓井のぶ子

流行髮の庇ですぎたる、白粉のまばらにはげたるハンカチーフを頸にまきたる、木履にて裾みぢかく脛のみえたるみにくし、いざ人のふりみて、我がふりなほさまし、

○あはれ蝶　讃岐　安藤光代子

今着きし許りのみ鑑を結ふ窓の障子に、豆鼓打胡蝶一ツ、開けてやらんと思ひつゝも、讀行程の面白さに、時を過してフト心付ば哀れ、いつの間にか文机の下に斃れ居たりき、窓邊をさまよふ白き蝶、親か夫か、姿は恐ろしき罪を犯しつるよ。

、、、丸鏡の裏　越後　大石ます子

妾の妹は、おとゝひの晩、洋燈の下で叔母の形見の丸鏡を出し……て、頻りに眺めて居りました、それとは知らぬ私、障子をガラりと開けましたら、妹はきまりわるそうに紅くなつた面を挙げ、微笑をもらしながら、姉さんこれこの繪をご覧と、鏡の裏をかへして見せました

○我生涯　名古屋　小山かく子

貧乏の家に生れた私は、これ迄人様から嘲笑、侮蔑、罵詈、誹謗を受けた事もありますが、自分は未だ人様にそんな事もせず、四五人のお方から愛され同情されて、無病息災で成人したのは有難い事だ……時々こんなに考へて、これからさきも多分同様に幸福だらうと信じて居ります。

○菊　和歌山　植木撫子

今年こそ、大いなる花を咲かせんものと、梅雨の頃より手をつくし、菊の花、きのふけふ、笑ひ出でゝ、香いとゆかし。さるを心なき雨は、一夜のうちに、あはれにも、うつろはせぬ。あゝ、惜しきかな、菊の花は、さかり、久しといふに。

、、、乞食　東京　藤井すみ子

秋風身に染み渡りて、村雨ショボ〳〵と降る日、淺草七軒町を通れば、背中の風除とも覺しき樣に、破傘を後にして、淺黄無地の單物で、歩もしどろもどろと彷ふ者は、男か女かと疑ひ居れば、蚊の脛八ツ割の年若き男なりき、折ふし燒芋を買ひて與へければ、此燒芋に低頭幾度なりしか、

、、、田家　東京　碓井のぶ子

草木おほく、軒少なく、畑あり、田あり、ともしびの木の間にもれて、かやの奥ゆかしく住みたまふあるじや、いかに樂しかるらん、

、、、久しく音づれたえし友に菊の繪葉書に書きて送る　新潟　岩本翠浪子

去年にもましてかぐはしき菊は盛りとなりにけり
我待つ君の音づれは、なほ美はしくきくべきを
よろづ秋千秋長秋さく菊の盛りもしろき君がみ代かな

新體詩

地賞　埼玉　野川芳子

心はわだ

森の木陰のしげみより
捕へ來りし雛一羽
籠に入れつゝ水飼へば
元の木の間を慕ひてや
啼く音悲しく聞ゆなり
巣に宿りたる昔には
永き一日を親鳥の
怠るけしきさらになく
野山にあさり育みて
羽わたゝかく掩ふなり
捕へられにし其後は
人の餌飼をかへりみず
たゞ悲しげに音をなきて
かひなき翼ふるはせて
はやくも瘦せて見えにけり
あなおぞましき雛鳥よ
なれが親にも立まさり
餌飼育てる心をば
知らず顔にぞ過すらん

うれたきことの限りなり
乎の行衛をば尋ねけん
夕暮近くなる頃に
籠のべ近く飛來り
かたみに音をば啼かはし
喜ぶ親の聲すなり
萬の物を天は掩ひ
惡しき物をば地は載する
慈愛は天地の心なり
天地の心うけつぎて
慈愛はわれの心なり
あはれ親鳥なが心
我は知るなり其雛を
養ひたてよそれはしも
天地自然にうけつぎし
なれが慈愛のこゝろなり
月影高く昇る頃
籠を母屋に持行けば
親は暮るゝも打忘れ

一夜の別れ惜みてや
外の面にしばし聲すなり

一夜の別れよしやよし
惜くも音にな啼出でそ
明れば又も夜の木に
籠はかけなん親鳥よ
曉まではしばしなり

雛は眠りに就にけん
聲もきこえずなりにけり
外の面の親も今はとて
空なる巣にや歸りけん
夜も靜やかに更ゆけり

明くる一夜を幾月日
重ぬるかごと待たれつゝ
籠を木の間にかけんとて
妻戸あくれば親鳥は
早くも軒に聲すなり

籠の中なる雛鳥の
如何なるらんと見入るれば
さても哀れや夜な〱を
親の翼のなき床の
露けき故かうせにけり

やよや親鳥我はしも
なれには何と言釋かん
捕來らずば此雛に
かゝる憂目はなかりしを
慈愛は仇となりにけり

やよや親鳥我はしも
なれには何と言釋かん
捕來らずばなれか身に
かゝる憂目はなかりしを
心は仇となりにけり

入賞

雁となつたら　　　越後　松本しげ子

角田の山も色づいた、夕日は今や傾いて眞紅に染まる秋の空雁はかや〱啼いて行く、仲間おほ勢雁さんが、彌彦の峯の上越えて、とこへ行くのかわたしなど、羽があつたら飛ぶのだに、高い御空を

とびながら、海さへ陸さへ見おろして紅葉や菊や目に入れて、嬉しからうな樂しかろうな羽がほしいな羽有らば、たやすい事よ姉樣の極樂までもとんで行き、お膝にだかれあそばうに私どうして羽ないか、羽がほしいな羽持たば兩親さまの手を引いて、姉さんとこへ行くのだに、羽が有つたら雁となつたらたのしかろうな嬉しかろうな、

、、○かぢ枕　大和　栗山たか子

難波の浦を舟出てし　あはちのしまを漕廻る
はてなき海の底よりは　水を打艫の音きゝつ
空にたゞよふうき雲の　いつくとなりと白浪は
嵐の風となりしより　さわきそ立つる汐の路
しばし浮ねの夢をたに　結ひかたなきかぢ枕
こよひとまりやいつこなる

、、○冬の川　常陸　岡田萬子

岸の蛇籠もはらわれて　淋しく立てる枯柳
繋ぎし小舟霜白く　こぼり傳うて鶺鴒の
尾羽打振るも寒けなり　此川上の里少女
今朝しも大根洗ふらん　菜屑あちこち流れ來ぬ
朝日麗らにさしぬれは　川もや晴れて雑魚目高
菜に打寄りて數多浮ひぬ

、、○無緣の墓

冬淋しけの山寺に　あはれ如何なる罪の兒そ
無緣の墓に鷄頭の　霜に褪せてそ咲にける

、○珊瑚船

辛き浮世の生業に　怒濤逆卷く荒海の
底に沈みし珊瑚船　浮ふ屍體も後や前
子もあり親もある者を　天を恨めどすべもなし
富をばほこる貴人の　黒髪飾る其珠は
色美しく匂へとも　島の男女の命がけ
其魂の緒の絕ゆる時　湧きし血汐の固まりて
底の花とはなりにけむ　見れは恐ろし紅き其珠

、、○暮秋　肥後　友永常子

千草の花の一つかれ　一つしほれていつしかと
見る影もなく成ぬれば　其八千草のさまぐに
鳴わらそひし虫の音も　有るかなきかと聞はかり
霜によはれり更ねだに　さひしきものを敗れたる

窓のばせを丶吹風の　音さへ寒く成にけり

○冬の月　越後　大石益子

冬空高くすむ月を　うつして行くや小流の
岸にやせたる松の影　今は梢に風もなし
黒くつゞける遠山や　野をへだてたる村里の
望めば寒き夢に似て　うすき光をおびにけり

○失題　神戸　足立あさ子

「鎌倉山の星月夜。あけの玉垣鶴が岡。續くみどりの龜が谷。千代萬代も何の其」。須磨の浦半はいつしかに。跡の名殘もをし照るや。難波の海の白浪を。雪の津守に御津の濱」

○同　同　足立ゑい子

「和歌のはじめは八雲たつ。出雲八重垣難波津の。流れを汲みて澄める世は。ことの葉しげき淺香山」

「うき世の嵯峨の奥ふかく。草をむすびて隠れ家や。隠れて住むと思ひしに。思はぬ人に訪はれけり」

○乙女心　東京　槇野久美枝子

風颯々の秋さびて　萩みだれちる此の夕べ
小窓の下にたゝずめる　乙女や何を思ふらむ
紫紺色濃き振袖に　もゆるひおやの帶高う
星のひとみに月の眉　ま白き花のかんばせに
紅一點のくちびるや　ビースの女神のそれの如
しらをの如き手に持てる　詩集の中に何あ　や
折々四方をうかゞひて　先人なきに胸なでつ
そとのぞきては優頬に　紅葉をちらす艶風情
若き血潮の胸めぐる　乙女や何のはじらひぞ

○秋夜聴笛聲　播广　横田春枝子

時雨まじりのこがらしに　散りて亂るゝもみぢばの
行へたづれてさまよへば　かげすむ月におと冴えて
ゆかしくひゞく笛のおと　たが風雅なるすさびかや
餘韻は長くそらにいり　虫もきゝてや音をとめぬ
靜なるよはいま三更　森のこずゑにくもひくゝ
夢より淡きほしのかげ　末野のはてにおちゆきて
まれくもさみし枯尾花。

○戀の別れ　名古屋　小山かく子

美しの男神口笛して、聖き戀吹きし秋の夕、
楓姫舞ひぬ、錦かざして、銀杏姫舞ひぬ、黄金かざして
ふた姫の舞ひや、さらり／＼、われ誘はんの、競ひ顔に、
永久のうらみ、胸にひめて、男神は　みそらに、姫らはつち…。

短歌

天賞

暁寒月　　東京　茂川近子

山のはの雪にひかりをうばはれて
　いよ〳〵しろきあり明の月

地賞

蘆　　備前　松本よね子

夕しほのおちし渚にあらはれて
　さやぐもさむし蘆のひとむら

人賞

折にふれて　　越後　大石ますこ

さりげなう流るゝ水に立つ波や
　くるひ心地の風さむきかな

選外秀逸

○○歳暮　　東京　土田八重子

いつしかに今年もすゑのまつ山や
　よるとし波は越えてゆくらん

ゝゝ○鹿聲催涙　　松山　田村多豆子

きく人になけよと鹿は啼ねとも
　なにゝなみたの袖にちるらむ

ゝゝ○田家初冬　　常陸　岡田萬子

やれ果し案山子の袖に霜おきてをやま田さむくふゆは來にけり

ゝゝ○冬松　　埼玉　横田秋子

冬枯をしらぬときはの松ばやし千代のためしはまつしられけり

○冬動物　　宮城　大槻駿子

ふりつもる雪にねくらや埋もれんのきはにさわく夕すゝめかな

○冬朝　　東京　彌津梅子

このあさけおく霜さむし今はしもわかふるさとは深雪なるらむ

ゝゝ○霜夜　　東京　彌津梅子

風冴えて月のひかりにいとゝしくしも夜をつくる山てらのかね

○時雨　　神戸　足立あさ子

ありあけの月さす窓にかけ見えてひとむら通る小夜時雨かな

○時雨　　北海道　池田よし子

木からしのしつかにそひて夕時雨さとにも冬をつけに來にけり

ゝゝ○霰　　越後　松永しげ子

師のきみに歌ならはんとゆきかよふ小笠にふれる玉あられかも

○玉あられ　　下野　井上尚子

なかき夜のゆめもやれたる軒端うつ音ものうき玉あられかな

ゝゝ氷結　　播磨　楠田春枝子

よあらしに落葉うかべてこほりけり汲む人もなき冬のましみつ

○水鳥　　岐阜　豐田ふゆ子

よあらしの吹みたしたるかれあしに朝霜さえてかもそなくなる

○殘菊　　東京　神田けい子

匂はすはそれとも知らし霜むすふおち葉かなかにのこる白きく
長野 松岡章子

○埋火
あられふり隙洩る風のこほるよにたのしく語るうつみ火のもと
岡山 小山松枝子

ゝゝゝ同
故郷のむかしかたりに書おきてまとゐにましろうつみ火のもと
埼玉 横田すま子

○爐邊圍碁
まとゐして夜や更ぬらんうつ圍碁の音もさえ行うつみ火のもと
埼玉 横田政子

○山家如春
あたゝけき春をとなりの山さとはみつよつふたつ梅咲きにけり
埼玉 横田やな子

ゝ送年
とし〳〵におなしことして老らくの身には歎のみつもろしら雪
東京 土田すゑ子

○除夜
まとゐして静けき夜半をまもる哉としも今宵につきぬと思へは
越後 松永繁子

○名所花
よし野川谷に尾に立つゝ霞かすみ花とはかりはおもはさりけり
越後 岩本芳子

ゝゝゝ秋の月
木からしとゝもにちりにしもみちはに色かそへぬる秋の夜の月
静岡 ふさ子

○同
月たかくこすゑを渡るあき風にうなつくすゝきのかけ白くして
東京 岡村富子

ゝゝゝ同
住すてしふるさと思ふ夜はすみて誰をてらすかあきのつきかけ
讃岐 安藤光代子

○女郎花
しこ風になひくと見せて國のためつくしに生ひし女郎花かな
東京 岡村十三子

ゝ○松蟲
松むしの鳴く音や荒きとほさとの小野のふる道ゆふへさひしき
神戸 足立ゑい子

ゝ○蟋蟀
散かゝる紅葉のにしき着ながらも夜寒をわふるきり〳〵すかな
肥後 友永常子

ゝゝ○谷菊
椎の實を拾ひに来すは世のちりのゝからぬたにの菊は見ましや
群馬 吉田露子

ゝゝゝ紅葉散
いたつらにふく山おろし大かたの木々の淋しくなれるけふかな
和歌山 植木操子

○擣衣
吹く風にまかせて秋もゆくならん蟲のねほそしよひ〳〵ことに
陸前 大槻初音子

○枯野
狐なくこゑもかれ野に小夜ふけてものすごきまてさゆる月かけ
伊豫 釜田春子

○折にふれて
野山路にみたれし千草うすろひて秋もあはれになりまさりけり
肥後 友永常子

○天長節
あれまし〵今日をいはひて外國の大御つかひもみ酒によふらむ
薩摩 松原岑子

ゝ○姫鏡朦子の傳を讀て
釜貝矢もはらひかれたるあた草の根をさへたちて消えし白ゆき
奈良 栗山高子

○往事如夢
過し世はみなぬは玉の夢なれやいまもうつゝの思ひこそすれ
陸前 前田河千年子

ゝ○招魂祭場にて
みたまをはまつるこゝろの悲しくも國のしつめとなるそ嬉しき
東京 槇野久美枝子

ゝゝ親を失ひし都の友に
むさし野にさく一もとの女郎花しほるゝ色を哀れとぞ思ふ

俳句

天賞

初時雨
愛媛 合田鶴子

膝に手を溜て聞きたり初しぐれ

地賞

友の便
東京 小池松子

凩うれし何處の木の葉か机先

人賞

寒夜　常陸　岡田萬子

寒き夜の障子引裂く鼠かな

○　松山　上原のふ子

、、○なく聲に寒さのそはる千鳥かな
、、○武藏野をみな霜にして冬の月
、、○もみち葉を底にこめたる氷かな

○　相模　柚木とよ子

、、○木枯や頬冠せる鬼瓦
、○霜月や瓢に寒し雀二羽
、○木枯や二十四孝の幕のあゐ
、○三毛猫の夢遊ばせて小春かな
○猫の伸たしかに今日は小春かな
○水仙や片足に立つ小田の鷺
、○碑の文字を透して見たり雁の聲
○水仙や忘れし衣氷りけり
○はね付きし障子の泥や梅の花

、○京の地も踏まず老けり網代守　神戸　足立ゑい子
○猶淋し照葉の中の歸り花
○煙られば家とは見えず雪の原
、○世を捨てゝ世にまた綻き紙衣かな
○年の市梅さし上て通りけり

攝陽　横田春枝子

○あけてすぐしめる障子に吹雪かな
、、、埋れ火や昔話のたれをいり
、、、霜柱ふんで後見る月よ哉
○初霜や足袋やの店の賑はしさ
○鉦鳴やひと村包む竹林　神戸　足立あさ子
○きのふからあの通りなり浮寝鳥
○留主の間も塵らぬ神の鏡かな
、、あがりに愚痴こぼしけり臺所
、、、小付け物多し師走の戻り馬
○寒梅や聲無き鳥の日もすがら
、○行秋をのせて下すや木の葉舟　肥後　友永常子
、、、今日かぎり秋もはつせや鐘の音
、、、風ふかで椎こほれけり冬隣り
、○辻堂のうしろより出し冬の月　相模　大谷津みれ子
、、、淋しさを琵琶にまぎらす庵かな
、、、澁柿の枝のしげりや後の月　東京　淺乃眞子
、、なまぬるき五右衛門風呂や後の月
、、、微吟する青女が窓の紫苑哉
○水仙や奈良の小院の雨一日
○菊三日馬子も佳節の酒に醉ふ
、○緋袴の老いし女や菊の宴
○一枝にあつめてもかな歸り花　名古屋中　西つれ子

○木がらしに落葉みだれて月さむき　東京　稱津梅子
ヽヽヽ風の幾禿山を吹きにけり　越後　大石ます子
ヽヽヽ野も山もみな白雪の初日かな
ヽヽヽ山寺の庭に寂たりほうの花
○濟巨燵お伽噺に更けにけり　横須賀　高橋つれ子
○往戻り風に眞向きの枯野哉
○物知りのような顔して暦賣
ヽヽヽ寒い程てり渡りけり冬の月
ヽヽヽ日和まつ港の舟やなく千鳥
○榾火なば中に親子の諍ひ哉
○袴着や流石氏より育てから
○繙くや巨燵の上の古今集
ヽヽヽ山茶花の雨になりけり一二片
○くりかへす六無の歌や古今集
ヽヽヽ塒に戻る一羽鴉や夕時雨
ヽヽヽ鶏頭に心閑なり若き尼　常陸　岡田萬子
ヽヽヽ錦木は色に出にけり妹か門
○白菊の酒賣る店に匂ひけり
○月の夜を時雨にしたる落葉かな
ヽ○寒き夜の障子引裂く鼠かな
○簑笠の音ふりわける霰かな　東京　小田初枝子
ヽ○人聲の風に消えゆく枯野かな
ヽ○樂しげに落葉と遊ぶ子供かな
ヽヽヽ濱風で千鳥の聲の聞えけり
ヽヽヽ我しらず我を忘るゝ巨燵かな
○花に名の立たぬ端山も紅葉かな
○人の住む谷とは見えぬ深雪かな
ヽヽヽ寄合うて眠る姿や花のやま　近江　金子芳子
ヽヽヽ麓まで染めてそ下る秋の山

女鑑投稿懸賞規定

本誌第十七年第一號より、詞藻欄を、別項記載の如く、誌友諸君の領分とし、
從來の和歌兼題二、兼題外和歌、新體詩、短文、俳句の外、小說、隨筆、日記、及家事に關する事何にても投稿を歡迎す、
賞金は天賞一圓、地賞五十錢、人賞は三十錢とし特に秀逸なる作品に對しては、それ以上五圓以下の賞金を呈す、また入選の作にて特に佳作と認むるものには、繪畫を挿入し、錦上更に花を點ずべし、

明治四十年和歌兼題

一月（若水　雪中梅）
二月（鶯　月前柳）
三月（春風　春雨）
四月（山花　落花）
五月（更衣　小野小町）
六月（梅雨　撲螢）
七月（池蓮　納涼）
八月（初秋露　常盤御前）
九月（秋夕　行路漸）
十月（海上雁　女子讀書）
十一月（水鳥　看護婦）
十二月（落葉　歳暮）

新刊紹介（二）

趣味	第一卷第六號	東京	彩雲社
女子文壇	第二卷第十五號	同	女子文壇社
女學世界	第六卷第十五號	同	博文館
裏錦	第百六拾九號	同	尚絅社
成功	第拾卷第三號	同	成功社
中央公論	第廿一年第拾壹號	同	反省社
六合雜誌	第三百拾一號	同	日本ゆにてりあん弘道會
教育實驗界	第拾八卷第七號	同	育成會
正教要話	第七卷第十一號	同	教要社
なでしこ	第七卷第一號	同	大日本女學會
婦人と子供	第六卷第十一號	同	弘道館
日本の家庭	第四卷第三號	同	同文館
日本婦人	第八年第二號	同	帝國婦人協會
婦人世界	第十一號	同	實業之日本社
慶應義塾學報	第百拾一號	同	慶應義塾
體育	第百五十六號	同	日本體育會
時好	第四卷第十二號	同	三越呉服店
東京經濟雜誌	每號	同	東京經濟雜誌社
流行	第三年第十一號	同	白木屋
新公論	第廿一年拾一號	同	新公論社
婦女新聞	每號	同	婦女新聞社
愛國婦人	每號	同	愛國婦人會
家庭週報	每號	同	日本女子大學校
菊花月	（女子文壇定期增刊）	同	女子文壇社

定價

一册	前金貳拾錢
三册	前金五拾七錢
六册	前金壹圓拾錢
拾貳册	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁 三十二行	金八圓
一頁 六十四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵劵代用一割增の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に券錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十九年十一月廿八日印刷
明治三十九年十二月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 株式會社 國光社
東京市京橋區築地二丁目二十番地
右代表者 橋本忠次郎
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人 河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 株式會社 國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋 特八八番）

女學及家庭書類

- 島田佳矣・野口駿尾 共著　女子技藝 編物模樣圖案　全五冊　定價 松ノ卷四十錢 [illegible]ノ卷五十錢 [illegible]ノ卷五十錢 菊ノ卷五十五錢 梅ノ卷五十五錢 郵稅各二錢
- 棚橋絢子著　女道叢話　全　定價金三十錢 郵稅金四錢
- 三輪田眞佐子著　女子之本分　全　定價金二十五錢 郵稅金四錢
- 三輪田眞佐子著　女子處世論　全　定價金二十錢 郵稅金四錢
- 磯部武者五郎著　家計簿記法　全　定價金十五錢 郵稅金二錢
- 藤野天城著　女子小觀　全　定價金二十錢 郵稅金四錢
- 堀內新泉著　女樂師　全　定價金卅五錢 郵稅金六錢
- 松川霓州著　結婚と家庭　全　定價金十五錢 郵稅金四錢
- 堀內新泉著　家庭の鑑　全　定價金十八錢 郵稅金四錢
- 女鑑編輯局編　新編 ひめかゝみ　全　定價金二十五錢 郵稅金四錢

◀國光社出版圖書目錄▶

著者	書名	册數	定價	郵税
梅澤清一著	清少納言と紫式部	全	金卅五錢	金六錢
澁谷愛著	萬國女子風俗	全	金二十五錢	金四錢
堀内新泉著	少女讀本	全三册	各金十八錢	各金四錢
大町桂月著	常盤御前	全	金十三錢	金二錢
小林雨搭著	勾當の内侍	全	金十三錢	金二錢
濱田廉著	袈裟御前	全	金十三錢	金二錢
國府犀東著	靜御前	全	金十三錢	金二錢
長田偶得著	顔世御前	全	金十三錢	金二錢
杉谷正隆著	家庭訓歌 修身百首	全	金二十錢	金四錢
高瀬眞卿著	學校家庭 修身一夕話	全	特六十錢 並三十八錢	八錢 六錢
指原乙子著	女子文章軌範	全	金三十錢	金四錢

パイント半　肺や皮膚から出る一日の炭酸の量に百二十四ガロン、而して一日の尿の量は先づ三十五グラム位だそうです、

化學上の酸化や分解はまた身體に熱を與へます、身體の熱といふものは外部の影響をそんなに被りませんで、化學作用と機械的運動の結果から來る事は明かな事實です、いろ／＼の實驗からこういふ事が計算されてあります、即ち目方の一キログラム毎に一時間一カロリ半の熱を生ずる、之を二十四時間に直すと大低の人で凡そ二千三百カロリーを出すのだ、つまり之丈けづゝ人間の皮膚に肺から蒸發したり放射したりして失ふ、機械學の原理からいふと此失ふ熱はどれ丈けの仕事に當るか、丁度エンヂンにどれ丈けの熱を與ふるとどれ丈けの仕事をするかと云ふと同じで直ぐ計算が出來ます、一日中に人間の心臓が作る熱は二百八カロリー即ち仕事の量で示すと八萬八千二百七十二キログラムを一メートル上げるに相當する、チト六かしくなりますが一日喰べる食物にあるエネルギー即ち勢力は熱に因りても或は仕事によりても計算の出來るものであります、一日の食事が凡そ百萬キログラムを一メートル上げらるゝに相當し即ち二千三百カロリーともいはるゝと或西洋人は計算いたしました、日本人普通の食事が之丈けあるかどうか怪しいものです、兎も角之丈けとして常々の勢力は五六分の一とすれば十五萬キログラムを一メートル上げる仕事丈けして殘りは熱となつて逃げることになります、此熱と人體との關係は非常に面白い丈夫丈け込入つて居る、却つて一般には向まいと考ますから、マア此位にして置きませう、

◎シヨール新形　本年流行の婦人用形シヨールは概して俗に手拭形と稱する兩面ものにて重なるは蛤形一文字入（白又は淡茶色の線入）、是は線より二ツ折にして掛るやう出來たものにて線と地の調和至つて宜く上品にして優美に見ゆるものなり、又は暗シヨール名の如く總てボカシにし源色より次第に濃き方へと染上げたものにて、二ツ折にして掛けるもの、又は富毛付長シヨールにて折方は前二品と同じけれども飾と地とへ鳶色（黒又は白など）を付けたるものが嶄新の意匠として評判好く此品が本年流行中の第一位を占むならんとの事なり、右各種共意匠色相などは需用者の嗜好によりて種々あれて直段も一様ならざれども大概四圓より七圓位までなり

貞女が十年の苦心一場の夢

新橋といへば、煉瓦地の瓦に交る玉の肌、折々掘出さるゝ處なれば、砂の中の金のやうなる心の光あるものゝ、などかは現はれ出でざるべき、茲に同所の多き女髪結の中に、京橋區加賀町五番地戸根愛子(二十五)と云ふあり、斯る社會には稀なる貞女にて、苦節堅操能く良人を帮けて辯護士たらしめたる苦心談、而してそれが一場の夢となりたる述懐談こそは、實に耳を傾く可き價あり、先づ

▲愛子の生地 を聞くに、彼女は愛知縣三河國南設樂郡長篠戸根源六の長女にて、九歳の折飄然東京に出で、數ヶ所に奉公の後、女として早く獨立するには、髪結が最も捷徑ならんと信じ、十四歳の春始めて京橋區山城町十番地女髪結紺屋お若方の梳手に住込しなり、

▲女髪結お愛さん 斯くて三年間の研究は、忽ちにして腕利の名を取るに至り、新橋にお愛さんと云へば、誰知らぬ者なきに至りたり、因って十七歳の秋、彼は師匠方を暇とりて一本立となり、北村甚七郎と云ふ法學生を理想の良人と定めて同棲せり

▲愛子の苦心 北村は一身の都合ありて、常にお愛方より明治大學に通學し、お愛は又北村の學資を貢ぐ可く、一心不亂に勉強して、何一つ不自由なからしめければ、北村も女の心を汲みて、專心に勉學せし結果として、首尾よく卒業し、去る三十一年中には、二十五歳にて辯護士試驗に及第せしにぞ、二人の悦び一方ならず、お愛は處々かけ廻りたる末、其翌年春中良人の爲に、芝區櫻田太左衛門町に辯護士事務所を置き、川越と八王子とに出張所を設け、今や辯護士夫人として、近く手車に乘らん有態なりし、

▲愛子の心底 左れど彼は決して辯護士夫人を以て滿足するものにあらず、一日を女髪結として、一日を辯護士夫人として、隔日に相往來して、硬軟の職に衝り、ウンと稼ぎて後良人を活動せしめんとの心根より、彼は何處までも女髪結として、新橋に聲名を續けたるに、悲しきかな此

▲新進の辯護士 北村は、不幸しにて病痾の冒す處となり、一昨年四月中敢へなくなりしより、愛子の悲嘆やる方なく、多年の苦辛一場の夢となりたれど、今は歎くも甲斐なしと、此旨良人の郷里山口縣に報じ、立派に葬式を行ひたる後、愛子は北村の遺形見なる健一郎(七歳)季代(五歳)の二子を一身に引受け、尚ほ郷里三河よりは實母げん(六十二)及妹千代子(二十二)をも呼寄せて、一身に小供の養育に心を委ね、天晴辯護士の未亡人として、愈操行固く居るにぞ、愛子の名は彌が上にも上りたり、

▲貴婦人の髪結 如上の次第なれば、大方の貴婦人中にも、日本髪に重きを置く人々、即ち川村大將令嬢、板垣伯夫人、柳原伯夫人、樺山伯夫人等は、最も愛子の腕を歎賞され、彼の高平前米國公使夫人、牧野現文相夫人の如き洋行歸りのハイカラ髪も、新橋一の女髪結ならば、束髪も亦隨って上手ならむとて、愛子を迎へて何時も結はせ居らるゝとなり、

科學と廢物

理學士　田中東洋

人智の進み行くと共に、誰しも知る極めて尋常の物を、これまで知らざりし極めて新奇なる用に充つること發明せらる、天然に作られたるものに無益なるものはなし、動物の生活する中に排泄する物、死して後の肉體は植物を養ふものとなり、新たに生れ來るもの丶爲になくて協はぬものとなる、處定めず風のまに〳〵吹き遣らる丶塵が、雲雨を喚び起すの媒となり、また天の色を立派に彩るの効あることは人々の知る所なり、不用のものあるが如くに見ゆるは、其の實不用なるにはあらで、人未だ其の用法を知らざるのみ、製造の全歷史は廢物利用の進歩より今日の不用物は、明日の富源となるやも知るべからず、曾て第十七世紀の頃ボイルなるもの一書を著はして人が充分に使用法を知れる天然物は未だ一もあらざることを論じたり、十七世紀に於ける此の眞理は、二十世紀の今日に於ても同一の眞理を含める言葉也、されども人智の進歩は此間に於て多くの無用物を價ある有用物となせり、三度英國の大宰相となりしパルメルストーン卿の格言に曰く『物の役に立たぬは只塵のみ』とされど、學術の進歩は塵の如きものをも棄てず、之を役に立たぬ地位より引き上げて、金銀と同列に立たしめんとす、

第一の適例は普通のマッチなり、人生の快樂に必要なるもの、我等日常の生活に缺ぐべからざる此のマッチが千八百三十三年に至るまで知られざりしとは、多くの人々の信じ得ぬ程のことなるべし、昔の人が火を鑽り出す爲に如何に苦辛し、之を保存する爲に如何に注意せしか、千四百二十九年の頃には、頸に燧袋を掛けたる人は、其時代の進歩したる人として貴ばれたりき、第八世紀の頃亞剌比亞人ベケルなるもの燐を發見せしが、一たび忘れられ、千六百六十九年に至りブランドによつて再び發見せられたり、其の時の燐は人尿より製造せられしが、其後

更に簡易なる方法發明せられ、今まで顧みられざりし動物の骸骨は、マッチ製造の必要ある原料となれり、千八百三十三年世界最初の燐マッチ製造せられしが、其製法甚だ粗惡にして、製造するもの、使用するもの皆其の毒に苦しみたりき、千八百四十五年に至り、澳地利の都維也納に住めるジュローテルなる人燐を油にて煮る方法を發明し、此に初めて赤色燐のマッチ製造法起りぬ、

古き骨より出でたる原料を以て、容易に火を燧り出すの方法出でゝより日常生活の上に如何に驚くべき變化を齎し來りたるか、マッチの發明ある前には、男子、婦人、小兒各火と光とを得る爲に一年平均九十時間を費せしと云ふ、今日マッチを費すこと一人一日八本にして、一本毎に十五秒を費すとすれば、一日にして二分を費し、一年にして十二時間を費すの割合となる、されば此一事によつて得たる時間の經濟を我國の人口に當つれば一人毎に七十八時間を節し、七十八時間は十日の勞働時間となるべく、勞働賃銀を平均三十錢として、之に代ゆれば、人毎に三圓、五千萬にして一億五千萬圓の節儉をなし得たるなり、

或る製造場の排棄物にして他の工業の材料として用ひらるゝもの甚だ多し、襤褸は此の變化の著しき一例なり、木綿及びリネル襤褸は紙を製造する主要の原料なり、乞食の觸るゝを厭ふ程のものさへも、神聖なる愛情懇切なる、友情を送る爲に用ゆる紙となる、著名なる獨逸の化學者リービヒ男石鹼を以て各國民文明の程度を計るの尺度となせり、これ素より理あるの言なれども、尙木綿、リネル襤褸購收の競爭が最も明らかに敎育の普及、文學の嗜好を表するに如かず、千八百八十七年以後の統計は未だ得ざるも、其の年各國民の費す紙の量は、英國、一人に付き十二封度、合衆國十封度、獨逸九封度、佛蘭西國八封度、伊太利國四封度、(一ポンドは百十二匁程)

毛織物の襤褸に至つては最後の用をなすまでに、更に多くの日を經、多くの道を行く、英國にはバッ

トレー、デユーベリー、リーヅなど云ふ大なる襤褸市場あり、歐羅巴の破れて臭き古ぎ再び流行を支配する織物となつて現はれ、外見と經濟を考ふるしやい、れものは皆之によつて自ら裝ふ、若し其の襤褸少し大なれば『つくろひ師』、『仕立直師』、『細工師』の手に渡さる、『つくろひ師』は、破れたるを縫ひ合せ、原の如き形となす、仕立直は名の如く、破れ汚れたるものを仕立直し廉き衣服を求むるものに賣る、『細工師』と云ふは一等上の職人にて古き上衣の裾の部分より小兒のズボン或はチヨツキを作り出す、若し黑服にしてつくろひ或は仕立直しの出來ざる程に破れたる時は、之を佛蘭西、魯西亞、ポーランドなどに送りて帽子となす、米國兵士の古赤シヤツは和蘭陀に行き、胸當となり、少しく新しきは阿非利加に行き汪及び酋長の威嚴を示す衣服となる、かくて再び用ひられぬ程になりて後、更に解かれ漉かれて下等の布となる、此下等の布また古び再び用ひられざるに至り、他の細工に用ひたる跡、角のくず馬の血などを混じ、灰、金クソなど、共に鐵の釜にて熔かされたるときは、人の目を眩す計りに鮮なるプルシヤ藍となる、

婦人に必要ある香水の如きも、原を質せば、花の油より製せられたるものあれど、多くは酒精をランビキに掛くる時に出づる、臭き油より製せらる、或は廐の流れ液、或は石灰の煤より製造したるものを美はしき額に塗り、其香氣、其光澤に誇る貴婦人も多きなり、瓦斯製造より出づる煤は川に捨つれば川を毒し、地にうづむれば地を荒し、最も取扱ひ惡き無用物と現れしが、今は最も美はしき染料、最も高價の藥品、砂糖より三百倍甘きサツカリン、病素を殺す最良の豫防藥を製するの原料となれり、其用法種々あれど最も大切なる用法はアリザリンの製造に用ひらるゝものなるべし、アリザリン（木の根）と煤とを以て赤、青、紫の、染料を製するの方法發明せられて土耳古、和蘭陀の大耕作業全く衰滅に歸せり、

立派なる染料、最も甘き食品にして此の最も汚き不用物より製造せらるゝことに付きては數十頁を費すとも盡ざるまじき面白き話あれど、其は後に讓り、今は目先の變りたる一の話を擧げて滿足することゝせん、

あらゆる生活物の中鼠程うるさきものはなし、されど、鼠も用ゆれば虎となるとの譬こそなけれ、用ゆれば大工業を起すの原となるなり、佛蘭西の都巴里にては、動物の骨を投げ入るゝ一の大なる洞穴あり、此處に大なる鼠の殖民地開かれたり、鼠は誰しも知る如く、骨に殘れる肉を食ひ去り、之を磨き直ちに燐の製造に用ゆるに適せしむ、洞を圍める壁の下方に數多の淺き穴を穿ち、鼠之に入るときは身體のみは隱れ、尾は隱るゝ能はざらしむ、三ヶ月每に大掃除行はれ、古き骨取出され、新しき骨投げ入れらる鼠は其騷擾に恐れて穴に去り込み、尾を取りて引き出され、捕へらる、かくて製造始まり、鼠が磨き上げたる骨は燐の製造場に送られ、鼠は皮を剝かれ、最上等の手袋となり、筋、骨は煮て砂糖製造所に送られ、砂糖を固むる用に供せらる、

科學は心ある細君の如きなり、有用のものを節し用ひ、無用の中に有用を求む、[illegible]に落ちたる馬の靴は取り集められて刀劍となり、鐵砲となり、麥酒の樽の輪はインキとなる、天然には一の無用物はあらぬ也、余は讀者が此の二三の例によつて、假令科學なるものに其の意を注がれずとも、せめては科學なるものは勤儉なる細君なりとのことを知り、之を師とせられんことを望む、畢竟科學の神髓と云ふべきは此に外ならざればなり、

武家の美人

須藤鳴門

武家時代の美人にも、色々樣々の風あり、彼の唐衣着たる宮女の如きあり、或は椎茸髱なる、御殿女中の如きあり、或は勝山髷に結びなしたる奥方の如

きあり、或は花簪をかざし脇息に凭掛れる佳人の如きあり、吾等の説かんと欲するものは、這種の美人にはあらざるなり、かゝる風姿容儀の美人を謂ふにあらずして、心の奧床しき、意地ある、意氣な佳人を云ふなり、今其代表者として、室町及び江戸時代の美人を讀者に紹介せんと欲す、若し夫れ、今の世の人、元祿美人の扮裝を愛じ給ふ如く、彼の美人を愛させ給ふや否や、

今は昔、室町時代に、内田兵庫助隆昌といふ武士あり、その妻女は、鳴瀧三郎次郎清長といへる人の娘なり、隆昌、勝定院將軍家(義持公)旨に違ふことありて、出仕を止められ、西山の平岡といふ在處に追籠められてありしほどに、朝三暮四の設も既に盡なんとするとき、此妻、弓矢を携へて立出、野畠にあさる鳥を射留て京に持行き、萬の物に交易て、日々の煙を立けるが、或日、雙の岡の邊にてはしたなく將軍家に行會ひ參らせたり、避くべき木陰なども無かりしかば、路の側に蹲踞たり、將軍家あやしみ御覧じて、何故に弓矢を持たるぞと問はせられしにありのまゝに、答へ申せし折こそあれ、向ふ山際に山鳥一羽出で來れり、將軍家、あれ、射よと、給へば、承り候と云ふより早く射落したり、將軍家興に入らせ給ひて、猶鳥を求めたまふに、凡そ二町ばかりを隔てたる田畔に、白き鳥の見えけるを指ざし給ひ、少し遠けれど、あれをば如何と仰せらるゝとき、仕り候はゞやと申して、些し歩み出、またこれをも射落しぬ、將軍家愛まどはして、祿賜はんとて、物を召し給ふを見て、祿には粟一斗を給はらば餘りあらんと云ふ、依て其意を問ふに、今日、はからず御成に參り會ひて、一日の活計を妨げられしと存せしに、御諚にて、鳥二羽射止て候へば、一斗の粟に交易らる程の物實を得たればなりと申す、其理明なれば、粟を賜ひて、且夫の名を問はれしに、夫の知りたることに候はずとて言はず、强て問はれしかば武士の妻に候、一度申さじと申せしものが、度重ればとて、靡き申すべけんや、御暇給ひてんとて

罷りたつ、行くこと一二町にして、又白鷺の群飛を見て、一矢に二翼を射留め、今日は幸よしと打笑つゝゆくを、將軍家はるかに、御覽じ、あの女の歸る家を見認て參られとて、跡を慕ひつゝ追はせられしかば、內田の妻とは知らせ給ひき、かくて後、內田も御前赦免て出仕したりけるとき、自然內田も妻が、射事を能せしをも知て妻にかゝる事や有しと問ひけるに、武士の妻たらん者の、小鳥を射留たる、何の珍らしき事かはと、答へて、紛しつゝ居たりけるとなん、唐土にては、魏の神武帝の孅々公主の角弓を引て、飛ぶ鳥を射落し、爾來妃の長弓を引て飛鳥を射留しと云ふこと北史に見えたり、此は、只其技を傳へて、女性にもかゝる者あるよといふに止まる、彼は、其技は勿論、其心ばへの奥ゆかしきこと、意地あること、實に日本武士の意氣を具備たり、

これはまた江戸時代元祿の頃なるが、北國のある藩に、濱田某といへる士あり、此もの江戸在藩の留守に、妻女產をせしが、いまだ七夜もたゝず、產室の枕に憑り居けるに、或日健なる壯士、血刀提げ產室へ駈込み、拙者儀聊口論の上堪忍ならざるに付、朋輩を討て立退候處、後より追てかゝり、既に危き所を切拔これまで參り候、御屋敷を見かけ、御門內へ駈込候へども、折節御家來中も相見えず、申し入るべき便りもなく、追手火急に候間、不仕付ながら、是まで推參いたし候、拙者は、願ある身に候へば、一先命を全ういたし度さふらふ、何分御匿ひ下され候はゝ、生前の御恩いと忝かるべき旨、息つきあへず申しける、妻女承り、私は濱田某が妻なり、夫は、江戸參勤いたし、留守にて此間產をいたし、如此取亂だし居り候なり、委細の義は存せねども、此屋敷を見かけ、御賴に候へば、成程かこひまゐらすべし、此方へ來り給へとかひ〱しく、取はからひ、已が憑かゝれる枕の後へ入置、衣打かけ、元の如く憑かゝり居ける、然る所士四五人、どや〱と押込、部屋の口へ立はたかり、只今此屋敷へ人を討たる者にげ込たり、早々これへ出し候へと罵りけり、女房

女鑑

明治二十九年十二月一日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月十二日
第拾六年第拾參號　第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷